

東方能開録(完結)

T—ruth

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天童拓也（てんどうたくや）は幼馴染みの化野言音（あだしのことね）を助けるために死んでしまった

しかし、それは神様の手違いのせいだった

神から転生の機会を貰った拓也は東方projectの世界へ

注意：作者は、文章の作成能力がミドリムシ並なため、誤字、つじつまが合わないストーリー、変な文章の作り方など多々至らない点があります、ご了承ください。

目次

第零章 プロローグ

第一話 転生 1

第一章 古代編

第二話 出会い 12

第三話 能力者 23

第四話 軍入隊試験 29

第五話 神様からのオカシナ仕送り 42

第六話 恩返し 49

第七話 チーム結成 62

第八話 緑教官 75

第九話 暗い過去 82

第十話 始動 88

第十一話 音無鈴 97

第十二話 ツクヨミ様の勧誘

103

第十三話 贈物 110

第十四話 初めての気持ち 120

オリキャラ説明 127

第十五話 出発 134

第十六話 絶望 141

第十七話 力の暴走 155

第十八話 RESTART 160

第十九話 教官始めました 173

第二十話 紙の力 182

第二十一話	剛力妹	190
第二十二話	霧の探し物	201
第二十三話	響かせる音	211
第二十四話	月移住計画	219
第二十五話	守る為に	225
第二章 諏訪編		
第二十六話	神様始めました	
238		
第二十七話	大和の国との交渉	
248		
第二十八話	特訓よりも飯	256
第二十九話	祀られました	264
第三十話	神無月の神のお祭り	

		273	
	第三章 飛鳥編		
	第三十一話	神社が増えた	281
	第三十二話	聖徳太子って男だよ	ね
	?		289
	第三十三話	暇な護衛	296
	第三十四話	邪仙と対面	302
	第三十五話	V S 天狗	308
	第三十六話	Level 5 を超える	
			315
	第三十七話	V S 天魔	321
	第三十八話	帰宅	327
	第三十九話	少しの違和感	335

第四十話 尸解仙になるには

342

第四十六話

ヒーローは遅れてやつ

て来る

393

オリキャラ説明2

353

第四十七話

昔の仲間、今の敵

第四章 竹取物語編

第四十一話 境界を操る妖怪

359

第四十八話

逃げるが勝ち

第四十二話 月の姫からの難題

第五十話

神社の名前

422

367

第五章 妖怪の山編

第四十三話 VS花の大妖怪

第五十一話

天狗の山、再び

373

第四十四話

輝夜の頼み

380

第五十二話

あれ？身長縮んだ？

第四十五話

対、月の使者の作戦会

議

388

第五十三話

鬼は嘘をつかない

497	第六十二話	幽々子と西行妖	490	440	第五十四話	破壊の力	447
	第六十一話	紫の頼み			第五十五話	暴走再び、そして決着	
	第六章	西行妖編			第五十六話	妖刀村正	
			483		第五十七話	心の中	469
					第五十八話	昔の話	474
			478		第五十九話	御影閣	524
					第六十話	ゲーム	
					第七章	開放編	
					第六十六話	天童妹が幻想入り	
					第六十七話	開放の鍵	529
					第六十八話	陽菜の特訓	534
					第六十九話	賢者からの忠告	
					第六十三話	恐れていた事態	
					第六十四話	最凶の桜	512
					第六十五話	勝利のための犠牲	
					第五十一話	異変の始まり	546
					第七十話		

第七十一話	灰色の男	551
第七十二話	復活	556
第七十三話	戦闘開始	561
第七十四話	岩雨異変、解決	
565		
第七十五話	光の行方	569
第七十六話	続く異変	573
第七十七話	開放者	578
第七十八話	援助	583
第七十九話	煙の妖怪	588
第八十話	黒い痣	593
第八章 現世復帰編		
第八十一話	今の力	598

第八十二話	帰宅②	606
第八十三話	学校へ行こう	611
第八十四話	帰り道	617
第八十五話	手紙	621
第八十六話	勉強そして、テスト	
628		
第九章 紅魔編		
第八十七話	暑い日、赤い霧	
637		
第八十八話	紅い館に侵入したら閉	
じ込められた件		642
第八十九話	狂気	648
第九十話	助けを求めると．．．	

オリキャラまとめ	670	最終話	670	第九十二話	665	第九十一話	653
—	—	幻想郷は今日も賑やかだ	—	お兄様!?	—	妖化	—
675	—	—	—	665	660	—	—

第零章 プロローグ

第一話 転生

「お前ムカつくんだよ！」

「それはこつちのセリフよ！」

その日、俺、天童拓也てんどうたくやは幼馴染みの化野言音あだしのことねと喧嘩をしていた。

「だいたいお前はいつも……」

「今は、関係ないでしょ!？」

こんな感じでかれこれ一時間程度言い合っているが、一向に収まらない。

「ふん、アンタには失望したわ。」

「ああ、そうかよ。」

「絶交よ！」

「ああ、勝手にー！」

「……ふん!!」

そのまま、喧嘩別れのように俺と言音は別れた。

言音の方は走って横断歩道を渡ろうとしていた。

その時、言音は気付いていなかった、信号が赤なことを……

「ちよ、言音!」

声を掛けるが言音は気づかず進んでゆく、もしくは喧嘩をしているためわざと無視をしているのかもしれない。

今は、それどころではないと言うのに。

ブーとトラックがクラクションを鳴らしながら言音に向かって突っ込んでゆく。

トラックがクラクションを鳴らしたところで言音は初めてトラックの存在に気がついたようだ。

しかし、時は既に遅くトラックのブレーキは間に合うはずがない。トラックは、そのまま言音に着々と近づいて行く

言音は、恐怖で足がすくみ、動けなくなっていた。

「あのバカ！」

気がつくくと、俺は無我夢中で走り出し言音を突き飛ばした。

言音の代わりに、トラックの前を入れ替わるようにして……

ドンと、トラックが俺の体に衝突し、とてつもない衝撃と痛みが体を襲い、俺の体は赤い血をまき散らしながら空を舞った。

ドツサと鈍い音を立てながらコンクリートの地面に叩きつけられた。

肺が圧迫され息が出来ず、血で視界が霞む。体を動かそうと思っても重く、言う事を聞かない。

「~~~~~!~~~~~!?!」

言音が慌てて近づいて何か言っているが聞き取れない。

俺のだんだん視界が暗くなっていった。

「ゴメンな、言音。」

そう一言振り絞るように言い、そして意識を失った……

目を覚ますと知らない場所にいた。

「…知らない天井だ。」

そこは、上も下も右も左も真っ白な空間だった。

「ここホント何処だ？」

「死後の世界じゃよ。」

「!？」

突然の受け答えに驚いて振り向くと、そこには仙人のような格好をした老人が立っていた。

「アンタは… いったい？」

「ワシか？」

いや、アンタ以外に、誰がいるんだよ。

「ワシは、神じゃ。」

「紙？」

「神じゃ！」

「ああ、髪。」

「違う！ paperでもhairでもないわ 神じゃ Godじゃ。」

えー いきなり、自分は、神とか中二病かよ…… こんな爺さんになってまで中二病とか終わってんな。」

「全部口に出てるんじゃないが。」

おっとイケナイ、イケナイ神様（笑）に怒られちゃった。

「何が神様（笑）じゃ これでも列記とした、しっかりとした神じゃ。」

あれ？俺、今も声出したっけ？

「出し取らんよ。」

「!？」

「心の声を読んだんじゃ。どうだ？これで、神と信じてくれるか？」

「まあ、信じてやるよ。で？なんで俺は、ここにいらんだ？」

そう質問すると神様は真剣な顔になった。

「実はのお・・・」

ゴクリと唾を飲み込み続きを聞いた。

「お前は死んだ「あつ、そのへんはなんとなく理解してるんで。」あつ、そうですか。」

ゴホンと咳払いをし、神は続けた。

「実は、お主はまだ死ぬ運命じゃ無かったんじゃ。」

「はあ？それってどういう意味？」

「天界には、魂の火があるんじゃない。それをワシがMAXコーヒーをこぼして鎮火してしまっただんじゃない。」

「えっ？なに俺マツ缶で死んだの？」

マツ缶で俺の魂を消しやがったのか……

「えーつと何と言うか……ドンマイ。」

「糞神がああああ!!」

「ちよつと、まっグツホオオオオ!?」

俺は、殺人神の顔を思いつき蹴っ飛ばした。

神様（笑）回復中

「いや、酷い目にあつたわい。」

「自業自得だあ!!」

ピンピンしてやがるな、コノヤロク！もう一発いつとくか？

「いかんでよい!？」

まあまあ、そんなお主に転生の権利をやろう。」

「え、マジ？」

「マジ。本気と書いて、マジじゃ。」

いい奴じゃん、蹴ってゴメンネ。

「さらに特典も一つ付け「好きなだけ。」え、いや、でも「いいから。」……はい。」

よっしゃ！これで、チーターになってやるぜ！！

「じゃあ、まず、能力に『能力を操る程度の能力』を付けてくれ。」

「ナニソノチート。」

「ほっとけ。」

後、身体能力とかを上げといて。あとは、このままで転生させてくれ、赤ちゃんからとか洒落にならんからな。

あと、住む家と金に困らないように仕送りしてくれ。」

「種族とかも決めれるが、どうする？」

「面倒だからそつちで抽選しといて。」

「じゃあ、それでいいか？」

「おう！」

「行くぞ…… スペラビッチョン、スペラビッチョン。」

呪文だせえな……

「転生〜！」

呪文が終わると同時に、俺の真下に穴が開いた……………えっ？
俺は重力に従って落下してゆく。

「頑張るんじやぞ〜。」

「糞神がああああ!!」

ぜってえ〜、許さんぞおおお!!」

そして俺は、新たな人生を歩み始めた。

第一章 古代編

第二話 出合い

「うおおおおああああ!!」

俺は、糞神様のせいで空に放り出され落下し、そのまま、木の中に落ちていった。体に木の枝が次々と打ち付けられる。ものすごく痛い。

「痛っうう。あれ？転生したのか？」

周りを見渡す限り木、木、木。

転生して放りだされたのは、どこか知らない森の中だった。

「あの駄神め、呪ってやる。」

そんなことを考えていると、ポケットに違和感を感じる。

ポケットに手をつ突っ込み確認すると紙が入ってた。

地図と……能力説明書!!

待ってました能力!

せっかくだから試すか……そう俺は、紙に目をとおし始めた。

「えっと、まず『パラメーター基礎能力アップパワー：スピード(速)アタック(攻)プロテクト(守)テクニク(技)アビリティ(能)の六つがある』。」

パラメーター基礎能力アップ

パワー(力) 全体の力をアップ

スピード(速) 速度アップ

アタック(攻) 攻撃力アップ

プロテクト(守) 防御力アップ

テクニク(技) 技術の模倣

（能^{アビリティ}）特殊能力アツプ　　つてところかな？

よし！それじゃあ、試すか。

少年体験中

よおくし基礎能力^{パラメーター}アツプは大体出来たな。他の能力は能力者がいないと、意味ないからまた今度でいいか。

しかし、一回で三つまでしか出せないのがネックだな……

大体出来たから帰りますか、と地図を取り出した。

しかしここで重要なことに気づいた。地図には家の位置が書いてあったが、現在地がわからないのだ。

やべえどうしよう……

（……ω……）ウーン

「貴方はこんなところで何やっているの？」

不意に声を掛けられた。見ると赤と青の服を着た女の子が怪しげにこちらを見ていた。

転生して放りだされた、って言っても信じないだろうしなここは……

「うーん、迷子？」



私は、薬作りに必要な薬草採取しに来ていた。

「オニナバナ、アメジストセージ、アシタバ、サンナ。あとは、オオバコね。」

日も暮れてきたし早く帰らないと、妖怪に会ったりしたら洒落にならないわ。

「あつた！これで全部ね。」

薬草を集め終えて帰ろうとすると、唸る声が聞こえた。

妖怪かと思つたが見ると男の子がいた。

なんでこんな時間に森で一人でいるのか疑問に思い声をかけた。

「貴方はこんなところで何やっているの？」

すると少年は、少し間を置いて…

「うーん、迷子？」

何故か疑問系で返してきた。

「…いや嘘でしょ。」

「それが本当なんだな。」

なんか信憑性が感じられないわね……妖怪かもしれないから気を付けないと……

「いや、ちょうど人がいて助かったわ。」

男の子はスタスタと近づいて来る。

「近づかないで！」

護身用の弓を向けると男の子は止まった。

「イヤイヤイヤイヤ、初対面の人にそんな物騒なもん向けんなや！」

お父さんはそんな子に育てた覚えはありませんよ!？」

「貴方は私の親ではありません、育てられた覚えがありません!？」

大体今、自分で初対面の人って言ったよね!？」

睨みつけ弦をさらに強く引く。

「あ、ハイ スミマセン。」

「矢、一本いいかしら？」

「ちよちよつと待って!?!俺は、道を聞きたいだけだから!?!」

慌てて男の子は、静止を求める。

「はあ、どこに行きたいの?」

「ここだよ。ここ。」

男の子は地図を出し、指をさす。

「まあ、信じましょう。」

「え?マジ?なんで?」

「そんなに疑って欲しいの?」

「イヤイヤ、そんなことはない。ただ何でかなって。」

「あなたから感じたのが霊力だった、それだけよ。」

「そっか……。俺は、天童拓也だ。拓也でいいぜよろしく。」

拓也は、握手を求めるように手を出してきた。

「私は、八意永琳^{やごころえいりん}。永琳でいいわ。」

「おう、よろしく永琳……。あれ？握手は？」

「別にする必要ないでしょ。」

私は謎の男、拓也を案内することになった。

少年少女移動中

いや、永琳がいて助かったな。家に行けなきや仕送りも貰えないし野垂れ死にする
とこだった。

歩くこと数分で街についた。白い壁に覆われた街は、まるで未来の都市のようだ。

「ハイ、ハイ。」

お？どうやら着いたようだ。

見るの少し大きめの一軒家が建っていた。

「それじゃ。」

「おう、ありがとう。」

永琳は、素っ気なく帰って行ってしまった。

家の中には仕送りのものつぽいダンボール箱が置いてあり、その中を確認する。

「中にはお菓子もあるか……これで近所挨拶でもするか。」

「あら、お菓子ありがとうございます。」

第三話 能力者

家を手に入れて数日間がたった。分かんない事はだいたい永琳に聞いたぜ！つてかほとんど永琳の家にいたしな。

だが、あんまりしつこく行くせいか玄関にパスワード付けられてしまった。クソー、別に来てもいいじゃんか。

「えっと、数字のパスワードか……」

何文字かも分からないしどうしようかな。

うーん。としばらく考えてでた結果は……

「テキストウに入れてみるか……」

だった。

え？諦める？俺の辞書に、そんな言葉は都合のいい時しかない！！

「じゃあ、試しに：： 8ゃ 5ご 5こ 6ろ って単純過ぎてないか。」

と、自分の発想力の無さを悔いていると扉の方からピピツীগチャと甲高い機械音が響いた。

あれ？開いた？マジかよ……



「邪魔するぞ、永琳。」

「……パスワードをつけたはずだけど？」

部屋に入ると、いかにも不機嫌そうにこちらを睨んできた。

「解いたよ、安易すぎだよ。」

「また変えないとね。」

「変えなくていいから！つてか変えないで!？」

「で、何の用？薬作りで忙しいからそこで回れ右して帰ってくれる？と言うか帰って。」

とにかく俺に帰って欲しいようだ。何？俺、嫌われてるの？泣いちやうよ？

「確かに、いつも来て、薬品ごぼしたり薬品ごぼしたり、あれ？薬品ごぼす、しかやってない」

「しかやってないじゃない！」

「まあまあ、今日は用があったから来たんだよ。」

「そう。で、何の用？」

追いつ返すのを諦めたのか、そう聞いてくる。

「能力者って、どこに行けば会える？」

「なんで？能力者を？」

「いや、俺の能力『能力を操る程度の能力』で能力の真似が出来るんだけど、それを試したいと思ってさ。」

「なるほど・・・能力者なら目の前にいるわよ。」

「え？」

『あらゆる薬を作る程度の能力』それが私の能力よ。」

「まじかよ、永琳なんで教えてくれなかったんだよ！」

「聞かれてないから。」

当たり前でしょ？、つて言う感じでバツサリ言ってくる。

「早速やってみたら？」

永琳は、どこかワクワクした感じで言ってくる。

「なにワクワクしてんだよ？」

「別に、もし貴方が能力真似できたら手伝わせることができるから。」

俺を働かせるつもりか！嫌だ絶対ブラック企業だよ！社畜にはならないって決めたんだ！

「で、やってみたら？」

「お、おう。」

ポケットから茶色い紙…… 能力説明書を取り出す。

「えっと、『能力模倣能力名を知る、能力を認識するこの二つが成されると模倣ができる』って書いてある。」

「じゃあ、私の能力は無理ね。認識ができないから。」

「えっ！マジで。残念だな…… 他に能力者いないの？」

「軍の妖怪退治部門に入ればいくくらでも会えるわよ。」

よしならそこへ行くか、そう思い家を飛び出す。

しかし、飛び出して数秒後あることに気づく。軍の場所知らないや……



「で、どこ行けばいい？」

「連れてって行ってあげるから、もうちょっと離れて!？」

気がつとだいぶ至近距離まで迫っていた。慌てて後ろにのけぞる。

「あ、ありがとうな。」

「明日ちようど軍の戦力補充試験があるから、そこに行きましょ。」

「試験って何するの？」

「知らないわ。」

第四話 軍入隊試験

「永琳〜！起きろおおおおお!!」

俺は、試験会場まで連れてってもらうため、玄関で待っていた。

え？なんでいつもみたたく侵入しないかって？

だって永琳のやつ、パスワード変えたあげく、錠前五つ、鍵穴五つ、さらにパズルみたいなロックを付け足しやがったんだよ!!

俺が何したって言うんだよ!!

※注（いろいろしてます）

「んー、おはよう拓也。で、何の用？」

しばらくしてから永琳が眠たそうに目をこすりながら出てきた。

「今日、試験会場まで連れてってくれるんだろ？」

「そうだったけ？」

「シラを切るな！」

「わかった わかった。」

「うあ、テキトウ。」

「わかった？」

「なぜ、疑問系!？」

「準備してくるから待ってなさい。」

そう言って、家の中に戻っていった。早く来ないかな……



「さて、行きましようか。」

「一時間炎天下の下待たした事に関して何もなしかよ。」

「ゴンメンナサイ。ハンセイシテマス。(棒)」

うあ、棒読みじゃん。

酷くねえ？俺が何をしたっていうんだ！！

※注（色々しています）

「さっさと行きましよ、間に合わなくなるわよ。」

それは困る。

俺は、永琳の後をついて行った。



「ついたわよ、あそこに行けば受験登録できるわ。」

「サンキュー。」

永琳と別れてゲートに向かう。そこで入口が二つあることに気づいた。

「あれ？永琳どっちに入ればいい？」

振り返って聞くとそこには永琳の姿は、なかった。
あいつ置いて帰りやがったな、まあいいや人に聞こう……



やっと試験会場まで来れたぜ。

会場の中にはざつと3、400人ぐらいの人が居た。まだ、少しざわざわしていた。俺は、端の方に行き壁に背中を預けた。

「やあ、諸君今日は集まってくれてありがとう。」

前に出た教師ぼついな人が話し出した。その瞬間、騒がしかった会場が静まった。

「今年の受験者数は、400人だ。その中で合格できるのは、戦鬪派、サポート派合わせて40人だ」

うえ、少な…… 10分の1しか受かないじゃん。

「戦闘派から、30人サポート派から、10人選出する」

よし俺、戦闘派にするか。え？なんでかって？受かる人多いからに決まってるだろ？

「それでは、戦闘派、サポート派と分かれて試験を行う、各担当についていってくれ。」



「よし、頑張るぞい。」

「戦闘派の皆さんには、実際に戦ってもらいその戦闘力を見て決めさせていただきます。戦う相手はくじ引きで決めてもらいます。」

さつさと取りに行くかと足を踏み出した時、ドンと誰かにぶつかって倒してしまっ
た。

銀髪の長めの髪で後ろでポニーテールにしている女の子だった。

その子は多分、美人の分類に入ると思うぐらい綺麗だった。俺は、慌てて手を差し伸

べる。

「すみません 大丈夫ですか？」

しかし、その時何かが頬をかすめた。

恐る恐る見ると銀色に輝く剣があつた。

「次やったら殺す。」

怖！何この子!?! 殺気バンバンに出しているんだけど、さつきかわいいとか思ったのなし、怖すぎ!!

銀髪の女の子は、剣を消す[。]と行つてしまった。

いやー怖かつたな、つてかあの剣どこから出したんだ？

そんな疑問を持ちつつクジのほうを見る。まだ人がたむろっている。

残り物には福がある[。]つて言うし最後に行くか、そう思いながらクジの人が減るのを待った。

しばらくすると人が減っていく。もうそろそろ良いかな？クジの方に行きクジを引

く。一個しかない、本当に最後だったな。

「えっと「G-3」か…… 相手はどんな奴かな。」

Gルームに向かいながらそんなことを考えていた。



残り物には福があるって言葉作った奴出てこい、ぶっ飛ばしてやる!!

目の前の相手を見ながらそう思った。なんで相手がさっきの女の子なんだよ。怖いよ! やだよ!! 拓也おうち帰る!!!

「お互い準備はいいですか。」

良いわけあるかと思ってもそんなこと言えない。

「これから天童拓也てんどうたくや対音無鈴おとなしりんの試合を始めます……。それでは、始め!!」

始まちやたよおおお!!



音無は、剣を取り出すと一気に間合いを詰めて剣を振るが拓也は、ギリギリのところ
で躲す。

「あぶねえ!!」

「チィ。」

拓也は、距離をとって能力を発動する。

「パラメーター基礎能力アップ（攻）（守）（速）。」

攻撃力、防御力、速度をアップさせて音無近づき拳を放つが盾が現れそれを防がれる、
そして剣が拓也を襲う。

ザクつと剣が手を捉え手からは、血が少しだけたれた。

「いっ!?!」

これ以上は危険と思い後ろに飛ぶが、剣がそれを追ってくる。

「くっそ!」

拓也は、裏拳で剣をはじくが剣をはじいた後から大量のナイフが拓也襲う。

「息付くヒマ無しかよ。

アタック チェンジ

パワー

(攻) 変更 (力) !!」

攻撃を捨て防御力と速度をさらにアップさせて回避する。

回避の途中気づくと足元に液体があった、嫌な予感がし上へ飛んだと同時に剣山と
なった。

「たつく．．．その能力なんなんだよ。」

着地しながら拓也は音無に問う。

「『金属を操る程度の能力』よ、金属の質量、形状、種類を変えることができるの。」

といいながら大量のナイフを投げってくる。

「そりやすごい能力だ。」

転がりながら回避し起き上がる。

「だがこれで突破口が見えた、」

拓也は、ニイっと不敵に笑った。

「アビリティイコピ能力模倣 コピー模倣対象 リン「鈴」!!」

一瞬青い光が拓哉を包んだ。

そして、拓也は音無が放ったナイフを一つ掴み手ごろな剣にした。

「なっ、私と同じ能力!?!」

「行くぜ!」

間空いを詰めて剣を振るが防がれる。

「剣技の差があるな…… ならパラメーター基礎能力アップテクニク(技)パワー(力)」

剣技コピーしさらに上回る。

「くっ。」

音無は少しずつ後ずさっていく。

「俺の勝ちだろ？」

「ま、まだよ！」

水銀を足元に流し剣山を作ろうとするが……

「アビリティストップ
能力停止!!」

水銀は動かない。

「なんで、なんでなの、なんで動かないの!？」

「お前能力を停止させた。」

「なっ、そんな事！」

「出来るんだよな。まあ、こつちも能力使えないんだけど。」

「く、くっそお!!」

音無は剣を捨て殴りかかって行った

「俺の勝ちだ。」

音無を殴り返し、そして音無は意識を失った。

「よっしやあああああ!!勝った勝つぜ!!」

勝ったことに拓也は喜んでいたが、突如剣山が拓也を襲った。

「がっ!?!」

拓也の体から大量の血が流れ出ていく。

アビリティストップ
能力停止は、能力を停止させる事が出来るがあくまで停止である

最後 音無鈴が作ろうとした剣山が能力を解いた途端発動したのだった。

「やべえ、ミスった……」

そして、拓也の意識は暗闇に落ちた。

第五話 神様からのオカシナ仕送り

知らない天井だ……

「あれ？なんかデジャブ。また死んだか、俺。」

「生きてるわよ。」

声をした方に顔を向けると、永琳が呆れた顔をして座っていた。

「一生目覚めなければ良かったのに。」

「縁起でもないこと言わないで!!」

「まあ、いいわ。」

よくねえよ!?

「貴方は、あれから3日間ずーっと寝ばなしかったわ。」

3日か…… つて3日!?

「それにしてもすごい生命力ね、普通の人なら死んでいたわよ。」

「マジですか…… まあとにかく介抱してくれてありがとう。」

「そう、じゃあ……ん。」

そう手を出してきた。

「えっ、なに?」

「お金。」

「え、とるの?」

「もちろん♪」

3万とられました……



帰ってきました我が家！

見ると。ポストがパンパンになっていた。

神からの仕送りか？

とりあえず、全てを家に持ち込む。

「ん？これ神からの手紙か？」

『おつす、元気が拓也。仕送りの時機が汚くて整理面倒だから色々おくったぜ（笑）そこにあるもんはすべてあげるから
神より』

ふざけてんのか？

「まあいいや見てみよう。」

まず封筒を手を取って中を見た。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能《ギフト》を試すこと望むのならば、

嫌な予感がして手紙を投げ捨てた。嫌な予感は的中して手紙は光り輝き消えた。
あぶねえ！箱庭に飛ばされるところだった。

ん？神からの仕送りであった、MAXコーヒーの箱ずめがない！？
楽しみにしてたのに……



「あっ痛っ！」

「大丈夫ですか？」

「何なんだよこれ…… MAXコーヒー？」

その後。箱庭でMAXコーヒーが流行りました。



次は……レポート？

「なになに、『^レ量^デ産^イ位^オ能^ノ力^イ者^ズ』^レ妹^ス達^タ」の運用 ^レ超^ベ能^ル力⁵者⁵「^ア一^ク方^セ通^ラ行^レ」の^レ絶^ベ对^ル能^力への⁶進^化法

二万人の「妹達」^{シスターズ}を殺害……」

うん、なんか危なそうな話だな。関わらないが吉だなこれ。

次、次。ん？感想文か？

「青春とは嘘であり、悪である。」

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き自らを取り巻く環境を肯定的にとらえる。

彼らは青春の二文字の前ならば、どんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げてみせる。

彼らにかかれば嘘も秘密も罪科も失敗さえも、青春のスパイスでしかないのだ。

仮に失敗することが青春の証であるのなら友達作りに失敗した人間もまた青春のド真ん中でなければおかしいではないか。

しかし、彼らはそれを認めないだろう。

すべては彼らのご都合主義でしかない。結論を言おう。

青春を楽しむ愚か者ども、

砕け散れ。」

コイツ悲しすぎだろ!?!ぜって友達いねな、ぼっち最強とか言っている奴だわ。つてか何この作文なんのお題で書いたらこんなことになるの？



「へっくしゅん!!」

「おにいちゃんかぜ?」

「ああ、誰かが噂しているのかもな。」

「噂してくれるような人いた?」

「……」



色々あるなホント。

ん?なんだかこれだけえらく未来チツイクだな。そう思い、USBぐらいの機会に触る。

『ピピッ!本人確認オコナイマス、天童拓也サマデスカ?』

「え、ああ、はい。」

『ピピッ!声認証確認、本人度99.98%。次ハ顔ヲ認証シマス。』

『顔認証完了。本人度99.98%。本人確認終了。』

そう言つて空中に画面が出てきた。

なにこれ？ハイテクすぎるたる。

えっと……試験合格の知らせ……え、マジ合格したの？

よっしやああああ!!

ん、首席……マジ？

第六話 恩返し

「永琳!!」

「うわあ!!何処から入ってきているの!？」

「え?窓だけでも?」

だって、ドアから入れないもん。ボクワルクナイ。

「窓って…… まあいいわ。それでどんな要件?」

「いやー実は、俺合格しまして、今まで永琳に迷惑かけたし、なんか手伝うこと無いかなーと思いますして。」

「あら、迷惑かけている自覚あったの?」

「ソコまで考えられない人と思ってたの!？」

「ええ。」

「即答!？」

マジか……アレ？目から汗が出てきた。おかしいな。

「そうねえ、手伝う事ね……薬のじつ「却下!!」まだ言いきつてないのだけど。」

「今、薬の実験台って言おうとしたよね!!嫌だよ死にたくないよ!!」

「チィ。」

「舌打ちした!?!」

「じゃあ、薬草採りに付き合ってくれるかしら?」

「それなら、オツケーだ!!」

こうして、二人で森へ移動した。



「じゃあ、そつちの方よろしくね。」

「おう!!」

さあーで、始めますか。

このキノコ食えるのかな？

確か名前は……ベ、ベニ、ベニテングダケだっけ

見た目スパークキノコだしな、マリ〇もデカくなつてたし食べたらデカくなるかも。

「きゃあああああ!!」

……
今のは永琳？



油断したわね……
妖怪しかも鬼に合うなんて。

「ミーツケター。」

「チイ。」

声の方へすかさず護身用の矢を放つが、いとも簡単にあつさりと弾かれてしまう。

「おらー！」

「きゃー！」

腹を蹴飛ばされるが、転がりながら距離を取り矢を放つが鬼の出した液体で矢は、朽ちてしまった。

そして、鬼は次々と液体を放ってきた、それを転がり回避する。

液体は地面に生えている草を腐らせていった。

私は、矢を放とうと弓を構えるが鬼に弓を折られてしまう。

ここまでなの？ 拓也、いつも無駄な時に来ないで、こんな時こそ来なさいよ!!
思っている間にも鬼は、少しづつ近付いて来る。1歩1歩着実に……

そして鬼の手が掛かろうとした時。

「えいりい い いんんん!!」

拓也^{ビロ}はやって来た。



「永琳!!大丈夫か!？」

「たつく、遅いわよ……」

掻き消えそうな声で返してくる。

「よくも、永琳を!!」

膨れ上がる怒りを抑えつつ、目の前の相手を睨む。

「よくも、よくもよくもよくもよくもよくもよくも!!」

「た、拓也？」

「永琳ちよつと待ってて、すぐに終わらすから。」

そう言い永琳をその場にとどまらせた。

「いやー、食べる奴が増えてほんと嬉しいよ。」

鬼は、負ける気がないのかニヤニヤしている。

「まあ、応名乗っておこう、俺様は劣鬼だ

しかも能力持ちでな『劣化させる程度の能力』っていうだ。」

劣鬼はそう言いつつ液体をこちらに向けて放ってきた。とつさに能力を発動させる。

「^{アビリティイコピ}能力模倣 模倣対象^コ「^{りん}鈴」。」

拓也は音無鈴の能力『金属を操る程度の能力』を使用して液体を防ぐ、が液体が触れたところが赤黒くなりポロポロに崩れてしまった。

「ひゃひゃひゃ」

劣鬼は次々と液体を飛ばして来る。ガードを諦め回避に専念することにした。

「パラメーター基礎能力アップスピード(速)!!」

速度アップをし回避し音無鈴の能力で剣を作り斬りかかるが、劣鬼は液体を自分の前に持つてくる。すると、剣が液体を通過するときに、また赤黒くなりボロボロに崩れてしまった。

「オラオラオラオラ」

劣鬼は攻撃を回避しながら拓也は、ブツブツ呟いていた。

「劣化させる程度の能力……植物……腐食………金属……赤黒い……崩れる………そうか。」

なにか閃いた拓也は、また剣を作り劣鬼に向かった。

「さっきので無駄だと分かんねえかなあ?」

劣鬼は、自分の周りに液体を発生させる。そして、剣が液体を斬り裂きポロポロに……………

ならず、劣鬼を斬り裂いた。

「があ!？」

「よし! やつぱりか。」

「何故だ!! 何故、俺様の能力が効かない!!」

「お答えしよう、お前の能力『劣化させる程度の能力』だったけ? お前の能力は草など植物は腐らせていたが、金属は、腐るはずがない、じやなぜポロポロになったか……状況から考えてそれは“サビ”だ。だから俺はサビにくい白金プラチナで作ったつてわけや。」

「そんな事……」

「まあいいや。お前には、永琳の痛みをしつかり教え込まないといけないからな。」

「やめろ! くるな!!」

「基礎能力アップパラメーター (力)パワー (攻)アタック 吹き飛ば屑野郎!!」

拓也は白金プラチナで巨大なバットを作り叩きつけた。

「があ!!」

劣鬼は弧を描きながら飛んでいき見えなくなつた。

「いっちょあがり!!」

終わったそう思った矢先に拍手をしながら他の鬼が出て来た。

「劣鬼を倒すとは、なかなかやりますね。」

「褒めても何も出ねえぞ。」

「手合わせ願いたい。」

そう言いながら鬼は走り出し近づいてきた。もうすでにやる気満々だそうだ。

「我が名は重鬼じゅうき。いざ勝負!!」

「わざわざ自己紹介ありがとう。基礎能力アップパラメーター（攻）アタック（守）プロテクト（速）スピード。」

重鬼の突きをギリギリでかわす。

「うお!!はや!!」

「ふむ。今のを躲すか…なら。」

重鬼は片手を前に出し上から下へ振った。

「なっ!?!おもっ!!」

急に拓也の周りに重さが加わりクレーターができた。

「ふん!!」

「があは!!」

謎の重さによって動けなくなっているとここに重鬼の突きが拓也の腹刺さる。そのまま

ま吹き飛ばされ3度地面を跳ねて木にぶつかる。

「重力グラビティ「重力拳」!!」

「グアハ!!」

口から血を吐きながらフラフラと立ち上がる。意識が朦朧としてる……やばいな、なんか手を考えないと。

何かいい方法は……そうだ!!

「ほう、まだ立つか。だが次で終わらせる!」

重鬼は一気に距離を詰め拳を放つ。俺は宙を舞い永琳の近くまで飛ばされた。

「拓也!?!」

永琳が心配そうに声を上げて近づいてくる。痛いけど、作戦は成功だ。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!」

殴った方の重鬼が悲鳴をあげる。みると、重鬼の右腕がドロドロになっていた。

「能力模倣アビリティコピー 模倣対象コピー「劣れつ」…… お前の相方の能力だよ身にしみたか？」

「貴様!!」

重鬼は、さつきまでの冷静さを失い拓也に突っ込んで行った。

「能力停止アビリティストップ」

能力を停止させると重鬼の速度が一気に落ちた。

「やつぱりお前は重力操作をしてたんだな。能力はそのまんま『重力を操る程度の能力』
だろ？重力を軽くして自分の速度を上げてたんだな。」

拓也は遅くなった重鬼の前に立ち金属バットで殴りつけた。

「グウ!?!」

「お返しだあ!!アビリティイコピ能力模倣コイ模倣対象ド「重」じゆう。重力グラビティンヨット「重力拳」!!」

重力のかかった拳を放ち重鬼に直撃させる。重鬼は、そのまま吹き飛ばされ倒れた。

「よしやあああああ!!あ、ヤバ……」

目の前が歪み拓也は倒れた。

この後、永琳さんに家まで運ばれました。

第七話 チーム結成

「いやーまた、永琳の世話になったな。」

「別にいいわよ。」

鬼との戦い後俺は、また永琳に世話になった。

「それにしてもホントに回復が早いわね。」

「まあーな。」

「それじゃそろそろ行くのね。」

「おう。」

今日から軍の方で寮生活することになったのだ。

「それじゃあ、気をつけてね。」

「あれ？そう言えば今回は金取らないの？」

「いいわよ、それよりも無茶だけはしないでね。あつ、この回復薬持って行って！」

「永琳が優しすぎて逆に怖い。」

「し、失礼ね！」

鬼との戦い以来なんか永琳が優しくなった。

前はちよつとぶつかつただけで邪魔だのなんだの言われたけど最近はずつかると顔を赤くして逃げていく……なんかそんなにも嫌われることしたっけ？

「じゃあ、行ってくる。」

「いつてらつしやい。たまには顔出しなさいよ。」

前は来るなつて言つてたのに……女心はわからん。

俺はそんな疑問を持ちながら軍へ向かつた。

が……

十分後

「……は、どい？」

迷子になった。



あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!! イライラする。何なのよあのドヤ顔は!?! 天童拓也、絶対この借りは返してやる。

そんな事を考えながら私、音無鈴は軍機地に向かって歩いてると……

「あつ! おーい、音無。」

聞き覚えのあるムカつく声が聞こえる。

「おーい、音無さーん!」

「……」

「音無鈴さーん!!」

「……」

「聞こえてますかー! ちょっと、その鈴さーん!!」

「……」

「無視はく寂しいですね。」

「……………」

「あれ？名前違ったけ？」

「……………」

「反応してくださいよ（泣）」

「……………」

「おーい、おーい、おーい、おーい」「うるっさいわね!!」お、やっと反応してくれた。」

「で？何？私今忙しいのだけど。」

「いやーその、道を聞きたくて……………」

「はあ？道？」

この辺別に複雑な地形じゃないのに、迷うって相当の方向音痴ね。

「で？どこへ？」

「あれ？案内してくれるの？」

「して欲しくないの？」

「いや、是非ともお願いします!!」

「で、何処なの?」

「軍の基地です。」

「軍の?あなたも受かったの?」

「つてことは、音無もか…… フッフ、聞いて驚くな俺は首席合格だ!」

「あっそう。」

「反応薄くない!?!」

くっそ!わたし19位だったのに…… 悔しさを押し殺して軍基地に向かった。



音無なんか怒ってんのかな?すごいイライラが伝わってくるんだけど……

「ついたわよ。」

「あ、ありがとうございます。」

「それじゃあ。」

あ、行っちゃた……俺も行くか……

軍基地の中に入るとだいぶ人来ていた。やることがないので、ぼーつとしていると前に教師っぽい人が出てきた。

「皆には、ここににいる人で4人1組でグループを作つて欲しい。」

え、グループ？俺知つている人、音無ぐらいしかないし……音無から嫌われているし……どうしよう。

そんな風に戸惑つてるとガタイのいい赤髪の一人の男が話しかけてきた。

「お前、天童拓也だよな？」

「そ、そうだけどお前は？」

「じゅうりきかなめ剛力要だ。要つて呼んでくれ。突然だけど、俺とチーム組まないか？」

「別にいいけど……またなんで俺と？」

「俺、入試30位でギリギリだったんだ。だから、一位のお前と組もうつてワケ。」

「なるほど……あれ？俺が首席つてどうやって知つたんだ？」

「鈴に聞いた。」

「鈴って音無鈴？」

「そう。」

「もしかして恋人とか？」

「いやいや違う違う。」

要は横に手を振る。

「俺は恵さん一筋だから。」

誰だよ恵って。

「ほかには決まってるのか？」

「おう、俺と恵さん 後、鈴「やっぱいいや。」え？」

「音無いるんだろ？」

「お、お願いだからよ。」

「やだよあいつ怖いもん。」

「一日一個のアイス買ってや「いいだろう。」るから。」

契約を交わした俺と要はがっしりと握手した。

コレでアイス食べ放題!!



俺は要にグループに誘われてついって行った。

「では、自己紹介してきましよう!!」

要が司会を努めだす。

「まずは、俺 剛力要だ！よろしくなー。」

うん 見た目どうりフレンドリーな奴だな。

次は、茶髪の少しカールのかかった長めの髪の女の子が話し出した。

「わ、私は薬師恵やくしめぐみでつす よよよ よろしくします!」

この人が恵さんかちよつとオドオドしすぎじゃない?
深呼吸深呼吸。ヒーヒーフーあ、これは違うわ。

「音無鈴…… よろしく。」

うあ、相変わらず無愛想だな、コイツ。

「鈴く、何ピリピリしてんだよ。」

「なんでもない!!」

下手に刺激しないで!!

最後は俺か……

「天童拓也だこれからよろしくな。」

ここに第七班が結成された。



「いやー、アイスうまかったなー。」

要との約束のアイスを貰って寮に向かっていた。

「えーっと、俺の部屋はA棟の303号室か……ルームメイトどんな人だろう？面白
い人がいいな……。」

希望を持ってその扉開く。

そして中にいたのは……

着替え中の下着姿の音無鈴だった。

「ええ？」

「へ?」

二人して目を丸くする。

現状が理解できない。少しの間沈黙が空間を包む。

「いいから出てけええええ!!」

しばらくして、怒鳴り声と共にナイフが飛んできた。

「す、すみませーん!!」



「ナンデ、アナタガココニイルノ?」

ちよつと、いやすごく怖いです。ほら笑顔、笑顔。

「いや、ここが俺の部屋だからだよ。」

「馬鹿言わないで！ここは、私の部屋よ。」

「あれ？もしかしてルームメイト？」

「冗談言わないでよ！あなたがルームメイトとか。」

俺に言われてもな……

「まあ、いいわ。ルームメイトとしてあなたに守って欲しいことがあるわ。」

まあいいんだ……俺あんまり嫌われてないのか？

「喋りかけない。」

あつ、やっぱり嫌われてました。

「目を開けない。動かない。」

ん？

「息をしない。」

「おい、それ俺死んでるよね!？」

前言撤回!!俺、嫌われてるのレベルじゃない超嫌われている!!

「そしたらベランダで過ごしてもいいわ。」

「部屋の中ですらない!!」

この後、なんとか仕切りを作ることになりました。

第八話 緑教官

俺達第七班は森に来ていた。

「私は、この班を一年間鍛え上げる教官の草壁くさかべ緑だ!!よろしく!!」

深い緑の髪の毛のサングラスをかけた女の人が出た。

なんかオーラがすごいな。

「はい、はい!」

要が元気良くアピールする。

「なんだ?」

「鍛えるって、実際何するんですか?」

「うむ、いい質問だ。今日はみんなの能力の確認と霊力についてだ!皆ついてきたまえ

!!
」

そういう緑教官の後をついて行き岩場に来た。

「よしそれぞれ能力を見せてくれ!!」

「じゃあ、俺から。」

要がくるくると肩を回しながら出てきた。

お、要の能力見るのなにげに始めてだな。

「いぐぜ!!」

要は岩に向かってパンチをくり出した。えっそれだけと思ったら、次の瞬間、岩はド
ンと音を立てて穴があいた。

「俺の能力は『ありとあらゆる物を貫く程度の能力』だ。」

何その物騒な能力……強そうだけど。

「じゃあ。次は、私が。」

音無は知っているからいいか……ということ《割愛》

「あゝ。」

薬師さんが不安そうに手を挙げる。どうしたんだろう？

「なんだ？」

「私の能力『傷を癒す程度の能力』で回復系なんですけど……」
「そうか、ならいい。次。」

え〜！薬師さん回復系なら見せて欲しかったな。回復系持っていないし欲しかったな……まつ、いいか。

「センサー！」

「教官とよべ!!」

「教官!!」

「なんだ？」

「教官の能力を見せてください！」

だって気になるもんこんなにあーら出してるし……強そう。

「うむ、いいだろう。ハアアアア!!」

教官が力を込めると植物が動き出した。

「私の能力は『植物を操る程度の能力』だ!!これでいいか？」

「ありがとうございます。では、俺も行きます『能力を操る程度の能力』です。」

能力模倣 アビリティコピー 模倣対象 コピー 「緑」 みどり

教官の能力を使い植物を巨大な根を出して操り岩をくだいた。

「なっ!？」

「わっ!!」

「おお!!」

「チイ」

教官と薬師さんは驚き、要も声を上げる。つてか音無さん舌打ちしたよね? 酷くない?
?

「よし、これで能力確認は終了だ!! 次は、霊力についてだ!!」

「霊力?」

「霊力について知っているものは……いなそうだな。霊力とは、人間の体の中に流れる力のことだ。」

体の中で流れているのは血液しか知らんな。中国の拳法とかの気みたいなものか?

「口で説明するより見てもらった方が早いな。」

そう言うのと教官は手を出し力を込めた。すると、手の上に青白い球体が現れた。

「これが霊力ですか？」

「そうだ、薬師恵。まあ厳密に言うると霊力を丸く固めたものだが。お前らには、これを出るようになってしまう。霊力が操れるようになれば、この弾をたくさん作り弾幕としても使えるし、剣などに纏わせれば丈夫になる、さらに空も飛べるようになるぞ。」

「「空を!!」」

空を飛べると言う単語に全員で食いついた。

「そうだ、練習をするぞ」

「「おー!!」」

「.....」

音無さんそこは、言おうよ.....



そして練習が始まった。

「霊力は体の中で流れている、体から力を出すのイメージだ!!」

「力みすぎだ力を抜け!!」

「イメージだ！イメージするんだ!!」

そして、教官のスパルタ練習のおかげで一週間で霊力操作をできるようになりました。

第九話 暗い過去

「よっしや！行くぞお！」

俺達、第七班は初討伐任務に出ていた。

「うるさい、バカ。張り切りすぎて、ミスしないでよね。」

「しねえよ、音無こそ足引っ張らないようにな。」

「私がそんなヘマすると思ってるの？」

「あのお、そろそろ目的地なのですが……。」

薬師恵は、オドオドしつつ状況を言う。おつ、もうそんな時間か。

「よし行くぜ！ 音無、要。」

「おう！」

「私は、私でやらしてもらいわ。」

今回の討伐任務は、妖怪の群れの討伐だ。妖怪の数は推定30〜40匹というものだった。

草むらから飛び出すと同時に音無が無数のナイフを飛ばす。そのナイフは、数匹の妖怪の体に刺さる。ギャアと妖怪は、声を上げて倒れる。

動きを鈍らせた妖怪を要が能力を使い腹に穴を開け、俺が音無の能力を使い首を飛ばす。

紅い血が緑の木々を染めていく。

「あつ、私の獲物。邪魔しないでくれる。」

「早いもん勝ちだよ。」

「……」

「あつ、きれた。やべえ、拓也逃げろ!!」

「へ?」

上を見るといつもより大量のナイフがあった。

「鈴符「降り注ぐ刃」!!」

「ちよつと、待つて!!」

俺たちのいるのもお構いなしで音無はナイフを投擲した。妖怪のの殆どは「ギヴァアアアアア」と奇声を上げ動かなくなる。

「よしー」

全て倒したそう思っていた音無の背後から数匹の妖怪が飛び掛る。

それに反応し、ポウチから金属版を取り出そうとした、しかし金属版がきれていた。防御の体制が間に合わない。妖怪の手がそこまで迫っていた。しかし、その手が届くことは、なかった。

「能力模倣アビリティコピー 模倣対象コピー「緑」みどり！」

植物の槍が妖怪を貫いたのだ。

「ふいく。危なかつたな音無、大丈夫か？」

「余計なことしないで、助けてなんて誰も言っていないから。」

「うんうん…… ってあれ？」

予想外の返答に拓也は戸惑う。ここって普通ありがとうだよな？戸惑っている俺を無視して音無は行ってしまった。

「たつく…… 何なんだよアイツ。」

「まあ、そう言っつてやんなて。」

「でもよお。」

「鈴には昔、色々あつたんだよ。」

「色々つてなんだよ？」

納得がいかず要に聞き返す。しかし、要は俺を見ず空を見ながら言葉を濁して言っ
た。

「色々だよ…… そう色々……」

音無鈴の父は、軍の部隊の司令官を勤めていた。

音無鈴の父は、部隊の中でも3本の指に入るほどの実力者であった。

そのため、音無鈴は生まれる前からとても強く強い子だと過度な期待をされていた。

生まれたあと厳しい訓練をさせられていたが少しも成長せず父に追いつかなく大人たちから貶されつづけた。

特訓もいつしかイジメのようになっていた。

心よりどころであった母は、音無鈴が小さい時に病気でこの世を去ってしまった。

音無鈴を助けてくれる人は、いなくなったのだ。

母が死んでから音無鈴は、一人で努力し続けた。

努力して、努力して、努力し続けた。

しかし、音無鈴を認めるものは、誰もいなかった。

音無鈴は、努力した。剣の腕をあげて、能力も開花させた。

しかし、誰も褒めてくれなかった。

いつしか、音無鈴は、人と関わることを拒むようになった。

何もかも自分でやろうとした……………

助けなんていらぬ……………

仲間なんていらぬ……………

私は、一人でいい……………

第十話 始動

「今日は、暇だな。」

俺は大きな欠伸をしながら、隣の要に言った。

「おい、しつかりやれよ拓也。」

要に叱られるが、本当に暇だな防衛任務。

ピンポンパーンポン？

防衛任務

街の周りをおおっている壁、その周辺の森の妖怪の侵入を防ぐことである
ど妖怪は、来ないので超暇
ほとんど

ピンポンパーンポン？

それにしても、音無どこまで行つたんだらう？



数分前

「おい、音無どこ行く気だよ？」

「森の方の確認。」

「危ねえから一人で行くんじゃねえぞ。」

「問題ない。」

「あ、ちよ、待て！」

つてな感じでどっか行っちゃたし……大丈夫かなと、今までの音無を思い出す……うん、大丈夫だろう。にしても暇だな。そんなことを考えていると、遠くから爆発音が聞こえた。

「なんだ今の爆発!？」

「それ俺が聞きたいわ! 兎に角向かってみるか……音無も心配だしな。」

「わるいが一人は残ってないとまずいから、俺は残っているな。」

「おう、よろしくな要!」

無事だろうな、音無。俺は、速度をあげて森に入っていた……



「はああ。」

私は、大きなため息漏らした。

最近、あの馬鹿ども天童と要が妙に絡んできて疲れたわ……特に天童拓也、アイツが特にウザイ。

なんかある事に私の目に入ってきて……あゝ、思い出しただけでイライラしてきた。

ふと、目が動くものを捉えた。あれは、妖怪!?

普通はここで撤退&報告だけどイライラしているしストレス発散相手になってもらおう。

「たあ!」

「ギャヤヤアアア!」

剣で一番近くの奴を斬る。

残りは3匹……楽勝ね。

金属版をナイフに変え投擲する。一匹の眉間に刺さり倒れてゆく。

あと、2匹。

「きやあ!」

振り向いた途端残りの2体の妖怪に吹き飛ばされる。体中に途轍もない痛みが走る。

「何してくれるんだ?」

油断した能力持ちか……だが私能力で、つてあれ?

「あれれ?どうしたのかな?」

私のポウチの中の金属版が木の板になっていた。多分、ニヤニヤしているやつ能力だろう。

さつき、私を吹き飛ばしたやつがまた私を攻撃してくる。ギリギリで回避をしようとするが少し拳がかする。

これぐらいなら、と思ったが痛い。かすった程度のはずなのに痛い。何なのこれ!?

「オイオイ、もうギブアップかよ?」

2匹の妖怪がゆっくりと近付いて来る。

ああ、ここまでか……でも、戦いの中で死ぬるなら本望か……

すべてを諦め、目を閉じようとした時……

「音なあししいいいいいいいい!!」

そいつは、来た。

願ってなくても来る、お人とよしの嫌な奴………
天童拓也が。

「音無大丈夫か？」

なんで？

「怪我とかしてないか？」

なんでコイツは……

「遅くなって悪かったな。」

「…… んで？」

「え？」

「なんで助けたのよ!! 私は、もういいの!! この先、生きてたってどうせ意味ないし、私が死んだって誰も悲しまない!! あなたもどうせ目の前で死なれたら気分が悪いから助けたんでしょ!! そうなんでしょ？」

「なっ、何言っ……」

「誰も手を差し伸べてくれなかった、誰も一緒にいてくれなかった、誰も、誰も、誰も!! 私、一人でいることを望んだの! もう疲れたの!! アナタたちとの関係なんて」

るっさい!!」っつ!!」

「生きてて意味がないだあ? 死んでも誰も悲しまないだあ?」

「そうよ、それが「いいかげんにしやがれ!!」っつ!!」

拓也は怒っているのだろうか、拳を握り締め怒鳴ってきた。

「生きてて意味がないだあ?! 生きてみなきや分かんないだろうが!!」

お前が死んでも誰も悲しまないだあ?! お前が死んだら俺が悲しむ!!」

「そんなの嘘。どうせ上辺だけの……」

「嘘じゃねえ!!」

お前の今までなんて知らねえし、知る気もねえ!! だがな、今まで誰もいなかったなら俺がいてやる!!

お前が困ったり苦しんだりしているなら俺が手を差し出してやる!! お前が一人で寂しいなら俺がそばにいてやる!! 俺が、お前の力になってやる!!」

「何言って……」

言葉が出ない。反論しおうに言葉が出ない。

「お前が今、闇のどん底にいるなら俺がその手を取って引き上げてやる!!
だから、そんな簡単に死んでもいいなんて言うな!!」

天童拓也は手を差し伸ばしてきた。

「……………」

私は、今まで人を避け続けてきた。自分が傷つかないためだった。逃げていたのだ、人を信用することが出来なくて、でも、コイツは……………コイツなら……………

「わ、私を裏切らない?」

「ああ。」

「私の支えになってくれる?」

「ああ。」

「本当に?」

「本当だ。」

「本当に本当に本当に？」

「本当に本当に本当に本当にだ。」

「たくやあ、私に力を貸して。」

「当たり前だ。」

困っている時に手を伸ばしてくれる人がいなかった。

助けてくれる人がいなかった。

誰もいなかった。

でも、今は違う、拓也がいる。うんうん、拓也だけじゃない。きつと、要も恵も……

私は、拓也の手を取った。そして、それと、同時に私達は光に包まれた……

第十一話 音無鈴

「うお!!」

何だ何だ!? 音無の手を引いた途端になんか光ったぞ!!

「何だったのかしら?」

「いや俺が聞きたい……………」

「まあいいか。それじゃあ…………… やりますか。」

「おう!」

「敵が増えたな、援軍を呼ぶか?」

「そうするか。テメエ等こつち来いや!」

うお!? 声でつか! 鼓膜が敗れるかと思つたわ、なんて考えていると、妖怪が集まってきた。

2、4、6、8…………… うん。多いな。

「こりゃあ、不味いかもな。」

「拓也。」

「何ですか？音無さん？」

「鈴でいい。」

「んじゃあ、鈴さん。なんですか？」

「そう言えば、いま金属がないから私、戦えないんだった。」

「……え？マジ？」

「マジ。」

そりゃあ無いよ。鈴さんこの量一人でやれって？

「呑気におしやべりしてんじゃねえよ！」

うだうだ考えていると妖怪が爪を立てて襲いかかってくる。

「ちよつと!! ああもお!! 基礎能力アップ（パワー）（攻（アタック））（守（プロテクト））!!」

爪を受け止め蹴り返すが、次々とほかの妖怪が襲いかかってくる。くつそ！きりがねえ!!



ど、どうしよう……私、金属がないとろくに戦えないし。

私は、何も出来ずに拓也の戦いを見ていた。すると、拓也の死角から妖怪が飛び込んでくるのが見えた。声を出しても間に合わない。金属があれば……能力が使えれば……

そして、拓也にその鋭い爪が近づく。思わず私は、目を閉じた。

すると、聞こえてきたのは悲鳴でもなく、叫び声でもなかった。聞こえてきたのは、ガツキンと甲高い金属音だった。おそろおそろ目を開くと、そこにはいつも自分が作る盾が現れ拓也を守っていた。

「あ、あれ？」

「サンキュー、鈴！」

「くっそ！よくもやりやがったな!!」

仕留めそこねた妖怪の一匹が襲いかかってくる。そこをカウンターで迎え撃つ。金属の棒を作り出し妖怪を打ち飛ばした。

「さっきのお返しよ！えい!!…… ってあれ!？」

私は、妖怪を吹き飛ばしてから違和感を感じた。金属の棒いつも作れる大きさの倍の大きさだったからだ。

なぜか能力が全体的に上がってる？なんでだろう?…… ってか重っ!!
手に持つてる金属の棒の重さに耐えきれなくなり、ドスンと、尻餅をうってしまった。

「やったな、鈴。」

「うん」

周りを見渡しても妖怪はいない。どうやら残りは逃げていったようだ。

「大丈夫か？」

拓也が手を差しのべてくる。私は、その手を取って立ち上がる。

「うん？ どうした？」

「え!?! 私なんか変？」

「いや、少しニヤついてたから……………」

嘘お!?! 私ニヤついていた!?! 顔よ戻れえ戻れえ!

「顔も赤いし本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ!!」

「何慌ててるんだ？」

「もう、なんでもないってば!!」

「あつ、ちよつと!! 待ってくれよお。」

この日、私に仲間大切な人ができました。

第十二話 ツクヨミ様の勧誘

やっちまった……………能力の使用の練習してたら思っ切りミスった……………
やべえ、街の真ん中に立っている高いビルに思いつき突き刺さってる
よ……………

今は、鈴の能力を使いランスを作り、要の能力で貫通力を上げる特訓をしてただけ
ど……………思いつきすっぽ抜けました……………後で呼び出しとかないよな。



「拓也あ。ツクヨミ様がお呼びよ。」

はい、呼び出されました。永琳さんその情報は、欲しくなかったよ。ってかツクヨ
ミって神じゃん！この世界 神が普通にいるのか。

「私も行くから早くしなさい。」

はあ、行きたくねえ……………



うあ、近くで見るとほんとデカイな。東京スカイツリーぐらいあるんじゃないかな？

「何してんの早く乗りなさい。」

エレベーターっぽい物に乗って上へ向かう。ホントここの技術どうなってるんだ？

ピンポーン サイジヨウカイデス

お、ついた。怒られるのかな……………

「ツクヨミ様、天童拓也を連れてきました。」

見るとあの駄目神と同じような格好をした金髪の女性がいた。いや、駄目神と一緒にしたらいけないな。なんかもつと神々しい。と言うか何あれ？ ものすごく美人。

あの人になら叱られたい……………なんて嘘ですよ!!わたくし、そんな変態じゃないですよ!!おいその奴、引いてんじやねえ!!

嘘だから!!冗談だから!!

「あなたが天童拓也ですか？」

「あ、その、はい……………」

怒られんのかな、怒られるだけじゃなくて監禁刑とか死刑とか……………いや、考えすぎだよな？

「天童拓也さん、アナタ……………」

「ひゃい!!」

やべえ、神様の後ろに漫画みたいなゴゴゴゴゴゴみたいな感じの見えるよ。

ようしこうなったら……………走り、ジャンプし、空中で3回転そのまま土下座。これぞ空中三回転ジャンピング土下座!!

「すみませんでしたあああああ!!」

これでどうにかなるかな?ならなかったらどうしよう……………

「え?」

「……………え?」



「いや、違う違う。このビルを壊しかけたことを怒るために呼んだんじゃないよ。と
言うかこのビル自動再生するし。」

「どうやら俺の早とちりのようでした……………えっ?自動再生するって言った?どんな
機能だよ……………」

「あつ、そう言えばなんか金属刺さってたわね。」

永琳さん掘り返さなくていいですよ。と言うか掘り返さないで!!

「で、本題に入ろうかしら…… 拓也君。」

「はっ、はい!」

「私の専属ボディーガードにならない?」

「はい……………ってはい?」

「だ・か・ら、私の専属ボディーガードにならないかって言っているの。」

「えっ、ええええええええええええ!!」

「どうして拓也を?」

「いや、なかなか面白い子だし。能力もなかなか強力だしさ。」

「な、なるほど……………」

「で、どうする?」

俺は……………

「折角ですがお断りさせていただきます。」

「えっ!?なんでよ拓也。ツクヨミ様直々に誘ってもらったのに。」

「理由を聞いてもいいかな?」

「俺は、今が楽しいんです。永琳がいて要がいて恵さんがいて教官がいて、そして鈴がいる。」

「この今が楽しいんです。もつとみんなと一緒に戦ったり話したり バカやったりしたいんです。だから…… スミマセン。その話は受けられません。」

「拓也……」

「素晴らしい!そういうことなら仕方が無い私は、諦めよう。ただ、気が向いたらいつでも来てくれよ。」

「はい、分かりました。」



「お菓子とかあるから、いつでもおいでねー。」

「失礼しました。」

エレベーターに乗り下を指す。なんか、変わった神様だったな……

ふと、時計を見ると防衛任務始まっている時間だった。
やべえ、鈴に怒られる。

俺は、全力で街をかけていった。

第十三話 贈物

今日は、この前合同任務で一緒に活動したガールズチームの第5班の人達と恵と一緒にデパートに来ていた

拓也と要も誘おうとしたんだけど

要が何か用事があるからって拓也を引っ張って行ってしまった

もお 今日私の誕生日だから もうちよつと考えてくれてもいいと思う

はあー 拓也に祝ってもらいたになー

「どうしたの？ 鈴ちゃん」

第5班のリーダーの墨野すみのえり絵里さんが聞いてくる

「いえ、なんでもありません」

「？」

私は、何を考えているんだ

あゝもゝ

悶える鈴を皆が不思議そうに見る

「あ、皆さん つきましたココですココ」

恵がはしやぎ出す

なんでもここは、とても美味しいと有名なデザート専門店なんだとか

「さあ 行きましょう 早く さあ」

「恵ちゃん 落ち着いて デザートは、逃げないから」

「あ、その……… はい」

恵は、我に返ったように真つ赤になっていた

絵里さんナイスです

周りの人の視線が痛かったので

うーん 当分デザートは、いらない………

美味しかった 美味しかったんだけども

なんなんなの？あの量 普通に多いよ 半分しか食べれなかった

で、恵は、なんで完食しておかわり頼もうとしてるの？

次は、つてあれ？

あれは……………

向こうに見覚えのある二人を見つけた

「おーい 拓也、要」

「!!」

「ん? どうかした?」

あきらかに反応がおかしい

「べべべ別に、なあ拓也」

「そそそそうだな、要」

怪しい

「なんか隠してない?」

「そそそそんなわけあるわけ無いじゃないですかー」

絶対怪しい

「本当に?」

「ホントだよ? ボクたち、ウソ ツカナイ」

「どうしたんですか? あ、拓也さん 要さん」

「おう 恵 奇遇だな」

「そうですねー」

「あ、ねえ恵 こいつらn」どうしたこんなところで」
遮られた

「あ、第5班の皆さんと一緒に回ってたんです」

「そうか、じゃ俺ら用事があるから」

「じゃな」

「あ、ちよ待ちなさ……………言っちゃった……………」

なんか絶対隠してる

「鈴ちゃんー恵ちゃんー行くわよー」

絵里さんに呼ばれ渋々戻る

次に服屋へ行ったり、本屋へ行ったり、ゲームセンターで遊んだりした
服屋でみんなの着せ替え人形にされた

恥ずかしかったー

なんなのあの服 きわどすぎるでしょ!!

みんなと遊んでるうちに日が暮れて来た

「じゃあ そろそろお開きにしましょう」

絵里さんの提案で解散し寮へ向かった

帰ったら拓也に蛭のこと問いただしてやるんだから

寮に付き鍵を開け入り電気をつけた

パン パン

「え?」

電気をつけた瞬間にクラッカーがなった

「「「お誕生日おめでとう」」」」

「え？ え え？」

状況が理解できない

「どうだ鈴？ 拓也考案のサプライズパーティー」

「いや、要別に俺考案とか言わなくていいから」

「鈴ちゃん何歳になったの？」

「おめでとー」

それぞれが思い思いに言い出す

「理解できない顔だな」

拓也が笑顔で近づいてくる

「要に、お前の誕生日を聞いてなおどかしてやろうとサプライズパーティーを考えたわけ、それで、お前の意識をそらしてもらうために第5班の皆さんと恵さんに手伝って貰ったんだ」

つまり、私の誕生日会を開いてくれたということ？

誕生日会なんていつ以来だろう？母が死んでからやってなかったな
そう思うと自然と涙が溜まってきた

「拓也……」

「ん？」

「ありがとー」

「うお」

感情が高まり拓也に抱きつく

ヒューヒュー アラマー ヒャー

「は!？」

我に返る 目の前には、拓也がいる

顔が熱くなるのを感じる

「うあああああああ」

「グホ」

ドッシーン

「痛たー 何すんだよ!!」

「いやその……ゴメン」

「まあ今日はいいか 今日、楽しんでいけよー」

「じゃあ 私からプレゼント」

「ありがとうございますすって ある服じゃないですか!!」

服屋で着せさせられた白のクノイチのような服だった

「可愛いからいいかなって」

「そんな、こんな服着れませんよ」

「似合うと思うのに…… ねえ拓也君？」

「え、その、か、可愛いと思うぞ」

「…… まあ 一応もらつときます」

なんだろ心が変な感じ

「鈴 この食べ物とかの経費で俺、金なくなったからプレゼント勘弁で」

「まあ、それならいいわよ 要」

結構豪華だしそれなりにお金も使っただろうし

「それと、最後 拓也」

「わかつてるから押すな…………… えっと、その… 鈴に似合うと思って買った」

拓也に渡された箱を開けると腕輪が入っていた

鈴蘭の彫刻が施された銀色の腕輪だった

「どうかかな？」

「……………」

「あ、気に入らなかつたら付けなくてもいいから」

「拓也……………」

「ありがとう……………」

「私は、腕輪をつけた

また一つ大切な思い出が増えた

第十四話 初めての気持ち

最近何かがおかしい

朝、いい匂いで目が覚める

キッチンに行くくとエプロン姿の拓也が朝食を作っていた

「お、起きたか おはよう」

「つつ」

顔が熱くなるのを感じ、目を逸らす

「どうした？ 顔赤いぞ熱でもあんじやないか？」

ピタ デコアワセ

「く!?く!!」

「熱っう!! 大丈夫か？ 病院に行くか？ 永琳のどこ行くか？」

「いいから早く離れろ」

「ゴフウ」

やっぱり 何かがおかしい

「なんですか？相談って」

恵とベンチに座る

「いや、大したことないんだけど……」

実は最近体の調子がおかしいの

ある条件下でのみ体に変調が変化するという今までにないものなの」

「どんな時にですか？」

「それが……ある人の前では胸が苦しくなって顔が熱くなって、その人の前では会話もまともにできなくなって……」

「それって」「ねえー」

緑教官

「青春しているなー」

一体何なんだろう……………

ん？あれは……………

見ると第5班の絵里さんと子穂さんがいた

あの二人なら……………

「え？」

「それって……」

「ねえ……」

「心あたりがあるんですか？」

知りたいこのモヤモヤ

「え…… えーと、それは多分……」

鈴ちゃんは「恋」をしてるんじゃないのかしら

え？ 鯉？ こい？ コイ？ 恋!?

「そそそそんなことあるわけないじゃないですか」

「えーほんと？ じゃあその人のこと思い浮かべて」

…… シュー ポン

「やっぱり」

「違いますって!!」

疲れた……

あの後二人にあることないこと聞かれた

「あ、鈴さん」

恵！

「で、どうでした？」

「うーん、恋って言われた」

「恋!!? え!!? 恋!!?」

顔を真っ赤にして恵は言う

なんで、あんたが赤くなってんの？

「そうですか、恋ですか」

「もーそんなんじゃないって」

「でもその人の前だとドキドキして喋れなくなってしまうのでしょう それってやっぱ
り恋じゃないでしょうか？」

「もー違うってばー」

「では、もう一回その症状聞かせてください」

「えーと。まずその特定の人の前では動悸が……………」

「ふーん それって 恋 じゃねえー？」

ちようど拓也が通りかかる

「違うわー！！」

ナイフを投げつける

「ちよ あぶな うお ギアアアアアアアアア」

今日は、疲れた

オリキヤラ説明

オリキヤラ説明

第7班

天童拓也（てんどうたくや）

性別 男 身長 165cm

種族 人間？

年齢 17歳

能力

『能力を操る程度の能力』

基礎能力アップ
パラメータ

基礎能力値を上げる

(力) パワー すべての能力値を1.5アップさせる(攻) アタック 攻撃力アップさせる(守) プロテクト 防御力アップさせる(速) スピード 速度アップさせる(技) テクニク 技術の模倣する(能) アビリティ 特殊能力アップさせる

一度に使えるのは三つまで

アビリティコピー
能力模倣

能力名を知る、能力を認識する

この二つの条件を満たせば相手の能力が使える

一度に使えるのは一つまで

アビリティストップ
能力停止

相手の能力を停止させる

自分も能力が使えないくなる

少しおちやらかな温厚で優しい男の子

神の手違いで死んで転生した転生者

茶髪の髪でアホ毛が立っている

中性的な顔だちをしている

音無凜（おとなしりん）

性別 女 身長 163cm 種族 人間 年齢 16歳

能力

『金属を操る程度の能力』

金属の種類を変換

金属の質量を10倍〜10分の1に変化させる（11話の時点で100倍まで）

金属の形状変化

いずれも金属に触れてないと不可

周りの大人に貶され心を閉ざしていたが拓也の言葉で心を開き出す

世話焼きである

銀髪でポニーテールにしている

腕には、拓也にもらった腕輪を付けている

剛力要 (ごうりきかなめ)

性別 男 身長 181cm 種族 人間 年齢 17歳

能力

『ありとあらゆる物を貫く程度の能力』

なんでも貫く

以上!!

鈴の幼馴染み

明るいまードメーカーで全体の雰囲気上げる

恵に恋をしている

拓也とは、親友

薬師恵（やくしめぐみ）

性別 女 身長 159cm

種族 人間

年齢 16歳

能力

『傷を癒す程度の能力』

傷を治す能力

傷が大き過ぎると直しきれない

大人しめで臆病な子

誰にでも敬語を使う

鈴の相談相手によくなる

美味しいものには目が無い

以上主要メンバー

後はテキストで

第5班

墨野絵里 (すみの えり)

性別 女 身長 174cm

種族 人間

年齢

18歳

能力

『絵を具現化する程度の能力』

第5班のリーダー

生糸小鞠 (きいと こまり)

性別 女 身長 164cm

種族 人間

年齢 16歳

能力

『繊維を操る程度の能力』

第5班ムードメーカー

原子穂 (はら しほ)

性別 女 身長 154cm

種族 人間

年齢 17歳

能力

『原子を操る程度の能力』

無口な子 試験第二位

夢彩結 (いぶき ゆい)

性別 女 身長 154cm

種族 人間

年齢 15歳

能力

『五感を繋ぐ程度の能力』

慌てんぼうで、おちよこちよい

です

最後の方テキストでスマセン m (|) m

第十五話 出発

軍に入って一年が経った

俺たち第七班と第五班はツクヨミ様に招集をかけられていた

「いきなり召集かけて何だろうな、なあ要」

「さあ まあそこそこ重要な事なんじゃないか？」

要と喋りながらデカイビルに向かう

「ほーら、一人ともチンタラしないでさっさと行く」

合流した鈴が背中を押す

えーもうちよつとのんびりしたいんだけどなー

.....

.....

.....

ビルにつくと第五班の皆さんや恵さんがもう来てた

「オツス」

「こんにちは拓也君」

8人揃ってビルの最上階へ向かった

今思ったけど男子と女子の比率おかしくない？

2：6って

「よく来てくれましたね」

「そりゃ 呼ばれば来ますよ」

「こら拓也、言葉使い」

鈴に怒られた

別にいいじゃん

「で、用件とは？」

「それがね、森の北の方に強力な妖怪が現れたようなの
その妖怪の討伐をお願いでき
るかしら？」

「妖怪退治なら得意ですよ」

「じゃあ、お願いしても」

「オーケーです」

腕がなるぜ

「あ、数名死人が出てるから気をつけてね」

え?..... 死人?.....

「死人って大丈夫なのですか?」

それな

「大丈夫でしょ」

軽!!

「まあ だから君たちを選んだんだけどね

チームランキング一位と二位さん」

「はあ、分かりました」

鈴!!もつと頑張れ!!

って届かないか

しやーない、気引き締めて行こう

出発する前に永琳の家に行くか……………

いやー久しぶりだな

来いって言われてたけど全然来れなかったしなー

ガチャ

「おーい 永 r 「拓也……………」」

ドスン

痛い

「永琳さん、永琳さん？いきなり飛びついてこないでくださいよ、後頭部思いつきり打ちましたよ」

「あなたがちつとも来ないからよ　それでゆつくりしていける？」
「あくちよつと無理」

任務説明：・・・・・・・・・・・・・・・・

「死人!?　大丈夫なの？」

「大丈夫だつて」

永琳は、心配症だな

「俺は、第一位なんだぜ　全員守って帰ってくるさ」

「そう・・・　気をつけてね」

「じゃあ、そろそろ「待つて!!」・・・ん？」

なんだろう？

ガサゴソガサゴソ

「はい、回復薬」

たんまりと回復薬を出してきた

「あ、ありがとう」

正直こんなにいらないな・・・・・・・・

みんなに分けるか……………

「遅い!!」

「なんだよ、時間には、遅れてないだろ？」

何怒ってんだよ鈴は、

「いやらしいぐらい びったりね」

「じゃあ いいじゃん」

「そういう問題じゃない!!ちゃんと集合時間の5分前には来なさいって言ってるでしょ」

あゝそんなことあったような……… なかったような………

「とにかく出発しようか」

ナイス要

「んじゃ 行きますか」

目的地に向かって歩を進めだした

この時まだ俺は、知らなかった絶望へ着々と近づいていることを………

第十六話

絶望

「そう言えば鈴、お前そのくノ一服着たんだな」

「な、べ、別にいいでしょ!!前の服より動きやすいし軽装に見えて結構、防御力高いし」

へーそうなんだー

「それに、拓也がイイっていたから」ボソ

「え?なんて言った」

「なんでもない!!」

あ、怒ちやった……顔真っ赤にしてるし相当怒ったのかな?で、なんて言ったんだ

ろう?

おい要、笑うな

「はあー まだつかねえーの？」

「まだ出発して、30分も経ってないのよ？」

「あれー？ おかしいなー？ 俺的には、3時間ぐらい歩いたと思ったんだけど」

「あんたの体内時計狂ってんじゃないの？」

「鈴、腹えぐって直してやったら」

「そうね、じゃあ早速」

「早速、じゃねえよ!! その工具しまえ!! 要も物騒なこと提案してんじゃねえ!!」

「なら、文句言わずちやつちやつと歩く!!」

「…… はーい」

あー休みたい……………

「では、7班の皆さんここから別行動ですね」

5班の人はもう一ヶ所の出現ポイントに向かうためここから別行動になる

「おう、気をつけてな」

「そっちな」

そう言つて5班の人たちと別れた……………

歩いて、歩いて、歩きまくって、やっとのことで目的地周辺までついた

途中鈴に殺されかけた……なんで俺敵じゃなくて味方に殺されかけてんの？

「じゃあ休憩しましょうか、万全の状態で戦いたいですもんね」

「賛成ー恵さんの意見に賛成ー 休も休も休もう」

てか、もう動けん

「拓也五月蠅い、そうね少し休みましようか」

ヤッターー

「じゃあ私が能力で癒しますね」

あー癒されるー

あれからなんやかんやあつて……

今、敵っぼいの見つけました

「敵は2、4、6、8……かなりいるわねえ……」

ぱつと見30匹位いるな……

「で、どれが強敵だ？」

「わからん」

「だろうな……」

「で、どうする？拓也、鈴」

「「いつも通りぶつ飛ばす!!」」

「さいですか……もしもの時はどうする？」

「もしもの時？」

「敵がめっちゃ強かったら？」

「大丈夫だって、なんとたつて俺がいるんだぜ!!」

「まあ、そうだな」

「それじゃあ、二人とも行くわよ」

「「おう!!」」

それじゃあ、気合い入れて行くか

「行くわよ、3・2・1 Go」

「よっと」

剣で次々と妖怪を切りつけていく

「ギア」

後ろから妖怪が飛びかかる

「しまっ」

反応が遅れて対応が間に合わない

「あぶねえ」

要が、俺に飛びかかる妖怪を吹き飛ばした

「サンキュー、要」

いまのは、危なかったわ……………

あ、囲まれた

「降り注ぐ刃」
レイン・ナイフ

「ギアアアアアアアア」

この技は……………

「二人と何やってんの？」

「鈴!!」

「二人ともガンガン行くよ!!」

「おう」

よーし行くぞ…… そう考えていると要が吹き飛ばされた

「な、要!!」

「ツツ 痛てえ」

「大丈夫なの」

「ああ、なんとかか……」

なんなんだ、強敵か

前を見ると狼のような妖怪がいた

「恵さん!! 要の傷を」

「あ、はい!!」

要は、これでいいとして

これ、相手ヤバイかもしれないな………

本能的にヤバイって感じる

まあ、でも俺ならやれる

「基礎能力アップパ
ラメータ（力）ア
タック（攻）ス
ピード（速）」

一気に畳み掛ける

”行動”を不可能にする」

「な!?!」

体が動かない!?!

それと同時に妖怪が拳を振るうのが見える

回避しないとマズイ!!

”回避”を不可能にする」

体をひねって回避を試みようとしたが拳が腹に吸い込まれるようにささる

「グア」

地面を転がり数メートル転がって止まる

痛つてえーモロモロに喰らちしまった

やべー近づいてきてるよ

「拓也!!」

鈴が、俺と妖怪の間に入り込み剣を振るが当たらず空を切る

「恵!!」拓也をお願い!!要は援護をよろしく」

「お、おう」

要と鈴が妖怪に飛び掛るが一瞬にして消える

「消えた!？」

「どこ行った!？」

俺も辺りを見渡すが見つからない

逃げたのか？

「ふむ、こやつが回復をさせているのか」

「!?!?!」

いつのまにか俺と恵さんの後ろに立っていた

恵さんが標的か!!

「恵さん逃げろ!!」

「遅い」

その妖怪は、恵さんの体を蹴飛ばした

「!?!?!」

恵さんは吹き飛び地面に叩きつけられ動かなくなった

「テメエ、よくも恵さんを!!」

「よせよ!!むやみに突っ込むな!!」

俺の制止を聞かず要は拳を振るう………が

”攻撃”を不可能にする」

拳は、直前で止まってしまおう

「な!?!」

「遅い」

回し蹴りをし要を蹴飛ばす

「グア」

「要!!」

くつそ、なんなんだあいつは!!

能力か?

不可能にする?..... 不可能にする程度の能力か?.....

なら

「アベリリティストツ能力停止!!」

これで、アイツは能力を使えないはず

一気に畳み掛ける!!

「ウオオオオオオオオ!!」

剣を持ち斬りかかるが

クソ、当たんねえ!!動きが早すぎる!!

剣を振り続けていると死角から鈴が飛び込み剣を振る

よし、当たる!!

そう思った、だが

”攻撃”を不可能にする」

「な!?!」

攻撃が止まった鈴の手を掴み、俺に投げつける

「キヤア」

「ウオ」

二人とも地べたに倒れる

くっそ、なんで俺の能力が効かない?

俺とは、次元が違うってのか?

ヤバイな、本格的に

要と恵さんは、意識失っているし、鈴と俺は、ボロボロだ
一步一步妖怪が近づいてくる

力を込めだした途端、紫の球体が現れる

「付与、”生命活動”を不可能にする」

「何やってんだよ？なんで庇ったんだよ!？」

「わ、か、らない…… 無意識に、足が、かっつてに、うごいて、た……」
途切れ途切れで喋る鈴

手を俺の頬の頬へ伸ばす

「拓也、わ、私、貴方となら……」

鈴の手は頬に届く前に地面に落ちた

「り……ん!!」

この時俺の中の何かが目覚めた

第十七話

力の暴走

鈴が死んだ？

なぜ？

俺のせい？

俺にもっと力があれば

するところからか声が聞こえた

”力が欲しいか？”

力が欲しい

”奴が憎いか？”

あいつが憎い

その時体中からどす黒い力が溢れだし俺を包んだ
そこで俺は、意識を失った……………

狼のような妖怪は、雑魚妖怪に任せその場を去ろうとしていた……………が
突如現れた強い力に足を止めた

力の方は、さつき戦っていた人間たちの方である、だがそれは、ありえない筈である
その感じた力は ” 人間 ” の力、霊力でないのだ

「なんなんだ」

名も知らぬ少年のほうを見て、その妖怪は、自分の目を疑った

その少年、拓也は見違えるように変化していた

髪は短い茶髪が膝あたりまで伸び真っ黒になっており

アホ毛を挟むように耳があり、腰にはボサボサした尻尾が生えている

目は光を失い青から赤色になっている

そして、右手は獣のように荒々しく鋭く、鎧を纏っているように角張っており、禍々しさを放っている

「な、なんなんだ貴様」

「……」

応答は、無い

すると地面に吸い込まれるようにしてその姿が消えた

「な!?、グア」

妖怪の後ろに拓也? が現れ右手で切りつける

「くっ」

距離を取ろうと妖怪はジャンプをするが

地面から黒い無数の手が伸び足を掴み地面に叩きつける

「グア……くっ、”行動”を不可能にする!!」

第十八話
RESTART

「あーやつと終わった」

八意永琳は、拓也たち7班のカルテを書き終わりベッドに倒れ込む

二日前、妖怪討伐任務に行った第7班は、第5班に運ばれて永琳の所まで来たのだ
「それにしてもこれは何故かしら………」

さつき書き上げたカルテに目を通す

剛力 要：重症

右手複雑骨折 肋骨5本骨折 意識不明

音無 鈴：死亡

薬師 恵：重症

肋骨2本骨折 意識不明

そして

天童 拓也：外傷、内傷なし

他がこれだけ傷ついてるのに拓也だけ怪我がないなんてどういう事なの？
アイツがみんな置いて逃げるわけないし……

一番返り血がついていたのも拓也だったし……
うーん わからないわ

「八意先生!!患者が目を覚ましました」

「今行くわ」

さーてこれから忙しくなるわね

第7班が運び込まれてから10日後

傷は、永琳の技術により完治した

が、拓也は部屋に閉じこもって出てこなくなつた

「拓也？拓也？」

「……………」

永琳が呼び掛けても反応をしない

「……………」
「入るわよ？」

ドアを開け部屋に入り部屋を見る

部屋は、グチャクチャに散らかっており端のほうに毛布にくるまつている拓也がいた

「……………」
「拓也」

永琳が手を伸ばすがその手をなぎ払う

「……………」

拓也の目には光がなく、ただただ悲しみと絶望にくれていた

そんな拓也を見て永琳は、部屋を出た

部屋を出るとちようど要がいた

「要君」

「八意先生……………」
「拓也の様子は？」

ただ首を横に振る

「そうですか……………」

拓也が閉じこもって5日後

永琳と要、恵は、拓也の部屋に来ていた

「拓也……知っていると思うが鈴が死んだ」

少しピクリと反応する

「それで鈴の遺品なんだけど……親族がそんな奴の物なんていらんて、こつちに送って来たんだ、それで俺ら7班でわけようって話に」

ガタと拓也が立ち上がり出て行こうとする

「おい、拓也どこ行くつもりだ!!」

「その親族とやらをぶち殺しに行く」

拳を握り締め憎悪と怒りの目をしていた

「バカッ やめろ」

「離せ要!!」

「離さない!!」

「離せ!!」

「いい加減にしろよテメエ」

「いい加減にするのは、お前だ拓也」

「二人ともやめてください」

恵が制止に入るが止まりそうにない

「そこをどけ!!」

拓也が拳を振り上げる

その時

プシューッと永琳が拓也にスプレーをかけた

「永琳、なにしあが。る……………」

拓也は倒れた

「永琳先生、それは？」

「ただの睡眠スプレーよ」

永琳が拓也を部屋に返し要と恵は、寮に帰った

拓也が閉じこもって20日

「拓也はまだ出てこないんですか？」

「ええ」

肩を落としながら要と永琳は話す

「俺がもう一回説得してみます」

「おい拓也!!いい加減に出てこいって!!何時までクヨクヨしてんだよ!!」

「……」

「反応なしかよ……」

どんなけ呼んでも拓也は、反応をしない

反応しようとしなかった

「…… やっぱり鈴か」

ピツク

”鈴” という言葉に少しだけ拓也が反応した

「鈴のことだろう」

「…… そうだよ」

拓也が要の問いかけに反応を示した

「鈴が死んだのは、俺のせいだ 俺がもつと強ければ鈴は死なずに済んだんだ

何が一位だ、何が最強だ、仲間一人守れないで何がみんなを守るだ………
くっ

そお……………」

「そんなんでクヨクヨしてたのか……………」

ガタツ拓也は要の胸ぐらをつかみ叫ぶ

「テメエに何がわかる!! 俺は目の前で鈴を殺されたんだ!! 何も、何もできなかったんだよ……………」

荒々しく言っていた声がどんどん弱々しくなっていくた

「それに、お前は悔しくねえのか!? 要よお!？」

「悔しいに決まってんじゃねえか!!」

「!!」

静かだった要が急に声を荒げる

「悔しいに決まってんじゃねえか でも、いつまでもここで足踏みしていくわけにはいかねえだろが!!」

「なっ」

「あと全部、お前のせいみたいない方してるけどなお前だけのせいじゃねえ、しつかり撤退を命令しなかったりリーダーである俺のせいだ、もつと言ったらあんな任務を任せたくクヨミ様の判断ミスのせいだ!!」

「なっなな」

拓也は要の言葉に声を詰まらす

「それに、鈴はお前をかばって死んだんだろ？ そのお前がこんな状態でどうする!? いい加減にしろ!! 鈴が見初めていた天童拓也にとっと戻りやがれ!!」

「俺は、ただ……」

「鈴の分もお前が頑張らなきゃどうするだよ!! 鈴の為にもお前自身の為にもさっさと立ち直りやがれ!!」

「クツ……」

「俺が言いたいののはそれだけだ、後はお前が決める、ただ……… 鈴の想いを無駄にするようなら俺はお前を許さない」

要は、荒々しくドアをあけ部屋を出た

部屋の外には永琳がいた

「要君……」

「俺に言えるのはここまでです後は拓也次第です」

「そう」

「永琳先生…… 拓也のそばにいてやって下さい」

「ええ」

要はぺこりと頭を下げると出ていった

永琳は、拓也の部屋に入って行き拓也と背中合わせになるように座った

「なあ、永琳」

拓也がつぶやく

「俺、どうすればいいのかな？」

友達を失って、自信を失って、信頼も失った」

ただただポツポツと喋り出す

「俺、どうすればいいのかな？」

「それは、拓也次第よ」

「俺次第？」

「ええ、アナタがしたいようにしなさい

もう一度武器を取るもよし、戦場から降りるのもよし、このまま引きこもっているの

もよし、ただ」

「ただ？」

「自分の心に正直に後悔だけは絶対しないようにする事」

「……………」
わかつた」

「なあ、永琳 俺もう一度やれるかな？」

「ええ、あなたなら何度でも立ち上がっていけるわ」

「…… そうだな」

拓也は立ち上がり

そして

新たなスタートを歩み出した

第十九話 教官始めました

「え？」

俺がいつもどうり訓練を行こうとしてる時だった

「アナタ、教官にならない？」

と永琳に言われた

教官？ つて緑さんみたいな感じなことから

「また、なんで急に」

俺は、教えるより自分で戦う方がずっと得意だし、その俺になんで

「あなたの能力に目をつけたのよ」

話を聞くと能力は凄いんだけどまだまだ使いこなせていない子の能力を真似して能力をしっかりと使えるようにして欲しいということだった

正直めんどくさい……………

「お願い」

永琳が手を合わせて頼んでくる

「でもなー」

「まあ、ツクヨミ様の命令なんだけども」

まじかよ……断れないじゃん

はあ、嫌だなー嫌だな、こういう上からのプレッシャー

俺は、こう言う縦社会の理不尽をなくして欲しいです

「で、どうするっ？」

ニヤニヤしながら聞くな!!

「はあ、つわかったよ」

もう、どうににでもなれ

もう諦めました

朝

その（能力の）問題児どもと会う日になった

いつもどりの服に着替え

銀色の腕輪を左手に付ける

鈴にあげた鈴蘭の模様の腕輪だ

要いわく お前が持つてるのが一番いいだそうだ

まあこうして毎日つけている

「拓也」

「？」

呼びかけられて止まると永琳がいた

「これ、就任祝いよ」

そう言つて黄と黒の刀を投げてきた

「この刀は？」

”月明光” っていう刀よ、光を吸収して放つ能力を持っているわ

ほえーそりやすごいな

てか、就任祝いって、イヤイヤだから祝いもなくなる？

「ありがたく貰つとくよ」

月明光を腰に付け目的地向かつた

「すごいテキトウ!」

だつて相手するのめんどくさいし……………

「私の恐ろしきを見てやる!!待つてろー!!」

お、こつちに来るか これ二人か

あれ?こない

「あの、その、おろしてください」

岩の上で少し涙目になっていた

いや、降りられないなら登るなよ

美紙を岩からおろしました

「あの、その……………」

「え?なんだつて」

「…… あ」

「あ？」

「アホンダラ!!」

「何なの!？」

ホントよくわからん

残りの二人は、岩の後ろに隠れていた

「えつと、わ、私は、渋谷霧栄しづやきりえとかわいいです」

「私は、音無響おとしひびきです よ、よろしくお願ひします」

二人ともオドオドしてな……………

あれ？今。音無って

「もしかして鈴の」

「は、はい！妹です」

いやそんなにビビらないですよ

鈴の妹が確かに面影があるってかそっくりすぎだろ

違うところ身長と髪型、目付きだけしかないぞ

ていうか最初からいる奴未だに本読んでるし

「まどか円ちゃん 教官が睨んでるよ」

「円ちゃん 円ちゃん まーどーかーちゃん!!」

渋谷と音無が呼びかけるが反応なし

「あう」

二人揃ってダウン

「能力使ってんじゃねえ?」

美紙お前、のんきだな

まあ、能力か……………

アビリティキャンセル
「能力停止つと」

本を読んでるメガネ女子のところまで行き

「すうー お……………い」

「!!」

びっくりしたのかひつく返った

「な、なんで私の能力が」

「円ちゃん大丈夫?」

「剛力大丈夫か?」

よし、これで四人揃ったし

「俺の名前は、天童拓也 お前らの教官だ」

よろしく!!」ニィ

やるからにはこいつらを最強にする

第二十話 紙の力

うーん

どうしてこうなった・・・

「ほら、ほーら」

「やめてよ、彩ちゃん」 シクシク

目の前では美紙が蛇を渋谷に突きつけて遊んでいる

うん？なんか霧が濃くなってきたな……

まあ、いいか

「や、やめてあげてよ彩ちゃん!!」

音無が美紙を止めようとしている

「……………」

剛力円は、いつも通り我関せずと本を読んでいる

…………… うん これ予想以上に面倒くさいわ♪

辞退したいな

「はい、チューモク　　いい加減にしないと怒るよ?」

「は、はい」

「……」

「フフフフ、貴様など怖くもなんとも……　　つて痛い痛い痛い痛いって!!ちよ、たんま、たんま　やめて!!やめて!!」　グリクリ

「コイツ以外帰っていいぞ」

「え?」

「何故だあああああ……」

「帰りたい」ドヨン

「まあ、そう言うな 今日はお前の強化に専念するつもりだから」
「え、本当に？説教じゃなくて」

目を輝かしながら言うな めっちゃ嬉しそうじゃん
「フフフフ やつと私の強さに目をつけたか」

こいつ厨二病か？

「で、どうすればいいのだ？」

あ、具体的なこと考えてなかったな

うーん

「じゃ……………」

戦うか」

「ほい、きた!!」

先手必勝!! 紙弾「紙の弾」
ペーパーガン

「ちよ、イキナリかよ!!」
基礎能力アップ（速）

最初に会った時の技をスピードを上げてかわす

「ちよこまかとー」なら、紙砲（ペーパーキャノン）「紙の大砲」!!」

最初より大きな弾が飛んでくる

地面にクレーターができた

なんつーデタラメな能力だよ!!あれ、紙だよね!?

「何時までよけられるかな?」

お前さつきからセリフが悪役ぽっいぞ

あーそろそろキツイな……………

永琳に貰ったコイツを試すか

「月明光!!」

月明光が光出した

「ふん、刀が光ったところで「発射!!」……………え?」

キヤアアアアアアアアアアア

レーザーが月明光から発射された

やべえ、ここまで強いと思ってた……………

わりい、美紙

「クツソーー我はなぜ負けたのだ」

「知らんな」

「え？」

威力は、良いんだけどなー

「そんなことよりお前、攻撃の種類はあんだだけか？」

「そんなことつて……… まあ、いいや

そうだよ あれだけだよ」

うーん どうすればいいんだろうか

「まずは、攻撃をもう少し多彩にした方がいい」

「なんで？今の攻撃 充分強力じゃん」

「単調すぎんだよ」

「うーん、例えばどうやって？」

「どうやって、て言われてもな うーん あ!!」

「アビリティコピー コピー
能力模倣模倣対処」ド「みかみ 美紙」

美紙の能力『紙を操る程度の能力』を使い紙で剣を作った

「おー」

美紙が歓喜の声を上げる

「さて、どんなモンかね」

手頃なサイズの岩に向かって剣を振るった

ドツカーン

「……………」

岩は、斬れると言うより粉碎した

予想以上の破壊力だったな……………

「す、すごい」

「まあ、こんな感じに紙を固めてなんか作るのもいいかもな

ペーパークラフト
紙創造って言ったとこ

ろかな?」

「いいねえ!! 紙創造」
ペーパークラフト

「お前、防御も弱いから盾でも創ってみろ」

「紙符」ペーパークラフト シールド「紙創造(盾)」!!」

少し大きめの盾が出来た

「じゃ、いくぞ」

「いくつて?」月明光、発射!!」ちよつと!?!」

ドーン シュウウ

おお、無傷かなかなかじゃねえか

「いい、いい とつてもいい!!」

「そうか」

気に入ってもらえて何よりだ

「そなたを我が眷属としてやろう」

「いえ結構」

「(・・・)」

いや、そんな顔されてもな……………

「そう言えば、折り紙って知っているか？」

「オリガミ？」

知らないか……………

「たぶんお前の能力と相性いいから覚えとくといいぞ」

鶴、手裏剣、紙飛行機、ドラゴン、ぴよんぴよんガエルなど知ってるやつをだいたい
教えた

美紙は、手裏剣が一番気に入ったらしい、カッコイイから

やっと一人か次は、誰を鍛えよう……………

でも、やつば

面倒くさい……………

帰ったら寝よ……………

第二十一話 剛力妹

……遅い

今日は、剛力の強化に専念するだったが
来ない

ちゃんと連絡したんだけどなー
しやーない 家 行くか

「えーつと お、ついたな」

ピーンポーン ピーンポーン

「はーい」

お、出てきたな…………… つて え!?

「要!?!」

「あれ? 拓也?」

前まで同じチームで戦っていた要が出てきた

「どうした?」

「剛力円を……………」

「え?俺の妹がどうした?」

「え!?!妹!?!」

あ、そういうえば 要の苗字も”剛力”だったな
最初から要って呼んでたから忘れてたわ

そう思っていると目的の人物が中から出てきた

「要にいい どうした? …… げ!!」

「げ!! じゃねえよ あ、逃げんな!!」

追いかけるが

「通行を遮る」

「ぶ!?!」

何かに阻まれた

顔痛い……………

「どういう状況だ? 拓也」

「話は後だ とにかく早くアイツを「言葉を遮る」んーんんーんー!!」

何これ声でない

「コラー円!!」

要ナイス!! 止めてくれるんだな

「5時までには、帰ってきなさい」

止めてくれるんじゃないのかよ!!

あ、行っちゃった……………

「わりい、わりい」

「いいけど探すの手伝ってくれよ」

「おうよ！でも拓也が教官やってるなんてな！」

「自分でも意外だよ」

雑談をしながら剛力妹を探す

ホントどこ行っただ………

搜索開始

「お、オーイ美紙!!」

剛力のこと聞こう

「何ですかマスター」

コイツは俺のことをマスターと呼ぶようになった

力の差を見せたからか？

厨二病に俺を巻き込むなよ

「剛力知らないか？」

「？ 隣にいるじゃないですか」

いや、要じゃねえよ

「円だ、剛力円」

「いやー今日は見てませんね」

そっかー残念

あれ？

「お前怪我したの？」

美紙の腕には包帯が巻かれていた

「ああ、これはマスターが言ってた通り紙を……」

じゃ無くて、我が腕に宿りし暗黒の力を封印するために……」

ああ、この前紙を常に体に付けとけて言っておいたからか

まあ 厨二病が悪化したが……………

「そう言えば、お前は今何やってんだ？」

下に何か書いてあるし

「何って魔法陣を書いているに決まってるじゃないですか」

コイツもうダメだ……………

「恵さーん」

要ナイス 良さげの人見つけたな

「あれ？要君に拓也君じゃないですか

どうしたんですか？」

薬師恵、この人もかつて同じ班だった人だ

「いやー 一緒にお茶でも「オイ」 円知らないすつか？」

「円ちゃんですか？ モグモグ そうですねえ モグモグ 私はモグモグ」

「いや、食べるか喋るかどっちかにしろよ」

「モグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグ」

あ、食べる方にしたのね……………

まあ いいけど……………

「つて良くない!!」

…………… で知らないですか？」

「知らないです」

(． ． ω ． ．)

搜索した結果……………

見つかなかったです

あ、もう5時だ つて事は帰って……………

来てた――――

何この子しつかり帰って来てんだけど

いい子なの？

いい子ならなんで俺の特訓無視したの？

「めんどくさいから」

「ナチュラルに心を読むな」

しかし、この子逃げる時は強かったな

後は、攻撃さえ出来たら

最高なんだけど……………

「よし、今から特訓だ!!」

「嫌だ」

「即答?！」

どうしよう、この子かなり強情

「行くぞ」

「嫌だ、死ね、変態、アホ毛」

……………
そろそろ泣いていい？

「コラ円!! 拓也に謝りなさい!!」

「えっ その でも」

あれ?

「いいから!!」

「ひゃい」

あ、これお兄ちゃんに弱いパターンだわ

「ご、ごめんなさい」

「いいよ別に大丈夫だって」

なんか気まずい

「特訓にも行くこと」

「……はい」

「さ、さて 特訓して行こうか……」

「……」

なんで要もいるの？

「円を見張るために」

コイツも心読みやがった

剛力家には、心を読む能力が代々あるのか？

「それじゃ、円ちゃ「ちゃんは、やめて」円」

「何？」

「お前の弱点は攻撃がないことだ、

そこで……… 要なんかない？」

なんにも思いつかなかったです

「お前なー 考えてなかったのかよ」

「要にいい、この人大丈夫？」

「ああ、精神的に一回病んでるからな」

そこ掘り返すな

「まあ、体中に遮る力を纏って防御力を高めたりとかすれば？」

「防御力上げてんじゃん」

？ ドツカーン /

「え？」

見ると円が岩を破壊してた

「要にいい、これいい」

「スッゲー」

それな

「よし、じゃあ基本的な格闘を教えるぞ」

前世で少林寺やってたからな

「要もやるか」

「おう！」

朝まで戦い続けました……………

第二十二話 霧の探し物

4人中半分の強化終了したな

今日は、渋谷の強化か……

……… なんて来ないの？

俺を精神的に苛めるの流行ってんの？

泣くよ？ いい加減泣くよ？

でも、あの渋谷がサボリなんてな………

まあ、そこまで知らんけど

凄く大人しくてオドオドしているイメージだからなー

探しに行くか………

いた……………

普通に街中でウロウロしてるし

「おい、渋谷」

「うえくん、きょうかくんさくん」

え？　なんで泣いてんの？

「どうした？　てかなんで訓練来ないの？」

「すみません　グスツ　ロケッツを無くしてしまって　グスツ　探していたら　グ
スツ」

ロケッツ？　そんなデツカイもん無くすか？

「大切な　グスツ　物なんです　グスツ」

「あーもう泣くな 一緒に探してやるから」

「グスツ すみません」

今日は特訓は無しだな……………

「ロケットの特徴は？」

「えっと、丸くて銀色で真ん中に青色の宝石が埋め込まれています」

「不思議なロケットだな」

「そうですか？ 結構一般的な物だと思いますが」

え？なに？ 最近のロケットは、そんななの？

「あ、もしかして 教官さんは、宇宙に行くロケットを考えてませんか？」

「え？ 違うの？」

むしろ、ロケットって言って他に何を考える？

「違います ロケットペンダントです」

ペンダント？

「ああ、そう言えば着けてたな」

※ロケットペンダント

写真を入れることが出来るペンダントのこと

「んじや、探しますか」

「はー」

見つかんねえー—————
何情報が全然ないんだけど

あ、ちよと 涙目にならないでくれ

あー搜索系の能力持ってないんだよなー

「グスッ」

なんか霧が出てきたな

ん？霧が拳みたいになってこつちに向かってくる

コツチニ？

「うおおあああいつ!!」

ナニ ナニ ナニ ナニ？

感情で能力暴走？ 勘弁してくれよー

えっと確か…… 『霧を操る程度の能力』 だったけ…………… つて

「あぶねえ」

次々拳が飛んでくる

あーあー周りが穴だらけ

嫌だよ俺、始末書とか書きたくない

「渋谷、落ち着けー」

「ウアーーーーー」

ダメだこりゃ

まず能力を止めないとな

「アビリティストップ
能力停止」

能力は止めたし、後は

「ウアー……」

「ほら、落ち着けて」

頭をポンポンと撫でる

〃
〃
〃

ん？泣きやんだけど、熱いな熱でもあんのか？

「その、ごめんなさい」

「気にすんな、少し休もう」

「はい……」

「好みわかんなかったから ストロベリーにしたけど良かったか？」

「あ、はい すみません」

「別にいいよ、アイス食べて落ち着こう」

教官さんにアイスを奢ってもらえた

「教官さんは、何にしたんですか？」

「ん？俺？俺は、抹茶」

「渋いですね」

少し話していると教官さんが能力の会話を切り出した

「能力の暴走は、良くあるのか？」

「はい、気持ちが不安定になると……………」

目を伏せながら私は、言う 申し訳ない気持ちでいっぱいだった

「普通に能力を使おうとすると、ほとんど霧を集めれなくて目くらまし程度にしかなら

ないんです……………」

ダメダメですよね私、弱くて、みなさんに迷惑かけてばかりで」

「別にいいんじゃないかな？」

「え？」

教官さんの言葉に驚いた

「別に弱くても、迷惑かけても」

「なんでですか？」

「弱いって事は辛さがわかるってことだろ？弱ければ優しくなれるし、迷惑かけてもそれを補うのが、仲間だろ」ニコッ

「で、でも」

迷惑をかける訳には、いかない

「それに、お前は弱くない

能力の暴走中だった時スゲー強かったじゃんか」

「それは、暴走してただけで「それでも、お前の能力ちからだろ？」……!!」

「お前は、自身無さすぎなんだよ もっと自分に自信を持って 自分はこんなにすごい能力あるんだぞって」

「でも……「でもじゃない、やれば出来るんだ」

この人はなんでこんなに温かいんだろう

私もこんな人になりたい

でも、私に出来るのかな？

すると、さっきの言葉が頭を横切る

『やれば出来るんだ』

私だってやれば出来る………

「よし、ペンダント探し続き行きますか」

「はい」

「じゃ、霧を操る程度の能力で街中に霧を纏わせてくれ」

「霧をですか？ 街中に……………」

「大丈夫だ、出来る」

「はい」

霧を生み出す

ボオワアつといつもの倍の量の霧が出た

出来た、私にもできた

「よし、霧を通じて街中を見るんだ」

「は、はい!!」

「どこ？ 何処なの？……………」

あ、あつた

「ありました」

「どこだ？」

「此処から北に342 東に289です」

「オーケー ちょっと待ってろ」

びゅんって教官さんは、飛んでいってしまった

は、早い

あ、もう戻ってきた

「ほら、これだろ」

私のペンダントだ

「今日は、何から何まで すみませんでした」

「はあ、こういう時は謝るんじゃないだろ？」

「え、その ありがとうございます」

「おう、ドイタシマシテ」

私は、この人に近づくために頑張るだ

「そう言えば、何の写真が入っているんだ？」

「死んだ家族の写真です」

「あ、おう、なんか悪かった」

「いいんです、教官さん今度みんなで写真撮りませんか？」

「お、良いなそれ」

「はい」

今日はいい日だったな

第二十三話 響かせる音

「チーム強化、今日でラストだー

やっと休めるぞー」

「何言ってるの?」

「え?どういう意味?永琳さん?」

「どういう意味って、教官は一年間つくものよ」

「嘘だー」

「って、事があったんだ」

「言わなくていいですし、どんなに働きたくないんですか」

音無響と雑談をしていた

最初の方はオドオドしていた響だったがだいぶ慣れてきたみたいだにしても、ホント鈴にそっくりだな

違うのは、鋭くない目つきに髪をサイドテールにしてるぐらいだ

「どんなの見せてくれるんだ？」

「ふっふん よくぞ聞いてくれました

私の能力『音を操る程度の能力』を使って私の歌声を強化して 癒しの歌 にするんです」

そう言つて響は、ない胸を張った

「……何か失礼なこと考えませんでした？」

「ナンデモナイヨ」

怖っ

「じ、じゃあ 早速頼むよ」

「むーなんかいいように話をそらされた感じがします……まあ、いいでしょでは」

どんな歌かな

「ボエ~~~~~」

「!？」

な、何この歌？

酷い酷過ぎる

「ちよ、響!! ストップ! ストップ!!

……… つて聞こえてないし!!」

ちよマジでヤバイこの歌

地面えぐれて浮き上がっていつてるし、草木は枯れてきた、天気も変になってきた……… つて 雹が降ってきたし

何が癒しの歌だよ!! これじゃ破滅、いや滅びの歌だよ!!

「どうでした? 癒されました」

「ああ、今 この普通が素晴らしいなって思うよ……」

「答えになつてない気がします」

いやー いろんな意味で凄かったな

「いつも歌うと皆んな癒されすぎて眠っちゃうんですよ」

それ多分 失神しているだな

「だからその後みんなが起きて元気が出るように本気で歌うんです」

君は、その人達を永遠の眠りにつかすつもりかい？

「響」

「なんですか？」

「練習しよ？」

「なんのですか？」

ダメだこりや

「拓也さん、なんで私バケツ被ってんですか？」

「これも訓練だ、そのまま歌え」

バケツをかぶると音痴が治りやすいって言うし

これは、自分の声が聞きやすいから、自分の現状もわかるだろう
バアン

ん？

バケツ破裂したよ……

コイツ一番厄介だわ

どうすれば……

「で、どうすればいい？永琳」

「いや丸投げなの？そこ」

えーだつて考えるの面倒だし

「頼れるのが永琳しかいないんだ」

「そ、そう？な、なら仕方ないわね」

よしや

「そうね、楽器を使うなんてどうかしら？」

「それだー」

ということだ

「フルート作つてみた」

「何ですか？」

「これを使えば、綺麗な音を広範囲に伝えやすいからな」

「むー なら私の歌声で「却下」何ですか!？」

下手だからと言ってでもも納得しないだろうしな
んーどうしよう

「お前の歌声は、効き過ぎてしまい逆に危険なんだ
だから、楽器で抑制しようってことだ」

これならどうだ

「そういうことなら仕方ありませんね」

納得してくれた

「早速吹いてよ」

「分かりました」

・ ・ ・ * * * * * ♪ . . . * * * * * ♪ ♪ . . . * * * * * ♪ ♪ . . . ♪ ? . . .

イヤ、上手すぎたろ

「んーイマイチですね」

「いやすごいい良かったよ、吹いたことあるの？」

「いや、初めてですけど」

マジかよ……

「まあ、もっと良くなるように頑張ります」

「ああ」

これ以上良くなったら凄いで

マジで

「癒しの笛以外もあつた方がいいな」

「そうですね、一緒に考えましょう」

「おう」

さて、どんなのが良いかな

「うーん……滅びの笛なんてどうですか？」

「それは、もう間に合ってるんで大丈夫」

「？」

もうあの歌は、聞きたくないな

第二十四話 月移住計画

「え？今なんて言った？永琳」

「だから、地球から出て行くって言ったの」

いや急すぎるだろ……

「何でだ？」

「最近、妖怪が増えてきてこの地球も穢れてきたの」

「出て行くのはいいけど、どこに行くの？」

地球以外に住める所あるのか？

「月よ」

月か、まあここの科学力すごいからな どうにかなるだろうけど……

「出発は、5日後よ」

いや、本当に急だな

「5日後までに出発の準備して置きなさいよ」

「ハイハイホー」

2日後

いやーほんと急だよな、後3日後に月に行くなんて
前世では、考えれ無かったことだしなー楽しみだな
やっぱし月には、ウサギがいて餅つきでもしてんのかな？
にしても暇だなー
よし、誰かの家いくか

剛力家

「おーい要、円ー遊びましょ」

「…」

「留守か……」

美紙家

「美紙ー遊ぼうぜ!!」

「…」

「また留守」

渋谷家

「しーぶーやー」

「…」

「なんでみんないないの?」

「エーリーリン」

永琳にダイレクトアタック

「ちよと、拓也!?!どうしたの?」

よかった…… 永琳は、いた
いなかったら俺自殺考えたわ……………

少年説明中

「成程、遊びに行ったら誰もいなかったから寂しくなって帰って来たという訳ね」

「うん」

「そりやいるわけ無いわよ」

「え？」

「なんで？なんで？」

「妖怪の大群が出発しようどに攻めてくるという情報が入ってきているから、みんな警備に行ってるのよ」

「へ？」

「妖怪が攻めてくる？」

「何それ、超危険じゃん」

「というか、逆になぜあなたがココにいるの？」

「どういう意味？」

「教官も出発の命令出てるはずなんだけど……」

「何それ知らないんだけど……」

「みたいね……」

「そんな出発命令なんていつ出たよ？」

「俺知らないし……やべえ、ツクヨミに怒られる」

「あ、知らなかったんだから、伝達ミスということで大丈夫か」

「一応、ポスト見てきなさい」

「アイサー」

「ビューン」

「早っ!？」

「ビューン」

「……入ってた、しかも携帯に不在着信が30件入ってた」

「ヤバイ、生徒に殺される」

「ツクヨミより生徒達の方が怖い」

「ブーブッ ブーブッ」

「ん？」

なんだ？携帯が鳴った

「なになに『妖怪軍接近、戦闘開始』ですって!!」

おいおいマジかよもう攻めてきたのかよ

ちよつとは、待てやコラ!!

「俺は、行ってくる」

永琳が俺の手を取る

「絶対帰ってきてね」

「おう!!俺を誰だと思ってるんだよ

じゃあ、行ってくる」

「行つてらっしゃい」

さーて待ってろよ、みんな

今から行くぜ!!

第二十五話 守る為に

「ダメだわ、教官電話に出ない」

ホントあの人は何してんのか

「これだけ電話しているのに出ないなんて……教官さん……」

「はっ!!まさか、マスターに何かあったのでは?」

「そんなわけ無いでしょ」

あの人ならどんな状況でもケロッとしてそうだし

ブーブツブーブツ

「!?!?!」

メール?

「まさか、拓也さん気づいたのかな?」

「えっと……違うみたい」

「フム、では何なのだ? 剛力よ」

「妖怪軍接近」

みんなの顔色が変わる

「ということとは」

「ええ、戦闘開始よ」

「紙符ペーパークラフト「紙創造（手裏剣）」！！

「イッケーー」

美紙の生み出した手裏剣が妖怪に突き刺さる

「ギャア」

「剛力!!ファイニッシュだ」

「わかってる!!」

遮断 「防御の装甲」!!」

デیفエンス・アーマー

円は、体中に遮る能力を纏い攻撃力、防御力を上げて妖怪を叩きつける

「グオ」

1匹、また1匹と確実に倒していく

「剛力!!後ろ」

後ろから妖怪が飛び掛ってくる

「な!?!」

「霧符 「霧の剛腕」!!」

白い拳が妖怪を突き飛ばした

「大丈夫? 円ちゃん」

「霧栄!!ありがとう」

「いいえ、それよりも……」

「囲まれたわね……」

周りを見ると妖怪に囲まれた

「くつ、我が力を持ってしてもこれが限界か」

「いや、何、諦めモードに入ってるの?」

「ふ、二人とも喧嘩は……」

それぞれの広範囲攻撃で消し飛ばした

「私のおかげね」

「おい、響!!」

美紙と円が詰め寄る

「我が折角ピンチから覚醒をしようと思ってたのに」

「アンタ、隠れてないでしっかり戦え」

「は、はい……」

「響ちゃん、私は、感謝してるよ」

「霧栄〜」

茶番をしているとまた妖怪が集まってくる

「くくよ」

「「おー」「」

何あの子達強すぎだろ……………

俺、出る幕ないじゃん

そう思っているとデカイ飛ぶ妖怪が飛んできた

プテラノドンみたいだなくって

「渋谷危ない!!」

「え? きゃあ!!」

崖から渋谷が落ちた、それをそのプテラもどきの妖怪が追尾する

「チイ、基礎能力アップ（スピード）!!」

間に合え!!」

ギリギリのところでキャッチをした

え? お姫様抱っこだよ? それが何か?

「教官・拓也（さん）!!」

「ふむ流石マスターです」

渋谷を地面におろし妖怪に向かう

「基礎能力アップ（攻）（力）!!」

俺の生徒に何してくれとるんじや コラ!!」

妖怪の顔面に蹴りがメリ込む

「吹き飛ばせ!!」

妖怪は吹き飛び動かなくなった

「みんな待たせたな!!」

よし決まったコレ

「遅すぎです、何回電話したと思ってるんですか!!」

「えっ、その……ゴメン」

円さんコワイよ 顔コワイ そのオーラ、コワイ

「まあ、確かに拓也さんがもーつと早く来ていれば霧染も危険な思い、しなかつただろうしね」

「い、い、いもつともです……」

なんか想像してたのと違う

突如横からとんでもない衝撃が来た

「ッ!!」

いってーなんだ？なんだ！なんなんですか!?

そこには、今までの妖怪とオーラの違う妖怪達が立っていた

「みんな気をつけろ!!十中八九能力持ちだ!!」

気引締めろ!!」

「「「はい!!」」」

そして乱戦となった

ブーブツブーブツ

あ？誰だよこんな時に電話なんて… 永琳かよ

「もしもし？要件を早く今忙しい!!」

『拓也、ロケットの準備ができたわ、撤退よ』

「あーそう言う事か、わかった」

携帯をしまい叫ぶ

「撤退!!」

「えっ？」

「なんで？」

「いいから撤退だ!!月明光」

月明光の光線で妖怪を薙ぎ払い撤退した

「よし着いた、みんな乗り込め!!」

出発してきた時には、なかったロケットが大量にあった
どこにあつたんだよ…

最後の一人が乗り込んだところで

『出発します』

とアナウンスが流れる

ゴオオオオと音を立てながらロケットは飛び出した

ふと、街をどうするか気になった

「永琳、あの街はどうするんだ？」

「爆弾を落として消すわ」

おお、物騒だな

ビービー

「な、なんだ？」

急に警報がなり出した

「外に何かいます!!」

乗っていた一人が窓の外を見ながら言った

見ると妖怪が張り付いていた

しかも、1匹でなく数匹も

窓のから他の機体を見るとやはり妖怪がくっ付いている

このままじゃロケットが落ちてみんな死んでしまう

月明光を腰につけ直した

「何をするつもり？」

永琳が肩を掴んできた

「妖怪をぶっ潰してくる」

「駄目よ!!あなたが危険だわ!!」

「そうだけど、このままだとみんな死んでしまう」

「でも……………」

悲しそうな顔でこちらを見つめてくる

「教官!!わたし達も」

「円、美紙、渋谷、響」

「私たちも戦います」

「ダメだ!!」

声を少し荒らげる

「!!」

「お前らをこれ以上危険な目にあわせれない」

みんな下をむいて黙った

「必ず、必ず帰ってきなさい」

「……………」

返事をせずにロケットを飛び降りた

月明光を鞘から抜き妖怪を落としていき

次々とロケットを飛び回る

「ギャアアア」

妖怪たちの血が顔につく

「ツツ!? しまった!?!」

後ろから来た最後の妖怪に気付かずともに落ちてしまう

幸いロケットにくつついていた妖怪は全てて落とせた

「くっそ、いってえ」

左腕は使えないなこりや……………

自分の状況を確認し妖怪の軍勢のほうを見る

「テメエら、くっつから先は命に代えても行かせねえぜ!!」

妖怪の大群の中に飛び込み次々切り払っていった

「!?」

突如、空が暗くなった

永琳が言っていた爆弾である

「もうか………第二の人生短かったな………」

妖怪ども最後までつきやってもらうぜ!!」

数分後その場所に閃光や、爆発が吹き荒れ
その場所には、誰も居なくなつた………

第二章 諏訪編

第二十六話 神様始めました

ここはどこだ……………

俺は、僕は、私は誰だ……………

真つ暗な空間にいた

……………
?

何かが聞こえた気がした

気のせいかな?

「……………!!……………!?!」

!!

やはり何か聞こえる

何なんだ?

「マ……………!?!……………!?!」

ん?なんか光が……………

「マスター!!起きてください!!」

目を覚ますとよくわからなき空間にいた

（こ）はど（こ）?

「あ、マスター起きたんですね」

俺は、どうしてたんだけ

「あれ?マスター?マスター?」

確か、妖怪と戦っていて……

「ちよつと、マスターさん？」

そんなでもって、爆弾が落ちてきて

「いい加減にしてください!!」

「うお!? 何時からいたの？」

「気付いていなかったんですか!？」

いやービックリした、起きたら隣に金髪の美少女がいるって誰でもビックリするだろう

そう、目の前には見たことない金髪の少女がいた

目はクリつとして蒼い、輝く金髪は横で三つ編みを作り後ろで束ねている

服は真っ白なワンピースだった

「で? 誰?」

「分からないのですかマスター!？」

「いや初めて見たし」

「そんな事ありません!! 私、マスターと長いこと一緒にいました」

一緒に? うーん覚ええない

「君、名前は?」

「光です月明つきあかり 光ひかりです」

「うーん、やっぱり知らん」

「そんな〜」

つきあかりひかり
月明光ねえ…… うん？

おいちよつと待って、俺の刀げつめいこう月明光と同じ名前の書き方じゃねえか

まあ、深読みしすぎか………

「あれ？ そう言えばげつめいこう月明光は、どこだ？」

「ここですけど」

「無いじゃないか」

「いや、私ですけど」

「……え？」

「私がそうだと言っているじゃないですか」

「イヤイヤイヤイヤ、俺が探してるのは刀で女の子じゃない」

「わかつていますよ？」

「じゃあ、俺がお前の発言が分からんよ」

「そう言えば説明がまだでしたね、私はマスターの刀つくもがみの付喪神です」

「マジ？」

「マジです」

マジかよ……………

「そう言えばここどこだよ」

周りは金属で囲まれていた

「え？覚えてないのですか？」

爆発の直前その腕輪が光って、この金属ドームを作ってあなたを守ったのです」

え？マジ？無意識で能力使ったのか……………

とにかく外に出るか、まずは金属をどかさないと

「アビリティコピー能力模倣って、あれ金属は？」

目の前の金属は消え去っていた

「その腕輪に取り込まれました」

どういうこと？能力使ってないのに能力が使える……………

試してみるか

剣のイメージをすると剣がやはりできた

「……………うん、腕輪に能力がこもってるな」

なんか、更に鈴の形見ぼくなったな

「よし一回外に出るか」

「はい、マスター」

「おー！」

外に出ると村が広がっていた

一体あれから何年たったんだろう

「2億9900万年程経っております」

クソ、どいつもこいつも心読みやがって

うん?…え?!

「2億9900万年!?…俺、人間やめてんな」

「はい」

「そこは、嘘でもいいえって言って欲しかった」

まあいいや、とにかくこの村?を一望できるところに行きたいな、お!!あの神社の所いな

「光!!神社まで行くぞ」

「わかりました」ガシ

「あのー光さん　なんで、わたくしを担いでるのですか?」

「行きます」

「行きますって?うおおああいつ!!」

「着きました」

「早っ」

いや早すぎだろ!?びっくりしたわ!?行きますじゃねえよ!!危うく逝きますになってたよ

「私、光の速さで少しだけ動けるのです」

なんと!?光の速さだと!?　299　792　458　m　／　sだと

ふぎけてる、一秒で地球約7周半できる速度なんて
チートや チーターや

「ツツ!!」

急に金属の輪っかが飛んできた

「誰だ!!」

すると神社の中から幼女が出てきた

「お前たち神だな?ここは渡さないぞ!!」

「何言ってるんだ?」

「ごまかしても無駄だ!!」

「うお危ない」

次から次へと弾幕を放ってくる

「ハハハハ、どうした?そんなもんか?」「えい」ゴツ

ロリ娘の頭を光が刀を使って叩いた

大丈夫か?えぐい音したぞ

「ゴメンなさい!!大和の国の奴らと勘違いしてしまつて」

「いいですよ、私、月明光です」

「あなたは?」

「私は洩矢諏訪子です、そっちの女の子は?」

「……えっ?俺?」

「プツプツツ」

「おい笑うな!!光よ」

確かに昔は中性的な顔のせいによく間違えられたけど………あ、そいえば髪切つてなかつたから腰ぐらいまで髪あるからそう見えたのかも
だいが長いこと寝ていた為、髪がすごく伸びてしまいました

「俺は、女じゃねえよ 天童拓也 人間だ」

「えっ？その顔で男!？」

「失礼だな」

「プッツ」

「光!!いい加減にしろ!!」

はあー 後で髪切ろ

「にしても人間ていうのは、どういう事だい？君からは神力を感じるんだけど」

「え？」

「そういえば言ってますね、マスターあなた神になってます」

「……………えっ えー……………!!!？」

第二十七話 大和の国との交渉

前回のあらすじ
神様始めました

俺と光は神社に上がらしてもらい話を聞いていた

「ゴメンなさい!!」

ロリ神もとい、洩矢諏訪子は深々と頭を下げていた

「いいえ、大丈夫ですよ 頭、上げてください」

「うー はい……」

なんか、かわいい

「マ、ス、ター？」ニッコ

ちよつと、怖いよその顔 笑顔なのに

「それで？大和の国の奴らがどうしたんだ？」

話を変えておこう

「あ、えつと 実は……」

諏訪子が手紙を出してきた

「えつと『国の信仰を明け渡せ、抵抗しなければ国に被害は出さない、だが抵抗するのなら容赦をしない』つて、なんだよコレ？脅迫文じゃないか!？」

「ヒドイですね」

「はい…… 私、この国が大好きなんですよだから戦いに巻き込またくないんです
も、神は信仰を失うと力を失い消えていってしまうんです」

え？消えちやうの？

つてことは、この手紙は戦って死ぬか、大人しく死ぬか選べつてか、ふざけんな
「勝機はあるんですか？」

「…… いいえ」

諏訪子は、悲しそうに首を横に振るだけだった
そして今にも泣き出しそうだった

「「……………」」

重い沈黙が少しの間続いた

「…… よし、ちよつと行ってくる」

「マスター?どこえ行くんですか?」

「まさか…… 大和の神々のところに?」

心配そうな申し訳なきような顔で諏訪子は、こちら見る

だからこそ放っておけない

「ああ、ちよつくら大和の国潰してくる」

「!? じよ、冗談だよね?」

「うん、3割ぐらい冗談」

「残りの7割は!」

「大和の奴らと話をつけてくるだけだよ、これじゃ諏訪子が不利すぎるし」

「そう上手くいきますかね?」

「大丈夫だ光、ダメなら潰す」

「さらつと!」

よーし、そろそろ行きますか

「あの、その、いろいろゴメンなさい」

「別にまだ何もしてねえーよ それにもう謝んじやねえよ」

諏訪子の頭を軽く撫で慰める

「それじゃ行ってくる 光、諏訪子頼んだ!!」

「えっ!? あ、はい!!」

さーて 殴り込みじゃ

「ココドコ?」

毎度のことながら迷った

うーん、どないしよう

うん? 向こうから気を感じるな…… よくわかんない気だな、これが神力か?

下を見るとテントっぽいモノが作ってあった

そんじや行きますか

進軍は、一週間後か……

私、八坂神奈子はテントの中心で時を待っていた

今回、上の方の神に任命されてひとつの国の信仰を奪うのだが………

あまり気

が進まないな

私の作戦は、話し合いでうちに入ってもらうのが一番いいんだか

そんな事を考えていると見張りの一人が勢いよく入ってきた

「八坂様!! て、敵襲です!?!」

「な、敵襲だど!? 相手は何人だ? 100か1000か?」

「それが…… 一人です」

「一人だと?」

大和の国に一人で喧嘩を売るバカがいるのか?

すると、テントが開いて一人の女が入ってきた

「このトップは、お前か?」

気でわかるこいつは神だと

「兵士や他の神は、どうした?」

「ん? いや、話し合いで解決しようと思っても次から次ぎへ来るもんだからぶっ飛ばした」

ぶっ飛ばした? うちの鍛え抜かれた者たちがそう簡単にやられるはずかないし…… コイツ相当な手練か?

「そうかうちの連中らが無礼を働いたようですまなかつた 私は、八坂神奈子だ 貴女は?」

「俺は、天童拓也 一応言っておくが男だ」

「え? 男?」

え? 男? 女にしか見えないよ?

「えー ゴホン それで貴方はどんな用で？」

「あーそうそう」

「いったい何を言ってくるのか……」

「諏訪子のところに来たこの舐め腐った手紙を送ってきた国に制裁を下そうかと」
拓也の神力が十数倍になる

「な!？」

予想外だった、この男諏訪の使いだったか

それよりも制裁だと!?

「ち、ちよつと待ってくれ!!その手紙を見せてくれ」

「ほらよ」

手紙を読むと私が伝えたことと全く違うことが書いてあつた

「申し訳ない、部下の誰かが手紙の内容を替えたようだ 私は、話し合いで解決しよう」と
「無理だろ」 ツツ!!

「信仰を奪うつもりには変わりないんだろ?それに話し合ひなんかする気ない奴もいる
みたいだし」

「そ、それは」

言い返せない、コイツと戦つても勝てる気はしないし

「だから潰そうかと、思ってたけど」

「え？」

「それじゃこつちが可哀想だから一体一のサシをやってくれないか」

話についていけない

「諏訪子とお前のところ一人と戦うそれで勝った方が上、それでいいか？」

「ああ」

「それじゃよろしく」

そう言うのと一瞬で飛んで行ってしまった

不思議な奴だったな

第二十八話 特訓よりも飯

「と、言う訳で一週間後開戦な」

「いや、どういう訳ですか？」

拓也君が帰ってきたら急に「一週間後一騎打ちを申し込んできた」とか言うからビツクリした

でも、進撃しないよう話をしてきたんじゃないの？

「いや、マスター!? 話し合いに行ったんじゃないんですか？」

「?..... 行っただけ？」

「ダメだこの人、真面目に意味を分かってない.....」

「進撃しないよう話をしてきたんじゃないんですか？」

「あ、ああ」

本当に分かってなかったみたいだ

「それだけだな、諏訪子の為にならないと思つて」

「私の？」

一体どういう意味なのか、さっぱりわからない

「今回は、避けれたとしても、これから他の国が攻めてこないとは限らないだろう？だから諏訪子には強くなってもらわないといけないんだよ」

なるほど、確かに言う通りである

「だから、戦い方を教えてやる」

「……まで考えてたなんて、この人はとても凄くてとても優しい人なのかもしれない

「光がな」

「って私!? 自分で教えないんですか!?!」

「うん、もう疲れた」ということで俺は、寝る」

「寝ないでください!!」

「…… z z z Z Z Z」

「早っ!?!」

「凄い人なんだ……多分……」

ア—ツツツツツツツツツツツツツツ!!」
「あ、あのく特訓は？」

「ゼエゼエ、それでは始める」
「大丈夫？」

「ああ、頑張ろうか」

よし、がんばるぞ

「まず、あの木に向かって弾幕放ってくれ」

「わ、わかった」

言われた通り弾幕を放つ

木の革が少し抉れる程度の跡ができた

「んー威力が欲しいな…… 少なくともこんなもん」

拓也君がそう言っつて弾幕を放つ

私のに比べて小さかったが、木に大穴をあけた

「な!？」

「諏訪子の弾幕は力を込めきれてないな、もっと集中して」

「わ、わかった」

次こそは………ダメか………

「うーん、じゃ毎日集中力を高めるため座禅な」

「そんなー」

「次は組みでだ」

「はい」

「好きにかかって来い」

「わかった」

銀の輪っかを出し攻撃を繰り返すが、当たらない

右、右、左、右

攻撃をしていると腕を掴まれた

「あー！」

「残念」ニイ

パチンとオデコに衝撃がかかる

デコピンである

「うー」

「大丈夫か？」

「はい……なんで私の攻撃が当たらないんですか？」

「お前が馬鹿だから」

「え!!」

そんな、ばかって

「攻撃が単調すぎるんだ

攻撃に 虚 と 実 を入れないと」

「虚と実？」

なんのことがさっぱりだ

「簡単に言うと、相手の意識をそらすための攻撃を 虚

そして、相手にダメージを与えるための攻撃を 実 だ」

「つまり、フェイントを入れろっていうことですか？」

「そうだ、例えばその銀の輪つかを相手に向かって投げる これを虚として、相手がそつ

ちに気がいつてる隙に懐に入り攻撃 実 をするとかだ」

「な、なるほど」

やっぱりすごい人だな

「よし、まだまだいくぞ」

「はい」

組み手を再開しようとしたその時

「ご飯できました」

魔の声が

「よし、今日は、ここまで」

「え!? 今からつてところじゃないですか!？」

「うるさい、メシだメシ」

「飯こそ正義だ」

「凄いなん……………だ？」

第二十九話 祀られました

一週間は、あつという間に過ぎていき

決闘当日

「ど、ど、どうしよう 勝てるかな？」

「大丈夫です!!自信持ってください」

「やるだけのことはやった、切れる手札は全部切った後は自分を信じてやるだけだ」

「うん、私頑張る」

「おう、頑張ってください」

「頑張ってください」

諏訪子の後ろ姿を見送った

さてと、こっちは、こっちで動きますか

決闘場から少し離れた場所

大和の国の神が話していた

「一騎打ちなんてやってられるか」

「一気に攻め込んで信仰を奪うぞ」

「いつちよやるか」

「なんの話？」

「ああ？今から一気に攻め込もうって話してたんだよ」

「それは、神奈子の命令？」

「いや、俺らの独断だ……って誰お前？」

「じゃ、制裁はオマエラダケデイイナ？」

「何言つて？……グオオオオオオホオオオオオオ」

さーて、狩りの時間だ

「なんだ貴様?!」

一人が聞いてくる

「俺か？俺は、ただの通りすがりの神様さ」

「ふざけるなアアアアア!!」

いや、ふざけてないよ？至って真面目だよ？

「よし、お前から袋叩きにしてやる」

そう言つて俺を囲む 流石連携はピカイチだな

「一人で喧嘩を売るなんて馬鹿だな」

「フフフフ」

オカシイ、オモシロイ

「な、何を笑っている!?!」

だつて誰も一人できたなんて言つてないもん

「がア」「ぎゃ」「うお」

次々と神（笑）が倒れていく

「ナイス光」

「別にいいですよマスター」

私も、イライラシテマスカラ」

ちよつと狂気に満ちた感じでカタコトになつてるよ

あゝあ、大和の国の神達……ご愁傷様です

合掌（一人）

「ギヤアアアアア

!!!!!!
」

テテレー

大和の国の神達にトラウマができました

さて、あつちは、どうなつたかな………

「ゼエゼエ」

「ハアハア」

うお、すつご!!クレーター出来てるよ

というか二人とも倒れてるし……………

「おー二人ともどつちが勝ったの？」

「私だ」

「いやどつちだよ」

「私の方が押していたよ」

「いや私だね」

「で、どっち？」

「私」

「仲いいな」

「別に、良くない!!」

面白いぐらいハモるな

「弾幕勝負は、私が勝った」

と諏訪子

「組手は、私が上だった」

と神奈子

「他は、どんな勝負したんだ？」

どんなんだろう

「大食い、駆けっこ」

「じゃんけん、腕相撲、料理勝負」

「やっぱ仲いいな!?!おい!!」

てか、これしつかりとした戦いだっただよね？

なんでこんなことになってんの？

結果は、3対4で神奈子の勝ちだった

信仰は、神奈子に移ると思いきや民衆は、ミシヤクジ様の祟が怖いということで、表向きは神奈子、裏では諏訪子と、いう信仰が広まり諏訪子は、消えずに済んだ

「よかったな、二人とも」

「うん」「ああ」

よかった良かった、と言うか最初からこうすれば良かったし

「天童拓也」

「うん？」

「お前もここで祀られないか？」

え？なんで？

「神は、信仰があればあるほど強くなれるだ

「どうだ悪い話ではないと思うんだが？」

「そうだね、拓也君それがいいよ」

「うーん、力あるに越したことは、ないか」

「そうだな、一応席を置いとくということだ」

「任された」

「あ、そういえば」

「俺ってなんの神様？」

「知らないな、諏訪子は知っているか？」

「私も知らない」

「うーん、なんなんだろう」

「全能神ですよ」

「あ、光 全能神って？」

「あれ？なんで？神奈子も諏訪子も固まってんの？」

「知りませんか？全能神って結構位上ですよ」

「え？そうなんだ」

「で、全能神って？」

「そこからですか……………」

拓也の道のりは長い

第三十話 神無月の神のお祭り

10月

「神様の集まり?」

「そう、行かない?」

「諏訪子に島根で行なわれる神様の集まりに誘われていた

「行かない」

「即答!」

だつてめんどくさいし

「そつかー美味しいご飯とかあるのにな……」

「何をグズグズしてる、早くいくぞ」

「身代わりはやっ」

メシだメシだ

「マスター私も行っているのですか?」

「神だからいいんじゃない」

おーいっぱい居るな

日本は八百万の神って言うしな

それにしても……………

「飯うめー」

「あ、マスターずるいです私も」

「二人ともご飯は逃げないよ」

知ってるよ、でも美味しいから止まんねえ

「拓也、酒飲まないの」

「飲まねえよ」

昔、無理やる飲まされて記憶失ったもんな

「もしかして拓也か？」

え？俺の名前知ってるの？俺って有名人に……って
「ツクヨミ様!？」

目の前には、月の神ツクヨミがいた

「いやー久しぶりだな」

「久しぶり」

「どんなもんびりだ？」

「2億5000万位かな？」

「死んだと思ってたけどまさか神になってたなんて」

「俺も、ビックリだよ」

永琳達は？」

一番気になってたことを聞く

「最初は元気なかつたけど、少しづつ元気を取り戻していつてるよ」

「そっか………」

あいつらもあいつらの道を進んでいる

俺も頑張らねえとな

さて、祭りを堪能しますか

「マスタ〜」

「たくやくくん〜」

…… どうしてこうなった

両腕にしがみついている諏訪子と光を見ながらため息をついた

「大丈夫かい？」

「神奈子、これで大丈夫に見えるなら眼科紹介するぞ」

「諏訪子の奴いつも以上に飲んでやがったしな…… 光は、酒に慣れてなかったのかな

？」

「ダロウナ」

「楽しんでるかー!!」

「マスターも飲みましようよー」

「断る!!もう二人とも飲むのやめろ」

酒を取り上げる

「返して」

「ヤダ」

「返せって言ってるんだろが!!」

「!？」

急に弾幕を放ってきた

あぶねえな!!

「ちよつと待て」

「待てません 光符「光明斬」」

光速の斬撃が飛んでくる

「ちよ基礎能力アップパフォーマンス(速)スピード Level 15!!」

最大速度でかわす

いつの間に覚えたんだあんな

数撃当たりながらも耐えしのいだ

あつぶねえー

「崇符」「ミシヤくじ様」

「あくもう!!」

休む暇なく、巨大な蛇が襲いかかってくる

「止めろつて二人とも!!」

「アハハハハ」

ダメだ完全に出来上がってらっしやる

しやーないな

「鈴!!」

声に反応して、腕輪が光り巨大な大剣を生み出した

「うおりあ」

大剣を振るいミシヤくじ様を真つ二つにした

崇られませんように……

大剣をフルートに変換させ

「能力模倣模倣対象」アビリティコピー コード「響」ひびき!!」

響の能力を使う

「睡曲」「眠りの楽曲」

♪。 . : * . . . * * * . . .
「すーすー」

「うにゃー」

寝たか . . . : 疲れた

「お疲れ様」

「お前も手伝ってくれよ」

「ゴメンゴメン」

あー疲れた

喉渴いたなー

「お、丁度いいところに飲み物が」

喉が渴いていた為一気に流し込む

「おい、拓也!!それ酒」

「え?」

神奈子に言われて酒と気づく

あ、やべえ 目が回る

そのまま倒れる

地面って冷たいなー

「拓也ー！！」

それからのことは、記憶にない

第三章 飛鳥編

第三十一話 神社が増えた

「本当に行くの？」

「ああ」

数百年諏訪子達と一緒に暮らしていたが一回都の方に拠点を移そうと思ひ離れる事にした

「そっか…… 寂しくなるね」

諏訪子はシヨンボリと肩を落とす

「アホか、二度と会えないわけじゃないだろ？」

諏訪子の頭をポンポンと撫でる

「そっか、諏訪子」

「神奈子……」

さて、そろそろ行くのかな

「じゃな、世話になったな諏訪子、神奈子」

「お世話になりました」

光がペコリとお辞儀をする

「こちらこそ」

「また来てねー」

見えなくなるまで諏訪子達に手を振り続けた

数時間飛んだ

「?..... 光なんか聞こえなかった?」

「え? そうですか?」

光は、聞こえてなかったようだ

確かに悲鳴が聞こえたような.....

「キヤーー」

「!!」

「聞こえたな!?!」

「はい、はつきりと」

「急ぐぞ!!」

間に合えよ……

ハアハアハアハア

こんなことになるなら家出なんてするんじやなかった
私は、後ろの妖怪を見ながらそう思った

妖怪は、五匹いてとても勝てる訳が無い

妖怪との差は着々と狭まって来ていた

もう、だいぶ走ったので足が痛くなってきた

「あ!？」

木の根に足をかけてしまい転んでしまった

妖怪はもう目と鼻の先まで来ていた

逃げ出そうと思っても足が動かない、さつきコケた時にくじいてしまったようだ

私は、もうダメなのかな？

そう考えると涙が溢れてきて止まらない

そんなことお構いなしで妖怪は、飛び掛ってきた

神様!! 助けてください

神様なんているわけ無い……でも、今頼れるのは、そんな物しか無かった

私は、覚悟を決めてギョツと目を閉じた

その時声が聞こえた

「^パラ^メー^ダ基礎能力アップ (速)^{スピード}!!」

ドンと、言う音に驚き目を見開いたそこには妖怪を一匹吹き飛ばし私の前に立つ一人の男の人がいた

「間に合ったな」

「あ、え？ その……」

当然のことで声が出ない

「なんだ貴様は」

「通りすがりの神様だ 覚えとけ」

私の前に現れたのは神様でした

あつぶねえーギリギリセーフだったな

「さーって妖怪さん？俺と殺り合うか？」

妖怪は、少しの間睨んできたが諦めて森に帰っていった

ふいー よかった良かった

「大丈夫か？」

「は、はい!! あ、ありがとうございます」

「マスター、この子足怪我してるみたいです」

「なら、付与エンチャント「回復リカバリー能力アップ」」

「… 凄い!! 傷が治った!!」

さつて、この子を家に返さないとな

「光、村を探してきてくれ」

「はい!」

しばらくすると光が帰ってきた

「ありました」

「よし案内してくれ」

女の子を抱きかかえたまま空をとんだ

「空を飛んでる…」

信じられないだろうな…

昔は、俺もそうだったし

「美紀!!」

「お母さん!!」

美紀ちゃんっていうんだ

よかった良かった これが無事全部解決

「それじゃ 俺らは、この辺で」

「待ってください、お礼がしたいのですが」

別にいいんだけどなー

「マスター、ここは、好意に甘えときましよう」

「そうだな・・・じゃあ よろしく」

「はい」

盛大に祝ってもらい

さらに、なんかこの村の守り神になりました

まあ、守り神っていつてもそこに神社があるだけだしな

第三十二話 聖徳太子つて男だよね？

少しの間村でお世話になった

門から出てくのが見えた

あれは……この前助けた子のお母さんだ

「何処へ行くんですか？」

「あ、神様でしたか この前は、娘を助けていただいてありがとうございます 私は、今から都に行つて買い出しと聖徳太子様に相談に行こうかと……」

「俺もつて行つていいですか？」

「いえ、別に気を使つてくださわなくても」

「俺が行きたいだけです」

「それなら、分かりました」

いやー今、聖徳太子がいる時代だったんだな

歴史上の人物に会えるなんてラッキー

本当に十人の人の話をいつぺんに聞いたり、飛鳥文明アタックしたりするのかな？

楽しみだー

なんか忘れてるような…… まあいいか

その頃、光は

「マスターどこですか」

置いてかれたことに気付いてなかった

「へえーここが京都か」

「それでは、私は、聖徳太子様にお話をしてきます」

前方を見ると人がだいたい群がっているところがあつた

あそこに聖徳太子がいるのかな？

覗いてみるとヘッドホンを付けた変わった髪型の女の人が中心で話を聞いていた

え？聖徳太子って女!?

俺の記憶が正しければ、ちよびヒゲのおっさんだったハズだけどな

つか、なんでヘッドホン付けてんの？この時代にあるわけ無いじゃん!?

それに何あの髪型!?!耳なのか？耳だろ？耳だよね？

「太子様、うちの村は水がありません、どうすればいいでしょうか?」

「太子様、害虫がお米をダメにしてしまいます、どうすればいいでしょうか?」

いろいろ聞いているな…… ちゃんと答えられるのか?

「そちらの方は、村の近くの川にダムを造りなさい」

「そちらの方は、害虫を食べる生き物を使いなさい」

おー ちゃんと答えてる答えてる

「太子様、息子の成績がのびないのですが……」

「太子様、髪の毛が伸びないのですが……」

「太子様、筋肉がつかないのですが……」

ちよ、そんな相談も受け付けてんの?

流石にこれは答えられんだろう

「そちらの方は、息子さんをベ○ツセに入れてみてはどうですか?

そちらの方は、リー○21を試してください

そちらの方は、ラ○ズアツプへどうぞ」

答えられるのかよ!?! ってか、絶対この時代にベネツ○もり○ブ21も、ライズ○ツプも無いよな!?

聖徳太子が、こちらを見てきた

「あなた、どんな悩みを持っていてるのですか?」

「いや、俺は聖徳太子ってどんな人か見に来てただけだから」

「そうですか」

ちよつと、残念そう……………なんで?

それにしても人気だな…………… 聖徳太子って

太子様、太子様って

ん? なにか飛んでくるって

「危ない!?!」

「きや」

聖徳太子を突き飛ばす

「何をするのじゃ貴様!?! って……………」

近くにあった護衛? が叫ぶが声を詰まらせるそれもその筈、俺の腕には、矢が刺さっている

急すぎて能力使ってる暇がなかった

「大丈夫ですか？痛くないですか？」

太子が立ち上がり駆け寄ってくる

「大丈夫、大丈夫」

まあ、流石に痛いけど……

「まあ、こんなぐらいなら回復能力アップ」

「凄い!!傷が治っていく」

これ、体力少し使うんだよな

ちよつと疲れた……………

「凄いですね、あの助けてもらったお礼に家に招待させてもらえませんか？」

「いいんですか？」

「はい」

ついで行こうかな、どうせ暇だし

それにしてもなーんか忘れてるような…… まっいいか

その頃、光は

「マスターマスター」

森を駆け回っていた

「本当にありがとうございます、改めて自己紹介させていただきました、私は、豊聡耳神子と申します」

「とおさんとみみのみそ？」

「豊聡耳神子です!？」

聖徳太子って名前じゃなかったんだ

「俺は、天童拓也です」

「よろしお願ひします拓也さん」

おお、いきなり名前呼び

「豊聡耳さん、十人の人の話をいっぺんに聞くことできるって本当ですか？」

「はい、私は『十人の話を同時に聞くことが出来る程度の能力』を持っているのであるほど、能力持ちか

「あのー太子様 そろそろ、本題に」

緑ほっつい着物を着た女の子が手を上げる

「そうね屠自古、では、拓也さん私を守ってくれないですか？」
「ええ、良いですよ」

即答、これには豊聡耳さんも驚いたようだ

なんで受けたかって？そんなもん女の子が困っていたら助けるのが男だろ!!

第三十三話 暇な護衛

前回のあらすじ

豊聡耳神子さんの護衛をすることになりました

「それで、護衛つて？」

「はい、実は……………」

豊聡耳さん、改めて神子さん（他人みたいで嫌と言うから、呼び方を変えた）がいうには、最近さつきみたいな攻撃や、嫌がらせなどが続いているらしい

だから俺に守って欲しいと言うことらしい

「よろしくお願いします」

と、引き受けたけども

一週間経っても襲撃無しってどういう事だよ!!

俺の見せ場は!?

まあ、平和が一番だけども……………

「拓也さん、拓也さん」

神子が近づいて来る

「どうした?」

「お菓子貰っちゃいました、みんなで食べましょう」

……………
うん 平和だな

っと

「危ない!!」

飛んできた矢を掴み取る

「きゃ!？」

危なかったな…… さてと、飛んできた方角はあっちだな

「ちよつと行つてくる」

そう告げて、空を飛んで矢の飛んできた方角へ向かうと逃げるように走っている三人組を見つけた

お!あの三人組がそうか?

「ちよつと、そのの三人組——」

「!?!」

あれ?こつちに気付いていない?

あ!ああ、空を飛んでるから気付かないのか

そして、三人組の前に着地する

「なつ!」「いま空から!」「どうやって!？」

三人組は、目を白黒させている

あ、空飛ぶのは、普通じゃないか……………

「ちよつと良いかな?豊聡mつて言つてもわかんないな…………… 聖徳太子を狙っていたのは、お前らだな?」

三人の顔がこわばる……………ビンゴだな

「なんでこんな事したか教えて欲しいんだけど……………おい、そこ逃げれると思うなよ」

逃亡しようとしていたのがバレ三人はギョツとする

「痛い目会いたくなかったら、吐いた方がいいぞ」

刀を作り、チラつかせながら脅す

三人組はもう泣きそうだ

これじゃあ、どっちが悪者だどこと……………

「話すの？話さないの？」

「話す!!話すから!!」

話を聞くと、全員脅されてやったらしい

その犯人の特徴は、聞けたし良しとするか

青髪で簪を刺していて、天女みたいな格好した女か……………

帰ってきました神子の家

だいぶ遅くなっちゃったな…… 青髪に襲われてないといいけど……

「キヤーーー!!」

今の悲鳴、神子!?

家に飛び込み、悲鳴の方へ向かう

「神子!!大丈夫か!」

「え?」

神子がいた、体に怪我をしてる様子もない

しかし問題があつた、それは……

「あ、あれ?」

「出ていって下さい!!」

神子が風呂上がりで服を着ていなかったことだ

桶などいろいろ飛んでくる……

本当に申し訳ない……

その後、屠自古と布都に説教された

やっと、説教が終わり屋根の上で夜風に当たっていた
ふと、視界に青髪が映った

素早く立ち上がり、青髪を追う

少しづつ距離を縮めていった

青髪が角を曲がったところで見失ってしまった

しかしそこは、行き止まりだった

一体どうやって逃げたんだ？

第三十四話 邪仙と対面

「拓也さん」

「ん？」

日向ぼっこをしていたら神子に声をかけられた

警備体制ザルすぎだな……………

「どうした？」

「メールが届きました……………」

え？メール？この時代には、携帯電話もあるのか？

「これなんですけど」

出してきたのは矢、その端に紙が括り付けられた物だった……………
つてこれ矢文
じゃん!?

神子から矢を受け取り中を見る

中には、『仙人に興味はない？』とだけ書いてあった

十中八九、黒幕だろう

ちなみに、まだ神子には、犯人の特徴を教えていない
「なんなんでしょう？」

「さあ、でも、お前を仙人にしたいそうだ」

「仙人ですか……………」

その日の昼頃、俺は、お使いに行っていた
護衛からパシリになつてるし…………

俺、神なのに……………

えっと、買うものは、墨汁、筆、墨汁、紙、布、墨汁、肉、野菜、墨汁、墨汁……………
墨汁多いな!!何本買うんだよ!!

「キヤー！泥棒!!」

少し先の方から悲鳴が聞こえた
暇だし人助けしてくるか……………

飛んで行ってみると、男が走って逃げていた

その男の前に急降下し、足をかける

「なっ!?!」

男はスピードを殺しきれず転がり、近くの八百屋の品物を盛大にぶちまけた
ヤツベ、こなれ俺のせい？弁償しないとイケない系？

少し目を離している隙に男は人質をとっていた

「近づくな!!」

どうしようかな…………… 相手には、人質がいるしな むやみに突っ込めん
遠距離、相手に気付かれにくい、ならアイツかな

俺は、小声で能力を発動した

「能力模倣アビリティコピー 模倣対象コピー 「霧栄」きりえ」

空気中の水分を集め霧を作り、操る

「近づくな!! って、うおおあああいつ!!」

霧の腕で男を掴み吹き飛ばす

いっちょ上がり

いやー、随分と遅くなったな

「ただいま……… なんでここにいます」

そこには、青髪で簪を刺して天女みたいな格好の女がいた

「あら、もう帰ってきたの」

女は、呑気な声で言う

「それでは、私は失礼させてもらおうわ」

女は立ち上がり、神子の横を通りすぎる

何か言ったようだがここからだと言こえない

「待て!!」

女を追うが、壁をすり抜けて行ってしまった……………

能力持ちか……………

「お前の好き勝手には、させねえからな!!」

女が消えていったほうに向かって俺は、そう叫んだ

何なんだろう、この方は……………

霍青娥と名乗る女の方がやって来た

「仙人に興味はないかしら？」

その言葉に覚えがあつた、あの手紙にあつた言葉だ

「人の命は、あまりにも短すぎる、仙人になれば長い時を生きていける、あなたの目的にもあうでしょ？ 聖徳太子いえ、豊聡耳神子」

「あなたは、いったい「ただいま」」

そのタイミングで拓也さんが帰つてきた

青娥さんを見た瞬間、鋭い目つきになつた

「なんでここにいる」

声色が変わり、威圧感がここまで伝わってくる

「それじゃあ失礼させてもらうわ……………仙人のこと考えておいてくださいね」

そう言つて、壁の中に消えていった

どうしましょう……………

第三十五話

V S 天狗

青娥が来てから数日後

神子のところに一人の人が駆け込んできた

「太子様!!」

見るからに只事じゃない

「どうしました?」

「娘を娘を助けてください!!」

話を聞くと、娘さんが昨日から居なくなっているんな人に聞き回った結果、妖怪が住み着いている山に、向かって行くのを見た人がいたというらしい

お役所に頼んでも行ってくれなかったらしい、それで神子を頼ってきた

神子を生かせるのは危険だしな

「俺が行くわ」

「拓也さん!」

「大丈夫だって、早い方がいいだろうからもう行くわ」

「気をつけてくださいいね」

「おう!!」

行く前に部屋の外にいた、屠自古と布都に声をかけていった

「俺がいない間、神子頼む 青娥には、気をつけろ」

「わかったわ」

「任しておけ、さっさと戻ってくるのじゃぞ!!」

妖怪の山へ俺は、スピードをあげて向かった

「ここが妖怪の山か……………」

山を見上げ眩き、森に入ってしまった

その時、目の前に三匹犬耳の白い妖怪が現れた

「生まれ人間!!ここは妖怪の山だ、人間の来るところでは無い!!帰れ!!」

うつわ、すつごい言われよう 全然歓迎されていないなー

まあ、無視して進みますか、俺人間じゃないし

「貴様!!生まれと言っているだろう」

無視して進む

「ツツ!!全員かかれ!!」

一斉に剣を振り下ろしてくる

「正当防衛成立!!」

基礎能力アップパラメータ (攻)アタック (守)プロテクト (速)スピード Level 13!!」

剣を腕で弾き後ろへまわる

あんまり被害を拡大させないように、気を失わせる程度で倒すか……

後ろから蹴りを入れ次々時を失わせていく

「いっちょ上がり…… ってまだ来るのかよ!?!」

空から次々と犬耳が降りてくる

2. 4. 6. 8. 10. 12. …… 多過ぎだろ!!

「かかれー!!」

「あーもー、めんどくさいな!!」

「あーもー、めんどくさいですねー」

山に侵入者なんて白狼天狗に任せておけばいいのに

「文様!!」

「分かってます、今行きますから」

…… どういう事ですか？

白狼天狗がやられているんですか？

騒動の中心にいるのは、男か女か分からないような人だった
ヤルしかないですね………

「その人間!!よくも山を荒らしてくれましたね」

「お、違うのでしてきた っつか先に手を出したのは、そっちだ」

飄々と話しかけてくる

「白狼天狗は、下がりなさい私がやります」

「文様が!?!」「これで勝てる」

さてと、中々やるようですけど、どこまでついてこれるでしょう？
「……… 天狗だったんだ………」

天狗と気づいていなかったらしい

「私についてくれますか？」

最初から出し惜しみなしで行きます

轟と風が吹き荒れる

「うお!!速っ!!」

私は、天狗界でもトップの早さを持つ天狗です

そう簡単に追いつかれては、困ります

相手もそこそそ速いが私の敵じゃない

これなら能力を使わなくていいかもしれないですね

人間に、蹴りを入れては、下がる、攻撃しては、下がるを繰り返す

着々とダメージを与えていく

「チイ ^{チェンジ} 変更Level5!!」

人間の速度が上がるがまだ私には、追いつけない

「マジかよ…… Level5でも追いつけないとか……」

「それが、あなたと私の差です!!」

地面へと叩き落とす

「痛エな くそ」

土煙の中から人間は、出てくる

しぶとい人ですね……

「仕方が無い……… 本気出すか」

人間の目がキラリと光る

ここからが本番だと言うように………

第三十六話

Level 15を超える

「仕方が無い…… 本気出すか」

その人間はからは、ものすごい威圧感を感じた

チェンジ
ライトニング
「変更（光速）!!」

そう叫んだとともに人間の姿が視界から消え、それと共に背中を衝撃が襲った
「なっ!？」

突然のことで思考回路が追いつかない

この私が速さで負けた？

そんな、ありえない

体制を整えて人間を追うが追いつけない

くそ、なら………

扇を取り出して、『風を操る程度の能力』を使い風を操る

「うお!？」

人間は、突然の突風（台風レベルの風）でバランスを崩すそこに攻撃を叩き込む
人間は、木をなぎ倒しながら吹き飛ばされて行く

だいぶダメージは、与えられた筈

「なんだ？能力の類か？」

「!?」

後ろを見ると少しボロボロになった先ほどの人間がいた

「クツソ痛エな 回復^{リカバレイ}能力アップ」

傷が癒えていく

「さあ、そろそろ終わりにしようか」

「くっそオオオオ!!」

二つの影が交差した

荒らしすぎたな……………

まず、こいつらを全員、回復能力リカバリイアップで回復させておくか……………

妖怪の回復力ならすぐ治るだろ

戦っている時城みたいの見たからそこがコイツらの基地みたいなもんだろう
さてと、あの建物にこいつら運ぶか……………でも、何匹いるんだこいつら？

愚痴をこぼしながら、天狗を運ぶ

これ終わったら、森を探すか……………

「う、うーん」

「ここは？私の部屋？敵は？私は、あの人間に倒されたはず、なのに何故？」

自分の体じゆうを見渡すが、傷がない。しかし、服は、汚れており夢では、無い事がわかる。

どういう事でしょう？ 援軍が、あいつを倒したのでしょうか？

いや、ありえない

自分の考えを即座に否定した

あの強さなら、白狼天狗全員かかっても勝てるか分からないなら……… アイツが回復をさせ………まで運んだのか？

理由が見つからないが、それなら納得できる

多分、白狼天狗も同じ処置を受けているだろう

少し安心した………

頭の整理がついたところで自分の姿を見る

服がドロドロだしシャワーでも浴びようかな

ベットから立ち上がりシャワー室に向かう

服を脱ぎ捨ててシャワーを浴び泥や血を流す

ふー スッキリする

蛇口を閉め、タオルで体の水滴を拭き取る

「……、……？」

あれ？誰かの声が聞こえる、白狼天狗か？

その時、私の部屋の扉が開かれる

「森には、いなかったなー ここにいるかな？…………… つて、あ」

扉を開けて入ってきたのは…………… あの人間だった

「あ、えっと、その……………」

私の姿を見てアタフタしだす、なんでだ？

「その…………… かつこう……………」

「?……………!?!」

そう言われ、理由を気づく

シャワーから出たばかりだったので私は、服を着ていなかった

タオルを持っていたが、小さなタオルだったので体を隠しきれていなかった

そして、私の格好を見て動揺したことで、初めて男だと分かった

「きゃあああああ!!」

風を起こしその男を吹き飛ばす

「うおおお!!」

あ、派手に吹き飛ばしてしまいました……………

早く服着ましょう……………

なぜ、こうなった？

後からついて来る人を見ながらそう思う

私は、今 この人間、天童拓也を天狗の長、天魔様のところに案内している

この男は、迷子を探しに来ただけで我われと敵対する気がないことがわかったからだ

コンコン

ドアをノックする

「射命丸です」

「入れ」

巨大な扉が開かれた

第三十七話 VS 天魔

やっと、天狗の長とご対面か……………長かったな……………

女の子こと事知っているかな？

開いた扉を通り抜け奥へと進む

奥には……………幼女？

「なあ、射命丸　なんでチビツコイ幼女がこんな所にいるんだ？」

「なっ!!?　私は、ちっちゃくないよ!!?」

身長130センチぐらいの天狗が足元でぴよんぴよん跳ねている

いや、君ちっちゃいから

「これでも、天狗の長なんだぞ!!?」

「はいはい、そういう設定のおままごとなんだろ？」

「違ーーう!!?」

「じゃあ、偶然そう言う名前か」

たつく、天魔は、どこにいるんだ？

「射命丸、天魔は？」

「ん」

そう言つて幼女を指さす

「いや、それじゃなくて……………」

「ん」

もう一度指をさす

「……………マジ？」

（。、）コク

……………はあ？　これが天狗の長？　マジで!?　俺にイジメられて半泣きしてるけ

どマジで？

「えっと、じゃあ本当にお前が天魔？」

「そうだと云っているだろう!？」

マジかよ、信じれん

「それで？私になにか用かい？これでも忙しいんだよ」

トップに立つ者は、大変なのか

「いや、嘘ですよね　天魔様何時もだらだら遊んでるだけじゃないですか」

「あー!!それ言っちゃダメー」

ほんと子供みたいな長だこと

「えつと、本題に入つていいか？」

何故か取つ組み合いを始めた射命丸と天魔を止めながら言う

「なに？」

「いや、人間の子供来ていないか聞きたいんだけど」

これまでの経歴を語る

カクカクシカジカで……………

「なるほど、よし私と勝負して勝ったら教えてやろう」

「……………はあ？」

何言つてんのこのロリ？

「私も一応天狗の長だ、部下がやられて黙っておれんだ」

成程

「いいで始めよう」

「それじゃあ It's show time」

中二病患者()にも

うむ、天狗だけあつて動きがなかなか早いな、射命丸程じゃないけど
弾幕を交わしながら考える

「よけるな!!」

「よけない奴がいるか!」

よけるだろ普通、当たったら痛そうだし

突如空中で爆発が起こる

なんだ?なんだ?能力の類か?

天魔を見ると口角がさがりニヤニヤしていた

手を前にだし握るしぐさをしだす

「なんだ?…:… ツカ!?!」

息ができない!?!何故だ?能力か?

何の能力だ?分かんねえと能力停止も使えねえし……:……
アヒリティキヤンセル
せめてどうなってる

か分かれば

「ククククク、苦しいか？お前の周りの酸素を無くしたのだ」

酸素を無くしただ？息が出来ないのはキツイな

やばい意識が朦朧としてきた、脳に酸素が行っていないな、早く打開策を……………そうだ!!

「ククククク、これで私の勝ちかな？」

「甜めんじゃねえぞ」

「な!?どうやって息をしている!!」

「なければ作ればいいだけだ!!」

緑さん能力『植物を操る程度の能力』で植物を出し、付与エンチャントで植物に基礎能力アップパラメータの

アビリティ（能）を付け光合成を活発にさせたのだ

「お返しをしてやる 能力模倣アビリティでコピー模倣対象識別コード「文」あや!!」

「え？私？」

風を手のひらで集め回転を上げていく

「くらえ螺〇丸!!」

「きやあああああ」

こうして、俺と天魔の戦いは、決着がついた

第三十八話 帰宅

「いやー中々苦戦したな、何の能力だ？」

膨れている天魔に聞く

「『空気を操る程度の能力』さ、気体ならなんでも変換させたり操れたりできるのさ」

ああ、じゃあの時爆発したのは、水素か

結構使い道ありそうだな……………

「それじゃあ俺が勝った事だし、女の子のこと話してもらおうか」

「ちえ、分かったよ 付いて来て」

天魔に案内されてある部屋に着く

天魔がその扉を開けると

「天ちゃん」

小さな女の子が天魔に飛び付いた

「こら!! 離れんか!!」

「いやー」

この子がその女の子だろうか？

「天童 この子がその女の子だ」

あ、やっぱそうなのね

「なんでこんな所にいるんだ？」

普通の妖怪なら匿ったりしないだろうし

「べ、別に遊び相手が欲しかったわけじゃないし!!」

自分で暴露してんじゃねえーか!!

てか、その言い方お前ツンデレか

「お姉さん誰ー？」

可愛らしく首をかしげながら聞いてくる

俺は、お姉さんじゃないです

「俺は、天童拓也、神様だ 決してお姉さんではないよ

君のお母さんに頼まれて迎えに来た」

「え!?! 神様!?!」

「あれ言ってなかったけ？」

「言ってない(です)!!」

あれ？そうだっけ まあ問題ないだろ？

「それじゃ、帰ろうか」

「うん」

「天魔 この子連れていくぞ」

「べ、別に私は、寂しくないもん」

「声裏返ってるぞ」

変なところで気を張るなこいつ

「アビリティコピー コピー
能力模倣模倣対象「みかみ美紙」」

紙を操る程度の能力を使用し、デツカイ鶴を作る

「ほら、乗って」

「うわあーすごーい 天ちゃんバイバイ」

「ううううう、ぶあい……………ぶあい……………」

もう泣いてんじやねえーか

「二度と会えないわけじゃないんだから」

「わがっでる!!」

そろそろ行くか

「そんじゃ、しゅっぱーっ」

鶴は、空を飛ぶ

「すごーい、お空飛んでる」

さつさと帰るか

鶴は、スピードを上げた

「ありがとうございました」

「いえいえ」

女の子をお母さんのとこに返した

「それでは、俺は、ここで」

「バイバイ、神様のお兄さん」

「本当にありがとう………え？神様？」

めんどくさくなる前に帰ろう

その時、俺にめがけて光速で何かが近づいていることを知らなかった

「フフフフ、やっと見つけましたよ」

あのマスターこんなところにいたとは

まあ、とにかく

「この数週間、よくも放つたらかしにしてくれましたね」

光速でマスターに突っ込む

「この、クズ、クソマスター」

「ん？グウフオオオオオオオオ！」

ふー 殴つたら少しスツキリしました

「うん？ああ、光か」

「光か じゃないです ここ数週間私をおいてどこ行っていてたんですか？」

「いやー悪い悪い、完全に存在忘れてたわ」

「そんな!!? (。 ㄩ ー ー ー)」

酷い、酷すぎる

「読者も半分ぐらい忘れてただろう、多分」

「読者って何ですか!？」

ダメだこの人の話には、ついていけない

「それでどこ行っていたんですか？」

「聖徳太子のどこ」

あ？！

いやー光の事完全に忘れてたわ

まあいいか

「良くないです!!」

心の中読まないで……………

なんやかんやしてるうちに神子の家に着いた

「ただいまー」

「うむ、おかえり…………… 拓也、その方は？」

「ああ、布都か コイツは光、付喪神だ」

「私、月明 光と言いますウチのマスター^{バカ}がお世話になっています」

「おい光 今、マスターと書いてバカと呼んだらろ」

「何のことですか？」

「上等だ表出ろや!!」

「拓也何やっておる!!? ささ、上がって下さい」

「お邪魔しまーす！」

光と布都はそのまま奥へ行ってしまった

「……………屠自古」

「なに？」

「神子は？」

「あなたのいない間なるべく外との接触は、避けさせたわ 問題ないはず」

「そうか、ありがとう」

神子が安全が分かればいいや今日は、疲れたから寝よ

第三十九話 少しの違和感

妖怪の山の一件以来、また暇が続いていた

何か、光も住み着いてるし、と言うかこの家に住んでる男女比1:4ておかしいだろ
男子来いよ!! いや、来ても困るんだけども

それにしても、全然神子に会わないなあ どこ行ってるんだ?

そんなことを考えてると見知った人影が…… 神子だ

「おう、神子 おはよう」

「……」

あれ? 反応なし!?

「神子ー」

「びゃ!? た、拓也さん!? ど、どうしたんですか?」

「いや、そつちがどうしたんだよ? 挨拶しても反応してくれないし」

軽く泣きそうになっただぞ

「ああ、スミマセン ちよつと考え事してたので」

考え事? なんだろう? 乙女には、色々あるんだろうか?

「まあ、大変だろうけど頑張れよ」

「……………はい」

神子に元気がなかったのは気のせいだろうか？

今、俺は妖怪の山に来ている

理由は、この前の女の子に「天ちゃんに会いたい」と頼まれたからである
ちやんとお母さんにも了承を貰っている

神子の事は、まあ光もいるし大丈夫だろ……………

むしろ、あいつらが何かしないかの方が心配である

「天ちゃん遊びに来たよ!!」

「別に会いたかったなんて全然思っていないし、寂しくも全然なかったし」

何時までその強がりキャラやるんだよ

「そっか、じゃあ帰ろうか」

「ゑ?」

「そうだね、天ちゃん私と会いたくなかったんだね」

「ちよ」

「帰ろっか」

「うん」

「ちよつと待つてえええええええええええええええええ!?ごめん、私が悪かったから、行かないで、お願いいたします、私を捨てないで!!」

最後の方向か変な言い方だな、はたから見たら勘違いされそうな言い方すんじゃないや
ねえーよ

「天魔様……………」

文も呆れてるじゃん

「天ちゃん泣かないで、一緒に遊ぼ」

「グッス うん」

それじゃあ、俺は、迎えの時間までのんびりするk 「拓也さん
方を教えて下さい」 そうはいかないらしい、人生というやつは
あの、螺旋○のやり

約束の時間になったから帰るか

「拓也さん!! もうちよつと、もうちよつとだけでいいですから」
「ダメだつて言ってるだろ!! 諦めろ」

と言うか、文がなら一人でも習得できるだろうし

「天ちゃん、バイバイ」

「また来てもいいし」

「何時までそのキャラやるの?」

「五月蠅い!!」

へいへいスミマセン

「そんじゃ、帰るぞ」

「はーい」

今日は、おんぶして空を飛び帰る

ヤバイ、5時まであと5分しかねえ

スピードを上げて帰った

「ただいま」

「「おかえり（なさい）」」

あれ？また、神子がない

「神子は？」

「部屋におるぞ」

「OK、布都Thanks」

「それは、どこの言語じゃ？」

あ、今の時代英語知らないか

「神子、ただいま」

「!! 拓也さんでしたか、おかえりなさい」

やっぱり、俺にビビってる？

「俺なんかしたかな？」

「?いえ、別に何もされてませんが」

「そうだよな」

よかつたー

「じゃあ、部屋戻るから 何かあったら呼んでくれ」

「……はい」

ら……………この時、神子の変化に気づくべきだった、そした

第四十話 尸解仙になるには

「神子、おはよー!!!」

「…… おはようございます」

神子を見るからに体調が悪そうだった

「大丈夫か？」

「…… はい」

「休んどいた方がいいよ」

3日後

神子は、相変わらず寝込んだままだ

早く元気にならないかなー

1 週間たったが、一向に良くなる気配を見せない
それどころか、どんどん衰弱している
大丈夫か？

2 週間がたった、神子が血を吐いた
衰弱もいちじるしくなった

くっそ!!!

何なんだよ、俺にできること、出来ることはないのか!?

.....
そうだ!!

薬を作ることができれば.....

薬草が取れそうな場所って言ったら.....

妖怪の山か.....

よし、行くか

薬草を求め妖怪の山へ

「神子が、大変なんだ手伝ってくれるか?天魔」

「まあ、良いだろう 1つ貸しだからな」

「分かったよ……………ありがとう」

「気にしなくていいよ」

天魔がこういうやつで良かった

「じゃ、指定する薬草を頼む

まずは……………」

なんでだ!!? なんでできない!?

永琳の能力を使い薬を作ろうとしたが……………うまいこといつていない

なんでだ? 病気とは違うのか?

何があった? 神子のまわりで、ここ数週間の間……………

まさか!!

.....

「神子、正直に答えろ 仙人とあつたな？」

「..... ええ」

「やっぱりか..... くっそ!!」

「これを飲めば仙人になれると言われて」

「これは..... 辰砂（HgS）だ」

辰砂、水銀が塩素と化合したもので非常に高い毒性を持っている

辰砂などの水銀化合物は、その特性や外見から昔は、不死の薬として珍重されて、中国の皇帝などに愛用されていた

不老不死の薬、「仙丹」の原料と信じられていて、それが日本に伝わり飛鳥時代の女帝持統天皇も若さと美しさを保つために飲んでいたと言われている

今は、ちょうど飛鳥時代……………

「あら、だいぶ進んでるわねえ」

「!？」

そこには、青髪の仙人……霍青娥がいた

「神子になんてもの飲ましたんだ」

「仙人にするために、薬を飲んでもらったただけだけど？」

「ふざけんな!!薬だあ?ただの毒じゃねえか!!」

轟と、神力が溢れ出す

「一つだけ聞く、神子はどうなる」

「さあ?どうなるんでしょうねえ」

プチと俺の中で何かが切れた音がした

「プチコロシテヤロウカ？」

地面を蹴り、右拳を振り上げ叩き込む

が、しかし手ごたえがない

それどころか、霍青娥をすり抜けてしまった

「なっ?!」

「ふふ」

「クツソが」

「無駄よ、私は、貴方という壁を何度でもすり抜ける」

何度も何度も試したが、すり抜けてしまう

「なんなんだ!?!、それは!!」

『壁をすり抜けられる程度の能力』、まあ私自体にあるんじゃないやなくてコレにあるんだだけ
ど」

と、ツンツンと簪を叩いて見せる

能力なら、どうにでもなる

足に力を込めて、霍青娥の懐へ飛び出す

「アビリティキャンセル能力停止!!」

「何度やっても同じ」

しかし、霍青娥は腕を確かに掴まれた

「なっ!？」

「ようやく捕まえたぜ」

能力を解かないように注意をしながら

「ひとつ質問する」

「何かしら?」

「神子は、豊聡耳神子は本当にもう助からないのか?」

「ええ」

「そうか、ならお前は、用済み「仙人に、尸解仙になるには、一度死ぬ必要があるの」」

「はあ?」

一回死なないといけないだど?

「私が最後の手を加えれば、何年後になるかわからないけど仙人になれるわよ、まあその

気が私には無いんだけど」

「やれ、そしたら見逃してやる」

何としても成功させてやる

「分かったわ、行きましよう?」

「…………… 成功するんだらうな」

「どうでしょう、五分五分と言ったところかしら」

相変わらずヘラヘラ笑っている

「もし失敗したら、テメエを「成功したわよ」……………」

そうか、ここに俺がいる理由が消えたな

立ち上がり部屋を出ていく

「…………… 屠自古、布都」

部屋を出ると二人がいた

「拓也、ワシらも、仙人になろうと思う」

「なっ!!一回死ぬことになるんだぞ!!」

「分かっている、が、あの方を太子様を一人にはできないからな」

「……… そっか、分かったよ」

「二人とも神子をたのんだ」

「ああ」

「任しておけ」

「二人を後にし家を出る」

「……光」

「止めなくて良かったんですか?」

「少し心配そうに見てくる」

「ああ、あいつらが決めたことだからな」

「そう言っても、後悔してないわけではない」

「……… 帰るか」

「……… はい」

「とは、言っても向かう場所に、心当たりが見つからないが………」

どこを目指すわけでもなく、ただただ次の出会いをもとめて歩いていく……

オリキヤラ説明2

天童 拓也（てんどうたくや）

能力：『能力を操る程度の能力』

神化？ 『能力を司る程度の能力』

性別 男 身長 165cm

種族 全能神

年齢

?????
歳

・基礎^{パラメータ}能力アップ

基礎能力値を上げる能力

（力）^{パワー} すべての能力値を1.5アップさせる

（攻）^{アタック} 攻撃力アップさせる

（守）^{プロテクト} 防御力アップさせる

（速）^{スピード} 速度アップさせる

（技）^{テクニク} 技術の模倣する

（能）^{アビリティ} 特殊能力アップさせる

一度に使えるのは三つまで

Level1からLevel5まであり、Levelが増える事に能力値が上がる

注 (Levelは、言わない)

(攻) (守) (速) は、もう一段階上がある

アタック

プロテクト

スピード

アタック

プロテクト

スピード

アタック

プロテクト

スピード

アタック

プロテクト

スピード

アタック

プロテクト

スピード

アタック

プロテクト

スピード

(攻) ? (破壊)

(守) ? (反射)

(速) ? (光速)

(破壊)

(反射)

(光速)

すべてを破壊する (誤って自分の腕を破壊することもある)

攻撃を反射する事が出来る

光速で行動することが出来る

この3つのいずれかを使う時、一つしか能力を使えない

アビリティコピー
能力模倣

能力名を知る、能力を認識する

この二つの条件を満たせば相手の能力が使える

一度に使えるのは一つまで

○ 『金属を操る程度の能力』 音無鈴

- 『あらゆる葉を作る程度の能力』 八意永琳
- 『劣化させる程度の能力』 劣鬼
- 『重力を操る程度の能力』 重鬼
- 『ありとあらゆる物を貫く程度の能力』 剛力要
- 『傷を癒す程度の能力』 薬師恵
- 『植物を操る程度の能力』 草壁緑
- 『音を操る程度の能力』 音無響
- 『紙を操る程度の能力』 美紙彩
- 『霧を操る程度の能力』 渋谷霧栄
- 『ありとあらゆる物を遮る程度の能力』 剛力円
- 『絵を具現化する程度の能力』 墨野絵里
- 『繊維を操る程度の能力』 生糸小鞠
- 『電子を操る程度の能力』 原子穂
- ？ 『五感を繋ぐ程度の能力』 夢彩結
- 『乾を創造する程度の能力』 八坂神奈子
- 『坤を創造する程度の能力』 洩矢諏訪子
- ？ 『十人の話を同時に聞く程度の能力』 豊聡耳神子

○ 『風を操る程度の能力』 射命丸文

○ 『空気を操る程度の能力』 天魔

○ 『壁をすり抜ける程度の能力』 霍青娥

○ ↓使える ? ↓使えない

・ アビリティストップ
能力停止

相手の能力を停止させる

相手の能力が分かっていない場合使用不可

自分も能力が使えないくなる

・ エンチャント
付与

能力を対象の物、人に付けることができる

・ リカバリエイ
回復能力アップ

回復能力を一時的に上げる

体力を使うため疲れると、効力が落ちる

・能力破壊
アビリティイブレイク

対象の能力を消す

能力での攻撃を打ち消す

(イーメージ的には幻想殺し、違うのは能力者に対して使うと相手が能力を失うこと)

・能力創造
アビリティメイク

能力を作ることができる

一度使うと次に使えるのが一年後

少しおちやらかな温厚で優しい男の子

神の手違いで死んで転生した転生者

茶髪の髪でアホ毛が立っていて、髪を後ろで結っている

中性的な顔だちをしている

服装：白いシャツ 黒いジャケット 黒いジーパン 左手首に鈴の鈴蘭の模様の腕輪

月明 光 (つきあかりひかり)

能力：『光を司る程度の能力』

性別 女 身長 154cm

種族 付喪神

年齢 ???歳

光を吸収し攻撃に変える レーザーや、光弾も吸収することができる

少しの間光速(299,792,458 m / s)で動くことができる

目はクリつとして蒼い、輝く金髪は横で三つ編みを作り後ろで束ねている

性格は、真面目で怒るとすごく怖い

お酒に弱い

服装：真っ白なワンピース 腰に月明光を掛けている

第四章 竹取物語編

第四十一話 境界を操る妖怪

今俺は、全国を転々として、回っている

だから一定の所に留まらない状態である

基本、食べ物、自分で採って自分で料理する

そんな生活を続けていた……………

「もう限界です!!」

「えー結構楽しいじゃん、野宿とか」

「私、一応女子なんですけど!?!」

光さんが五月蠅い、もう女子って年じゃないのに……………

まあ、無視して食べるか

今日の献立、焼き魚、山菜のあえもの

うーん、やっぱり日本人として、穀物食べたいよなー 無いからしょうがないけど、と

言うか普通の今の時代の食事に比べればいい食事してるよな…………… うん、うまい

「聞いてますか？」

「モグモグ きゆいてにやい（聞いてない）」

「聞いてくださいよ!？」

「ゴツクン 食わないの？」

「食べます!!」

うん、俺の料理スキルがまた上がったぜ

フフフフフ、フフフフフ、フフフフフ

ん？

「光？何笑ってんの？」

「？、笑ってませんよ？」

「いや、でも今……………」

フフフフフ、フフフフフ、フフフフフ

「マ、マスター!？」

まただな、なんなんだ？

ガツシ

「な!?!」

何も無い空間に亀裂が入り、手が伸びて俺の足を掴んできた
その手の力は、強くそのまま引きずり込まれる……

「せい」

「きゃあああ!?!」

ことは、なく逆にその手の犯人を引きずり出す

「何だんだ?……妖怪かな?」

見ると、小さな（小学生ぐらい?）の女の子がいた

「なんで?なんで人間が妖怪の力に勝てるのよ!?!」

成程、人間と違って襲ったのか

「残念、俺等神様」

「え!?!」

その子は絶望しきった顔になり

「う、うえ、うえええええええん」

泣き出した

え!? なんです? ちよつと泣かないでくれよ!!

「うわあー」

光さん、うわあー泣かしたって顔で見ないでくださいよ

「うえええええええん」

「いい加減泣き止んで!! こっちが泣きたくなってきたから!!」

「スミマセン、とつて食われると思って」

「いや、食べないよ」

ハモった

「何であんな事を？」

「私、弱い下級妖怪だから、こうやって人間を捕まえるしかなくて」

なるほど……………

「さっきのは能力かい？」

「はい、スキマっていうのを開けるだけなんですけど……………こんな感じに」

パツカと空間に亀裂ができる

「おお!!」

「そういえば名前聞いてなかったね、俺は、天童拓也

こっちは、月明光だ」

「光です、よろしく」

「私は、八雲紫です」

「じゃあ、ゆかりんで」

「なんですかそのあだ名!？」

「ゆかりくん、ゆかりんの能力って『スキマを開く程度の能力』?」

「ゆかりんは、止めてください!?!多分そうだと思いますが」

「んー でもなー さつきからコピー出来ないんだよなー」

「え?コピー?」「え!出来ないんですか?」

「うん、だからゆかりの、の能力はもつとすごいと思うんだけど」

「そんな!!私なんて全然ダメですよ!?!」

ゆかりんは、手を横に振る

「だからさ、ゆかりんさえ良ければ調べさせてもらえないかな?」

「能力をですか?」

「そう」

「で、出来るんですか!?!」

近い!?!近い!?!　そして、光さん怖い!!怖い!!

「相手の許可がいるけど…… どうするやる?」

「はい!!私にもつと可能性があるなら、それを知りたいです!!」

「分かった、ちよつと失礼」

ゆかりんの頭に手を置く

「検索!!」^{サーチ}

頭の中に情報が流れ込んでくる

…… スキマ妖怪……

…… ただ一人の種族……

八雲…… 賢者…… スキマ…… 境界……

…… 操る……

能力……

「ふうー分かったよ『境界を操る程度の能力』だ」

「境界?」

説明が要りそうな感じの反応だな……

「境界っていうのは境界のことだ、それを操れるということは結構すごいことだぞ

絵や夢、物語の中の中にすら入り込むことが可能だし、

水と空気の境界である水面、天と地の境界である地平線すらも操れることが出来る」

「そ、壮大すぎて想像ができません」

まあ、そんなだけの力を使うには、そうとう強くならないと無理だろうけど

「上級妖怪ぐらいにならないと多分しっかり使えないぞ」

「え!?! そうなんですか?」

「まあ、少しは、特訓につきやってやるよ、ゆかりん♪」

「ありがとうございます、と、言うか、ゆかりんで決定なんですね……………」

ゆかりんは、ガツクリと肩を落とした

第四十二話 月の姫からの難題

面白い情報が入った

その情報は、都で買い物した時のことだ

何時も通り、調味料を買っていたら、屋台のおっさんが話してくれた

” あんちゃん知ってるか？ 都にかぐや姫っていう人がいるんだって”

” かぐや姫?”

” そう、かぐや姫だ、なんでもすつごい美女で、金持ちたちが何人も求婚に行ってるらしいんだ か〜!!俺も一目でもいいから見てみたいな〜”

かぐや姫、日本最古の物語である竹取物語に出てくる竹から生まれた、月出身の姫である

実話だったとは……………

もしかしたら、かぐや姫をとうして月とコンタクトが取れるかもしれないな……………

かぐや姫か…………… 会いに行ってみようかな？

でも、流石にこの格好は、目立つよな…………… 神子の時は気にしてなかったけど

今の服装は、洋服よりである

和服ばつかの時代では浮きまくりである

しゃーない、途中で買うか……………

着替え完了、黒ベースの浴衣みたいのにしてみた
変じゃないかな？

えつと、ここかな？

デツカイ、館だな……

「待て!!」

「うお!!」

門番? に止められる

「おなごが何のようだ?」

え?

「おなごじゃ、ないです」

「え? ああそうか、貴様みたいのがまさか姫に求婚と言う訳では無いだろうな?」

はい、違います

求婚に来たわけじゃないしなあ

そうだ!!

「私は、姫を一目見るだけで満足です その為に試練を受けに来ました」

一応丁寧な言葉で

「うむ、そうかでは、通るがよい」

よかったー通してくれた

1、2、3…… もう何人かいるなー

「かぐや姫のおなーりー」

お!! やつとか……… ん?

スダレみたいみたいなのでも顔見えないな

「おお、かぐや姫わたしと結婚してくれ!!」

「いや、私と!!」

「いや、私と!!」

おっさん達元気だな

「石作皇子と申します、ぜひ私と結婚を!!」

「車持皇子と申します、絶対幸にしてみせます!!」

「右大臣阿倍御と申します、私こそがあなたにふさわしいです、ぜひ私と!!」

「大納言大伴御行です、あなたが望むのをも手に入れます!!」

「中納言石上麻呂と申します、あなたのことを思うと夜も眠れません、ぜひ私と結婚!!」

「……… ん?」

「おいお前!! 自己紹介は!?!」

ああ、俺かあ

「天童拓也、結婚は別にいいです、ただあなたと会って話がしたいだけです」
 「「「な、なに〜!!」」」

結婚する気ないし、と言うか月に繋がりがあかな?と思つてきたわけだし

「天童……拓也……」

かぐや姫さんにも印象がついたみたいだな

「分かりました」

では、石作皇子は仏教の宝である『仏の御石の鉢』を車持皇子は美しい七色の実を付ける『蓬萊の玉の枝』、右大臣阿倍御主人は燃えない毛皮の『火鼠の裘』、大納言大伴御行は龍が持つと言われる『龍の首の珠』、中納言石上麻呂は『燕の産んだ子安貝』、天童拓也さんは、この先南にある太陽の畑に生えているという『向日葵』を持つて来てくだ
 さい

持つてこれた方の要求をのみましよう」

うえー ハードだなみんな………

にしても、俺だけ向日葵?簡単すぎだろ?

それにしてもみんななんで自信満々なのか?

あ、そっか、偽物作つてくるんだったな………

どうせバレるのに………

「ククククク、小僧残念だったな？」

お、この人俺を男として認識してた

久しぶりだな……なんか嬉しい

「太陽の畑には、強力な花の妖怪がいる 命が惜しかったら諦めるんだな」

ああ、全然簡単じゃなかったな……

まあ、明日にでも行ってみるか……

命足りるだろうか？

第四十三話

VS花の大妖怪

「…………… と言う訳で、今から太陽の畑に行きたいと思いまっす!!」

「と言う訳でじゃない!! なんなんですか、あなたは!？」

次から次へと厄介事持ち込んで、あなたホントはドMでしょ!! このドM!!」

「Mじゃねえよ!!」

何だよ、この前伝えず行動してた時怒ったくせに、伝えても怒るのかよ

「それじゃー出発ー」

「話聞いてました!？」

「ここが太陽の畑か…………… 向日葵しかないんじゃないん？」

右を見ても左を見ても一面向日葵畑である

「ん？あれは……………」

向日葵畑の中心に白のカッターシャツとチェックが入った赤のロングスカートを着用し、その上から同じくチェック柄のベストを羽織って日傘をさす緑の髪の女性がいた

「こんにちはー」

「あら、こんにちは」

「綺麗な向日葵ですね」

「ええ、心を込めて育ててますもの」

「一本貰っても？」

「いいわよ」

「よかったー断られたらどうしようと思ってたけど……………」

「ただし……………」

「ん？」

「あなたも命と引換に…… ね？」

なっ!?

突如、閃光が襲う

「くっ」

空に一旦避難する、が

向日葵が追尾してくる

「光!!」

手に月明光^{ゲツメイコウ}、黄色い刀身の日本刀が手に現れる

「テエリアアアアア!!」

花を薙ぎ払い、緑の髪に斬りかかる

キーンと、甲高い音を立て傘と剣が交じり合う

はあ?なんで斬れないの?、あの傘どんなに硬いんだよ!!

「基礎能力アップパラメータ(攻)アタック(守)プロテクト(速)スピード Level 3!!」

次々と襲いくる向日葵を躲し、懐に潜り込み

「光符「光明斬」!!」

光の斬撃を至近距離で放つ

少しはダメージ入っただろう

攻撃によって巻き上がった煙の方を見ていると、突如極太レーザーが飛んできた
「ツツ!？」

身をよじり回避を試みるが間に合わず、月明光で受け止める形で吹き飛ばされる
「ガアツ!!」

「ふふふ、いいわ、いいわ、すつこくいい 久しぶりにワクワクして来たわ!!」
なんか、オラ、ワクワクすつぞ!!みたいな感じになってるんですけど………
遠くにいる敵を見ていると、一瞬にして目の前まで来る
!!

急に速度上がり過ぎだろ!!

くっそ、防ぐので精一杯だ

敵のラツシユを防ぐのが精一杯で反撃ができない

「ハア!!」

「ガハアツ!!」

腕を弾かれ腹に叩き込まれる

つ、強ええええ なんなんだよコイツ!?

敵を見ると傘をこちら側に向けていた

傘の先には、高エネルギー

本能的に危険を察知する

「ヤバツ!？」

「元祖「マスタースパーク」!!」

傘の先端から極太レーザーが放たれる

「くっ!!^{チェンジ}変更Level5!!」

最大出力で躲す

あつぶねー

あれ? そう言えば……………

「なんで戦ってたんだ?」

戦いになっている理由がわからない

「俺らなんで戦ってたんの? えっと……………」

「風見幽香よ、あなたが向日葵を採ろうとしたからでしょ?」

「イヤだから何でだよ」

「あなたは向日葵の命を奪おうとした、だから私あなたの命を貰うの」

「?」

本当にようわからん

「まあ、今は強い相手と戦いたいただけけどね」

戦闘狂かよ!!

ガシ

足に違和感を感じ、視線を落とす。そこには、足に絡みつく向日葵のツタがあった。慌てて蔦を切った。

その瞬間、風見幽香から目を離していた。

その一瞬が命取りだった。

風見幽香は、距離をゼロまで一気に詰めてきて、傘を突き立てる。

しかし、さつきまでとは違う

Level 3

月明光を使って傘を受け流し、そのまま攻撃

「!?」

ギリギリのところかわされ、髪の毛に当たり風見幽香の緑の髪が舞う。

いきなりの、動きの変化に戸惑う風見幽香を隙を見逃さず、もう一撃放つ。

「クツウ!!」

風見は向日葵を操り妨害をする……………が

「能力模倣模倣対象」アビリティコピー コピー「緑」みどり

こつちも、向日葵植物を操り、応戦する

「しゃくらせえ!!」 緑符「プラント・インパクト」!!

植物を集め、手の形を作り叩き込む

「グウ」

傘で防御を試みたが、威力を殺しきれず吹き飛ば

風見幽香の持つ傘がくの字に折れ曲がる

やったか……………？

しかし、倒れずに風見幽香は、立っていた

ポロポロになりながら、血を流しながら

それでも彼女は笑っていた

その姿は、異形だった

静寂が広い、広い、向日葵畑を包む

そして……………

全能神は剣を構え

花の妖怪大妖怪は傘を構え

そして、二つの影が激突した

第四十四話 輝夜の頼み

うへえー強かったー

今までで一番強かったな……………

「疲れましたねえ」

「ああ」

まあ、向日葵を無事手に入れたからいいか

もう、戦うのは、ゴメンだけど

屋敷についたな

ん？あれは……… 右大臣阿倍御主人か

えっと、燃えない毛皮、火鼠の裘を持って来いって言われてた人だ

あ、毛皮燃やされた

ああ、ああ、めっちゃ燃え上がってんじゃん

かわいそうに、帰っていちやった

おお、次に来たのは、車持皇子か

なんだっけ？あの人々が持つてこいって言われた物

そう思っていると、家来みたいな人が綺麗な玉をつけた枝を出してきた

ああ、蓬莱の玉の枝か

なんだったけな、確かあれガラス細工だったけ？

「あなたの言う蓬莱の玉の枝を持つて参りました」

うーん、なかなか精巧に作られているな

まあ、バレるんだけど

「これは!!本物です……」

「やったあ!!」

かぐや姫困ってんな、でも大丈夫、今 取り立て呼んできたから

「車持皇子様!!ちゃんとお金を払ってください!!」

「なっ!?!お前らは」

しつかりお金は、払ってから来ようぜ

さてと、俺の番か………

「向日葵を持って参りました」

「いいでしょう、中へどうぞ」

かぐや姫に呼ばれて中へ

うわあ、めっちゃ睨んでる、睨んでる

自分が悪いんだろ

怖いなあ ……

「失礼しまーす」

部屋に入ると、黒髪ロングの姫、かぐや姫がいた

確かに美しい

「どうぞ」

「どうも」

お爺さんがお茶を置いていく、この人が竹取りの翁かな？

「下がっていいわ」

かぐや姫がそう言うとおじいさんは、部屋から出ていった

「…… あー疲れた、なんなのあのクソオヤジどもは、揃いも揃って嫌な奴ばっかり」

「え？」

さつきまでの喋り方から一変、すごい口が悪くなった

「ああ、ごめんなさい でもこれが素だから」

「はあ」

「改めて自己紹介するわ、蓬萊山輝夜よ

それにしても会えて嬉しいわ、天童拓也さん」

「え？俺の事知ってたの？」

「当然よ、月にいる者なら誰でも知ってるわ、教科書に載ってるぐらいだから……でも、まさか女だったとは」

「女じゃない!!」

みんな間違えてくるな……

まあそんなことよりも、俺 教科書に載っているってマジかよ

「どんなふうに言われてんの？」

少しワクワク

「問題児軍の問題教官」

「何その悪口!!」

酷くねえか？

問題児軍ってあいつらのことか!?!絶対あいつらだな!?!俺関係なくない!?!

問題教官って何だよ あれか？警戒態勢の時、連絡行つてなくて、あっちこっちブラブラしてたからか？ツクヨミが住んでるタワーを壊しかけたことか？

「ププツ　嘘よそんな訳無いじゃない、英雄さん」

「英雄？」

「地球から月への移動のさい、一人で地球に残り妖怪の追撃を防ぎ多くの人の命を救って、死んだと言われているわ」

「いや、死んでねえよ?!　確かに死にかけてたけども……」

「まあ、永琳は　あの人のことだから地球で飄々と生きてるわ　って言ってたけどね」
「永琳を知ってるのか？」

「ええ、私の世話係だったからね、あなたのことはよく聞いたわ、永琳は何時も貴方の事を嬉しそうに話してたわ

天童拓也　「名前が出た時まさかと思ってたけど、本物だったなんてね」

「そうか、永琳も頑張ってるんだな」

「拓也、一つお願い聞いてくれない？」

「お願い？」　スズツ

「質問に質問で返しながら、お茶をすすする

あ、美味しい

「私を誘拐して」

「ぶっ!!熱ッ………　はあ？」

何を言ってるのこの子？

「次の満月の日、月から迎えが来るの」

竹取物語でもそうだったな、確か帝が軍を用意してもダメだったけ

「私、月に帰りたくないの」

え？

「私は、月での生活に飽き飽きしてたの だから蓬萊の薬を飲むという罪を犯し地上に降ろされるようにしたの、もしかしたら永琳が言っていた、天童拓也に会えるかもって、そうでなくても、この退屈な生活も変わるかもって」

「地上に降りてから毎日が楽しかったの」

だから私は、退屈なあそこへ戻りたくないの」

誘拐して言うのは逃がしてくれていいことか

「心配しなくても大丈夫さ、お前が願えばうまくいくって」

「本当？」

「ああ、願いを叶えてこそ神様だしな」

「え？拓也って神様なの？」

「まあな、とにかく俺に任せとけ!!お前の望みは俺が叶えてやる」

「フフ、ありがとう そして、よろしくね拓也」

「おう、任せとけ!! 輝夜」

第四十五話 対、月の使者の作戦会議

「話し合いするならコイツも出しとくか……………」
光

「はい」

拓也の持っていた刀が女の子になった

「え？…えっ？」

え？…何が起こったの？

「コイツは、月明 光だ」

「光です よろしくお願ひします」

普通に自己紹介してるけどなんなのこの子は？

と言うか、なんで刀が

「えつと、なんで刀が人に？」

「？」

ダメだ… 二人とも何がおかしい？ って顔してる

「普通刀は人にならないわよネ」

「!!」

あ、伝わったみたい

「光は元々刀だったんだけど、付喪神として人になれるようになったんだ」
「という事は、アナタも神様ってこと？」

「はい、そうです」

「じゃあ、自己紹介も終わったし話きかせてくれる？」

「はい、わかりました」

すこし、心配になってきた……………

「まず、いつ来るか どんな奴か 後武器とか戦法かな」

「いつ来るかは、次の満月の夜ね」

「明日ですね」

早いな……………

「武器は、月で最新鋭の武器で来ると思うわ」

「最新鋭って？」

レーザー砲とか、ビームサーベルとか……………かな？

「まあ、今の時代の技術の数万年後ぐらいの技術の兵器で間違いないわ」

「こつちの戦力（地上の兵）は、役に立たなそうだな

「どんな奴かって言うのは、あなたも知っているわ」

「俺が知っている？」

「ええ、軍総隊長…………… 剛力要」

「うんうん、軍総隊長の剛力要…………… え？ はあ？ 要え!?!」

要が総隊長？何あいつめちやくちや偉くなってるんじやんか

「その要さんの奥さんの軍医療部隊 隊長、剛力恵さん」

「ああ、恵…………… ん？奥さん!?! 剛力!?!」

あの二人結婚したの!?!

「後、軍最強の特殊部隊の美紙彩、剛力円、渋谷霧栄、音無響」

あいつらかよ!?!いや問題児だよねあいつら!!

「こんな所かしらね」

全部知り合いなんですけど……………

「情報は、オシマイ……………何かある？」

「何も無い……………じゃあ、色々準備とかするから、明日な」

「ええ明日」

くある森にある手作りログハウスく

コタツに入りながら考え事をしていた

え？コタツどうしたかって？作ったんだよ!!寒いんだよ!!この頃

うーん、どうしようかな……………

相手は、知り合いだしな……………顔バレたくないしな

ズズツ あくお茶うめえく 身に染みる

「私にも一杯下さいな」

「ああ、ちよつと待つてろ」

ゆかりんに、お茶を注いでやる

「隙間使つて出て来たんだから、もう少し驚いてもいいと思うんだけど……………」

「この年になると、大抵のことじゃ驚かんのじゃよ」

あれ、今何歳だっけ？

ま、いいか

「ゆかりん」

「なあに？それとゆかりんは、止めて」

「明日、多分お前を呼ぶからそんな時手伝つてくれよな」

「いいわよ、師匠の頼みだし」

さて、ゆかりんにも頼めたしあとは、明日になるのを待つだけか……………

そのままこたつで睡眠しよう、おやすm「コタツで寝たら風邪ひきますよ」……………
布団
に行くか……………

第四十六話

ヒーローは遅れてやって来る

私のお屋敷にはたくさんのお軍隊が押し寄せてきていた

お爺さんに月からの迎えがあると云ったら、大変な事になってしまった……………

天皇が兵士たちを集めようだ

それにしても、拓也はどこかしら？

「敵軍!!敵軍!!戦闘準備よーい!!」

兵士の一人が叫ぶ

月の兵士のおでましのようだ

空から降りてきたのは、鉄で覆われた船であつた

普通の船では無く、宇宙艦のなうな形だ

「弓矢隊よーい!! 放て……………!!」

弓矢を持った兵士たちが一歩前へ出て一斉に火矢を放つ

この時代ではかなり強力な攻撃だろう……………が

戦艦の装甲を撃ち破れるわけは無く、だだむなしく弾かれていく

「怯むなー!!放て!!」

弓矢を放ち続けるがギズすらつけられない

突如、戦艦の先頭についている大砲のようなものが光り出した

あれは!!

「逃げてえ!!」

危険を伝えるために叫ぶ　次の瞬間、大砲から高エネルギーのレーザーが発射され

兵士を薙ぎ払う

一瞬にして多くの兵士を灰に変えてしまった

「ああ、あああああ」

私のせいでこの人達は……………

「逃げて!!早く!!あなた達では敵わないわ!!」

「それは無理です!!我々は、あなたを守るためにここにいます」

「でも!!」

その時、ゴゴゴゴと大きな音を立てて戦艦のハッチが開き中から月の兵士が出てきた

その中には見知った顔があった

「永琳……………」

「姫様……………」

永琳は何か言いたさげな顔でこちらを見る

「永 r 「迎え撃てー！ー！！」「オー！ー！！」「」

月の兵士と地球の兵士がぶつかり合った

しかし、戦力差があまりすぎた

兵士の量では断然こちらが勝っているがそれを大きく上回る兵器の力

地球の兵士たちは、見知らぬ武器に戸惑いつつ戦い、そして次々と倒れていく

庭は、どんどん紅色に染まっていった

「姫様」

「え、永琳!？」

気付くとすぐ近くに永琳が立っていた

「もう止めて永琳!! こんななの、こんななあんまりだわ!!」

「姫様は…… 姫様は、地上に残りたいのですか?」

「え……?」

「もう一度聞きます、姫様は地上に残りたいのですか?」

「ええ、私は、地上に残りたい!! もう月になんて戻りたくない!!」

「…………… 分かりました」

永琳は、静かに頷き　そして弓矢を構え矢を放った

しかし、永琳が矢を放ったのは地上の兵士ではなく月の兵士の方だった

月の兵は頭を貫かれ倒れた

「八意永琳!!我々を裏切ったか!!」

「裏切つてなどないわ

ただ、私は姫様の味方であり続けるだけ!!」

そう言つて月の兵士に向かつて矢を放つ

「姫様!!こちらへ」

永琳に手を引かれて逃げ出そうとする

「逃がすな!!反逆者を撃てえ—————!!」

「なっ!!」

多方向から、レーザー砲が飛んで来る

永琳でもよけきれない

衝撃に耐えようと目をつぶる

が、衝撃はいつまで経つても来ない

目を開けるとそこには

「よう、永琳!!遅れてスマン」

いつか永琳が話していた時のように天童拓也（ヒイロ）がたっていた

少年は無邪気な笑みをこぼしていた

第四十七話 昔の仲間、今の敵

「よう永琳!!遅れてスマン」

「どなた？」

「え?分かんない!?酷くない!?

拓也だよ、天童拓也!!」

「嘘よ、拓也は男よ」

「俺は、男だ!!」

「…… 本当に拓也なの？」

「そうだと言ってるだろ……」

「……」

「何だよせつかくの再開なんだから喜べよ」

拓也は、月明光をもち黒いローブに身を包んで現れた

「まさか、女の子になってたとは……」

「うん?永琳一旦女の子から離れようか」

女の子にしか見えないからしょうがない

「まあ、積もる話はまた後で…… ゆかりん!!」

「ゆかりん言わないで!!」

何も無いところから誰かが出てきた

「ゆかりん、この二人を逃がしてくれ」

「頼みってこれだったのね、まあいいわ師匠の頼みだしね」

「じゃあまた後で」

そのまま、拓也は、敵軍に突っ込んでいった

「さあ、貴方達はこっち」

ゆかりんと拓也に呼ばれていた、妖怪が空間に亀裂を作る

「でも、まだ拓也が」

姫様は心配そうに言うが

「大丈夫よ拓也（師匠）はそう簡単には負けないわ」

妖怪とセリフが合う、この妖怪も拓也の強さを知っているのだろう

「では、お願いします」

「どうぞ」

私達は、亀裂の中へ進んでいった……………

さーて、始めますか

俺がローブを着てきたのは、知り合いにバレないようにするためである
パラメーター
基礎能力アップ (攻) (速) Level 4
アタック スピード

次々と敵を薙ぎ倒していく

「何なんだアイツは!?!」

「何でもいいこつちの味方みたいだからな!!」

あやつに続けえ!!」

よしよし、こつちの兵士の士気も高めれたな

「紙符」ペーパークラフト「紙創造」ソート（劍）！！

！！ この技は

迫っていた劍を避ける

劍は地面を叩き割った

……美紙か

教え子が出てきたよ、てか威力高くなりすぎだろ！！殺す気か！！

「くっ、外したか やりますね

でも、まだまだ、ここからです！！ 行きます！！

おお、中二病治ってる

お父さん嬉しいよ（泣）お父さんじゃないけどね

「紙符」ペーパーガン「紙弾」！！

おっと、流石に数も多くなってるな

「変更」チェンジ（光速）ライトニング

「なっ!?!」

玉を全てよけ、劍を振り下ろす

痛いだろうけど、みね打ちで許して

ガツキーン

急?

「……
遮断ディフエンス・アーマー「防御の装甲」」

はい、二人目来ました、円ちゃんです

「ふん」

「うお、あぶねえ!!」

いきなり手を横に振ってくるな!!絶対当たったら体もげてたわ!!

ギャー

ウオー!ダイジヨウブカ?

ナンダナンダ?

風圧で向こうの方がグチャグチャに…………… うん、もげるですまないな、塵と化し

ちやうなこれ

「はっ!!、たあ!!、てい!!」

危ない!!、危ねえ!!、危ないです!!

おい、教官への配慮がなっていないぞ!!

あ、教官つてわかってないか

「ちよこまかちよこまかとお 要にいい!!」

えっ、ちつよと!! 要まで来るの!?勘弁してくれよ

「なんだ？美紙、円」

来ちゃったよおー！来なくていいのにおー！！

「要にい 気をつけてコイツかなり強い！！」

「私もやられかけました」

そんな時にやられとけよ

「マジかよ…… 三人で協力してやるぞ！！」

「はい！！」

止めて！！本当にやめてくれ！！

「うおー！くっえ！！」

要が突撃してくる

拳からまっすぐ伸びる一直線が綺麗さっぱり消える……

消える？

「うおおおお！！」

なんだよあれ？なに？有効範囲操作可能なの！？

要さんマジパネエス！！

「くっそ、かわされたか…… 美紙！！、円！！」

「はい！！」

「まかせて!! 紙符ペーパーフラット「紙創造グロウアップ(拳)」!!」

二人同時、に殴りかかってくる

くっそ、そろそろ一刀じゃ限界かな

「鈴!!」

言葉に反応し剣が生まれる、そこまでイイ剣じゃ無がしょうがない
迫る拳を剣と刀で防ぐ

「「なっ!!」」

あ、やっべえ コイツら鈴の腕輪知ってる奴らだったわ
でも完全には気付かれてないな……………

よし

「能力模倣模倣対象アビリティコピー コピー「天魔」てんまボソツ」

くらいやがれ!!

空気砲くドツカーン

「うお!!」

「「要(さん)にいい?」」

ちなみに非殺傷なので攻撃力は、皆無である

「くっそお 行くよ!!円!!」

「ええ!!」

要はだいぶ吹き飛んだから帰ってくるのにもう少しかかるだろうな
今のうちに一人でも倒したいな

剣をグロープに変更させて手に金属を纏わせる

「鈴符」「鉄拳制裁」!!

「きやあ!!」

「円!!」

円を吹き飛ばす、まあ防御の装甲^{ディフェンスターマー}発動してるから無傷だろうけど

今のうちに気絶させるか

「霧符」^{ミスト・ラッシュ}「霧の連弾」!!

うええええええ!!

あぶなっ!!

と言うか今の技は………まさか……

「大丈夫ですか皆さん」

「霧栄!!」

来ちゃったよー3人目!!霧栄さん!!

このままだと、4人目も来ちゃうよ

いや、考えるなフラグにしか聞こえてこないぞ、俺
「お待たせー」

「響!!」

..... 来ちやつた

フラグ立つちやつたよ!! あくもおく

「スマン皆!!」

要も帰ってきちやつたし!!

5人は、こっちに向き直り

「気を引き締めて!! 皆行くぞ!!」

「「はい!!」」

ヤバイ、どうしよう.....

第四十八話 逃げるが勝ち

ヤバイヨ、ヤバイヨ

どつかの芸人みたいなセリフが出てしまうぐらいヤバイ
だいたい、5対1なんて不利すぎるだろ!!

要が正面、円が右、美紙が左、響と霧栄が後衛で来る

「せい!!」

美紙は、紙の剣 円は、拳で攻撃をしてくる

剣を避けてから円の腕を掴み放り投げるが

「うおりああ!!」

「グッ!!」

要が正面から突っ込んで来て吹き飛ばされる

そこへ、霧の拳と音の衝撃波の追い打ち

「ハアアアアアア!!」

「ガアッ!!」

屋敷にそのまま激突した

なんなんだよ、コンビネーション良すぎだろ!!

「回復能力アップ……………ん？」

疲れてきたせいか、回復が遅い

マジかよ……………

『大丈夫ですか？私も出ましようか？』

刀の状態の光が提案してくる、仕方無いな

「光!!」

「はい!!」

声に反応して、刀が人型になる

「「「なっ!」」」

そりゃあびつくりするよな、刀が人型になったら

「光、行くぞ!!」

「はい!!」

光が光速で前へ出て刀を振り下ろす

それに反応して5人は、散らばる

「マスター見ててください!!私、月の光が一番強くなれますから」

光は、そう言い刀を掲げる

いつもより強い光を帯び輝き出す

「行きます!!」

光は、光速で動き5人に次々と斬りかかる

いいぞ!!時間稼げるだけ稼いでくれ!!

もう少しで、準備が終わる

「たぁー!!」

「くっ」キン

「なんなんだコイツ!」

「こつちだつて分かんないよ!」

「お喋りしてる暇はありませんよ!!ハアア!!」

光が黄色い斬撃を放つ

「うわあ!!」

「きゃあ!!」

要と円が吹き飛ばされる

「光!!ナイス時間稼ぎ!!」

光がみんなの気を引いている間に準備をしていた

何の準備かって？

その答えは、空にあった

空には、月を覆い隠すほどの大量のナイフが設置されている

「まさか!!ちよ!!マスター私まだここにいるんですけど!!」

「大丈夫!!お前ならかわせる（*ω*）？」

「嬉しくない信頼!!」

「鈴符「^{レイン・ナイフ}降り注ぐ刃」!!」

「ちよつと!!ギヤアア!!」

ふう、これで終わりか.....

「貫通「一点貫通撃」!!」

突如、腹を貫かれる

「ガアハツ... あっ... あ...」

口の中にも血の味が広がる

神力を流し、傷の回復に努める

迂闊だった、まだ倒れずにしかも、攻撃をしてくるとは.....

「流石だな…… 要」ボソツ

かつての親友、一筋縄では行かないようだ

「みんな畳み掛ける!!貫通」「一点貫通撃」!!」

「断符」[遮弾]!!」

「紙符」[紙の連弾]!!」
ペーパーマシンガン

「霧符」[霧の連撃]!!」
ミスト・ラッシュ

「音撃」[爆音波]!!」

五つの攻撃が迫り来る

「ツツ!?マスター!?!」

光は駆け出すが間に合いそうにない

五つの攻撃が衝突するが、攻撃そこで消えてしまった

俺は使ったのである、俺の能力の最強の技、相手の能力、能力による攻撃を完全に消去破壊

する技………
能力破壊アビリティブレイクを

「あの技は……」

ローブが使った技に見覚えがあった

アビリティキャンセル
能力停止かつての仲間天童拓也が使っていた技に似ている

その前に使った技にも見覚えがあった

まさか……いや、それはないか

自分の考えを否定する

アイツは死んだ筈だ

しかし、よくよく見ると腕輪は、鈴の腕輪と同じもの、刀も月明光である

鈴の腕輪に、能力は無いはずだし刀が女の子になるなんて聞いたことがない

やっぱり、ただの勘違いなのだろうか？

「要さん……あれって……」

他の皆も同じように感じたようである

ローブで顔が見えないから、判断しようがない

この際、任務とかどうでも良くなってきた

「皆…ローブを剥ぐこと優先にして攻撃!!」

「輝夜姫は、後回しでいい!!」

「「はい!!」」

待っている、今その化けの皮を剥がしてやる

「大人しくやられろ!! つか顔見せやがれ!!」

あ、これ感づかれたやつや

「と言うか任務は良いのかよ!! 軍総隊長の名がなくぜ!!」

「勝手に泣かせておけ!!」

明らかに、ローブ狙ってきてるな……………

でも、もうそろそろいいかな

「光!!」

「はい!!」

「逃げるぞ!!」

「はい!!…………… ぁ?」

「逃げるぞって言ったんだ!!」

「倒さないんですか?」

「輝夜逃せばそれでオーケーなの

Are you OK?」

「お、オーケー?」

「そうと決まれば……………」

「逃がすか!!」

あぶなっ、ローブ取れかけたじゃん

基礎能力アップパラメーター (光速ライトニング) !!

行くぞ光!!全速力だ!!」

「はい!!…… ってどこへ向かうか知らないんですけど!? あ、置いてかないで!!」
「待って!!…… 行っちゃったか」

く 帰り道く

にしても、みんな強くなってたな…… 死ぬかと思った、うん昔の俺だったら5

回は死んでたな

「マスター待ってください…… ぐうへえ!!」

急に止まらないでください!!」

そう言えば…… 恵いなかったな……

(> ㄩ <)、 ; . . クツシユン

「なんででしょう？忘れられてたきが………」

第四十九話 語らい

「いやー無事でよかった」

俺らは、竹林にいた

「寒いですねー マスター、家作って下さい」

「唐突だな!?…… まあいいけど」

「いいの!?!」

テレテツテツテ テレテツテツテ テレテツテツテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
テツテ テレテツテツテ テツテツテツテテ

天童3分クッキング!!

用意するもの天童拓也…… 以上

3分で家を建てマース

少年建設中……

「出来た!!」

「はやつ!?!」

和風な感じで仕上げました

永琳達は、ここで暮らしてもらえばいいか

「いやー、それにしても久しぶりだな」

「そうね、何年ぶりかしら?」

「3億年ぐらいじゃねえ?」

3億年か……自分で言っていて凄い年だな……

「拓也、ちよつといいかしら？」

「ん？何？輝夜」

「アナタなんであんなに来るの遅かったのかしら？」

「……」

「何でかしら？」

「寝過ごしましたなんて言えない

「ほらローブの用意とか……」「ローブは、昨日用意できてたわよね？」「……はい」

「何でかしら？」

「ヤバイ、黒い影が見える

「ほら、アレだよ アレがアレでアレだったんだよ」

「アレってえ？」

「アレは、アレだよ」

「ヤバイ、ヤバイ」

「ふうーん…………… 光さん」

「はい？」

「拓也、出発前何してた？」

「うおおおおお!!光に聞くのは反則だろ!？」

言うなよ？絶対に言うなよ!!?..... フリじゃないからな!!
伝われく伝われく

お、こつち見た あ、頷いた よかったー 伝わったみたい

「寝てました」

うおおおおい!!

裏切ったよこの子!!うわあ、すつごいいい笑顔

何？伝わってなかったの？伝わった上で無視したの？後者ならタチ悪すぎだろうちの付喪神

「よし、お仕置きしないとね？永琳？」

永琳助けて.....

「はい!!姫様」ニッコ

ジリジリと二人が近づいてくる

「待て!!話せばわかるから!!ちよつと待って!!話し合えば..... うわああああ!!」

「もう嫌だ…… お婿に行けない」

「お嫁じゃないの？」

「俺は、男だつて言ってるだろ!! 永琳!!」

疲れた…… こたつが恋しい

「今後、あなたは どうするの？」

「どうするって？」

「私は、姫様とこの家で暮らしていくけど…… あなたはどうするのかと思って」

「ああ、まだ旅を続けるつもりだ」

「そう…… 気をつけてね」

「おう!!」

「お待たせーって何この空気」

「お、ゆかりん帰ってきたか」

「ゆかりん言わないで!!」

ゆかりんに食べ物を買ってきてもらっていたのである

「よーしっ、鍋パーティー始めるぞ!!」

「「「おー!!」」」

みんなで仲良く食べました……………
闇鍋を……………

「うわあ、ナニコレ!?!」

「下駄!?!」

「なんてもの入れてるのよ!?!」

「俺のせい!?!」

第五十話 神社の名前

「ひさつしぶりに、あの神社行こう」

「あの神社？」

「どこですか？」

「ほら神子の時の……」

「ああ、あの神社」

「??」

ゆかりんは、知らないよな…… そんな時は、会ってないし

「でも、またなんで急に？」

「この前、去った時かなり急だったからさ、一応俺の神社なんだし行つところと思つて」

「いや、何百年前の話ですか!?!その時の人誰も生きてませんよ!?!」

「あのー話についていけないんですが……」

「まあ、気まぐれに行くだけだし」

「あれ?聞こえてませんか? 師匠く光さんく」

「まあ、良いですけど」

「じゃあ、行くか!!」

「はい」

「無視しないで」グツス

とーちやく

いやーひつさしぶりだな、だいぶ村、大きくなつたな……村つてより町?

神社は……あれ?ない!!

前(数百年前)に来た時にあつた場所に神社がなかつた

「ナンデナイノ?」

「見限られて取り壊されたんじゃないんですか」

「そんなあ!!」

まさか、そんな人々だったとは………いや、諦めるのは、まだ早い聞き込み開始

だ!!

「すみませーん」

「?何でしょうか?」

「ここにあつた神社知りませんか?」

「神社ですか?……私が覚えている限りでは無かつたと思いますが」

なん、だと!!

「そうですね、ありがとうございます」

諦めるな俺!!

「神社知らない?」

「知りません」

ズーン

ま、まだだ

「神社「知らんナ」」

まだいつてねえーよ!!

くっそ、どこ行つたんだ?

「あのーちよつといいかのお?」

誰このじいさん?

「神社を探しとるんじやろ?それならちよつど百年前に山の上に移転させたんじや」

山の上?誰も来ないじゃん

まあ、行つてみるか……………

あつたああああ!!

神社あつた!!

まあ、俺は最初から信じてたけどね

「良かったですね」

あー、でもなんでこんな山の頂上に立てたんだ？

「どうしましたか？」

知らない声を聞き振り向くと巫女さんがいた

「いや、なんでこんなところに移転したのかなって、ここの関係者ですか？」

「あ、はい、ここに、博麗神社の巫女です」

「どうも、その神社の神です」

「あ、神様ですか…… あれ?!? 神様!?!」

「そう神様、でなんでこんな山の頂上に？」

「あ、それはですね、昔妖怪が攻めてきた時にこの神社から結界が生まれて、町も大きくなつたし結界の範囲を広げるため高いところに」

よかつたーなんか普通の理由で、邪魔だったからとか言われたら泣いてたよ

「今日泊まっていい？」

「は、はい!!どうぞ」

神社を無事発見できました

よかった.....

第五章 妖怪の山編

第五十一話 天狗の山、再び

俺と、光、紫は修行しながら旅を続けていた

「ゆかりん、だいぶ強くなつたなー もう上級妖怪ぐらい行つたんじゃない?」

「ありがとうございます」

ぶっちゃけ、どので覚えてきたか知らない結界術は、こつちが教えてほしいぐらいである

「そうですね、わたし達も頑張りませんとね……………あれ?ここは……………」

「どうした?…………… あっ!!」

目の前の山に目をやる

そこは、妖怪の山であった

いやーひっさしぶりだな…………… よって行こうかな……………

何でこうなった……………

周りの白狼天狗を見ながらそう思う

「ここは、我々天狗が治める山 貴様たちは去れ!!」

なんかデジャブ

「おい、俺一応関係者だぞ………… そうだ!!文、射命丸文を呼んでくれ」

「文様だとお? 貴様のようなものが知り合いの筈がない!! 去る気がないなら………… 覚悟

!!」

この前もやったから…………… はあ、仕方ない

「光、ゆかりん、行くぞ」

「頑張ってください」

「あ?」

光は、刀になり 紫は、スキマで逃走した

裏切りやがった!! あいつら!!

「覚悟!!」

「クソ野郎!!」

怒りを白狼天狗にぶつけた

「ガッア!!」

勢い良く白狼天狗は、宙を舞う

「なっ!!」「こいつただ者じゃない!？」

これで引いてくれると嬉しいんだが……………

「……………助けに来たぞ!!」……………

いや、何人いるんだよ!!あ、匹か、まあいいけど

「パラメータ基礎能力アップ（攻）（守）（速）Level 2!!」

そそののそいと倒していく

いや、弱すぎだろこいつ等

キーン

ん？

「あなたの好きには、させません!!」

他の白狼天狗より強そうだな……………
実際、今、刀受け止められたし

「警備部隊隊長、犬走椀参る!!」

隊長か、だから他より強いんか……………
「よっ」と

後ろに回り込み手刀、そのまま隊長様は、落下
強いて言っても所詮白狼天狗か……………

「なんですか？これは!？」

白狼天狗たちがなぎ倒されている

「一体誰が……………」

「あれ？文？」

「えっ？って拓也さん!？」

なんでこんな所にとにかく、まさか……………

「拓也さん？白狼天狗たちは……………」

「俺がぶっ飛ばした」

ですよねえー

「何してくれてるんですか!？」

「大丈夫!!殺してないから、気絶してるだけだから」

「そういう問題じゃないです!!」

まあ、拓也さんで良かった気もする…………… あいつ等じゃなくて……………

「天魔様のところに行ってください、私も後から行きますから」

「おう」

拓也さんは、飛びさっていった

さて、この子達どうしましょう……………

第五十二話

あれ？身長縮んだ？

「天魔ー」

「誰だ、いま考え事を…………… おお!!誰かと思えば天童か」

「おっ久ー」

「久しぶりだな」

「いやー久しぶりだな……………ん？」

「天魔、身長縮んだ？」

「グツホオ!!」

「ほんの3cm位だけど……………」

「嘘だよね!!嘘だと言って!!」

「うん、嘘」

「そ、そうだよねー身長が縮むわけ無いじゃん」ハハハ

「ホントは5cm位」

「うあわあああん!!」

天魔をいじるのは、楽しいな

「ムカー!!」

やはり楽しい

「天童、実は頼みがあるんだが……………」
「とあのみたい?」

みたらし団子を頬張りながら聞き返す
「食べきってから答えなよ……………」
「いやー、なんか面倒な匂いがするから」

実は… 「だが断る!!」 まだ言ってもないよ!!」

働きたくないでござる

「………… いち」

「ん?」

「神子の時の貸」

「………… え?」

それ有効期限まだ続いてるの?

何百年前の話だよ!!

「はあー、わかったよ、で?頼みって?」

「実は……………」

天魔が言うには、こうだった

昔この山は、鬼の支配下だったらしいんだけど、独立したらしい

で、今になってまた鬼が来るから守って欲しいということだ……………

うん、やっぱり面倒なことだ

鬼ってアレだろ?角があつて、虎のパンツ履いているマツチョだろ?

嫌だなー

まあ、頼みだし頑張るか……………

頼みは、受けたのはいいけどどんな相手なんだろう？

「どんな人でしようね」

「師匠なら大丈夫でしよう」

「そうだな…………… つてテメエ等さつきは、よくも逃げやがったな!!」

こいつ等ナチュナルに戻ってきやがった

光と紫と話していると

「きゃ!!」「うわあ!!」

誰かとぶつかり倒れる

ムニユ

「むにゅ?」

「ななななにするんですか!!」

上から女の声が聞こえる、じゃあこれは……………

「早く離れて下さい!!」

「グッホオ」

殴り飛ばされる……………痛い……………

「スマン!!……………って警備部隊隊長さんじゃん」

「私には、犬走椀という名前がある!!と言うか貴様は、さっきの……………成敗してくれる!!」

えく面倒くさ、天魔!!部下に情報伝えとけ

「はい、ストップ」

「ひゃあ!!」

犬走椀が体をビクンとさせる

この声は……………

「どうもー、清く正しい射命丸文でーす」
知ってる……………」

「どうやら、文が尻尾を掴んだみたいだ

「文さん!?!いつも尻尾を掴むの止めてくださいって言ってるじゃないですか!?!」

犬走権は、ギャーギャーと喚いてる

「ゴメンゴメン、気をつけますから

それより、その人に喧嘩は、売らない方がいいですよ

私だけでなく、天魔様もかなわなかったんですから」

「な!?!……………」
「分かりました」

犬走権は、コツチを恨めしそうに睨み去っていった……………」

第五十三話 鬼は嘘をつかない

「そう言えば鬼っていつ来るの？」

「今日だ」

「なにい!？」

いや、いきなり過ぎんだよ

今日って、頼み受けたの昨日だよ!?

俺らは、山の麓で鬼を待っていた

「来たぞー!!」

上のほうで飛んでいた天狗が叫ぶ

前を見ると3つの影が見えた

あれ? 3人? てつきり数万人で押よしてくるものかと思つてたけど

真ん中の鬼が叫ぶ

「天魔!! どうする? 明け渡すか? それとも戦うか?」

「戦うさ、ただこっちは助っ人がいるからな」

鬼がコツチを興味深そうに見てくる

嫌だあ、そんなに見つめないでえー

「まあ、いいだろ... さあ、早速始めようかルールは、そっちで決めてくれ」

え? こっちで決めていいの?

「じゃあ、1VS1で 何でもあり降参か気絶で負け、でいいか?」

あれ? なんかわななこと言つたかな?

みんなキョトンとしてる

「ハハツハハツハハツハハツハハツ!! いいねえわかり易くて実にいいよ、お前名前は？」
「天童拓也だ、覚えとけ」

「最初は、私が相手になるよ」

大きな2本の角を持つ鬼が前に出てきた

ちっさいな……天魔とおんなじくらいかな？

「鬼の四天王」「技」の伊吹萃香だよろしく」

「よろしく……じゃあ」

「始めるか!!」
瞬間、衝突した

金属を手に纏わせ距離を詰める

「いつきに、行くぜ基礎能力アップ（攻）（守）（速） Level 4!!」

互いの拳が激突する

いつてえー!!

固ったあ!! やべえ強すぎ

拳じゃ勝てないな……………

金属のグローブをしまい、月明光を取り出す

「変更（光速）!!」

伊吹萃香の後ろに回り込む

「速い!!」

「もらったあ!!」

月明光を縦に振り下ろす……………が、伊吹萃香は、消えた

「……………は？」

あれ？今消えた？何、瞬間移動？

「危なかつたな」

「何だよその能力」

「そうだな、私との勝負に勝ったら教えてやるよ」

「本当だな？」

「ああ、鬼は嘘をつかない

嘘が大嫌いだからな」

「よーしっ、いくぞ!!」

月明光で斬りかかるが、やはりまた消える

「くっそ!!どこだ!？」

「こつちだよ」

「そつちか……………え？」

向いた方に伊吹萃香はいた、いたのはいいのだが、その大きさが問題だ
先程までの、数百倍ぐらいの巨人になっていたのである

デカすぎたろ

「潰れな」

巨大な拳が近づいてくる

「鈴符メタルノールド「鋼鉄の壁」

鉄の壁を作るが、ベコと音を立ててあっけなく潰れる

「くっ」

壁後ろから転がり、避難する

なんなんだよ、消えたりデカくなったり!!

くっそ、目には目を、歯には歯を、鬼には鬼だ!!

「能力模倣模倣対象アビリティコピー「重」!! オラツ!!」

「なっ?!」

重力を操り押しつぶそうとする

「ぐぬぬぬぬぬ!!」

100Gかけてんのに何で倒れないんだよ!!!どんな力だ

「今のうちに 重力グラビティショット「重力拳」

「チィ」

また消えようとする

「させるか!! 鈴符 [金属箱] メタルボックス!!」

金属で閉じ込める

「潰れろ!!」

金属の箱は、少しづつ小さくなる

その瞬間、巨大化して萃香は、箱から脱出した

これで、あれが瞬間移動でわなことが分かった

萃香は、小さくなり接近してくる

攻撃力は、質量と速度!!

「うおおおおお」

月明光に、重力の負荷をかけて振るう

空間が歪み、萃香は吹き飛ばされた

「うわあ!!」

その瞬間を逃さず接近し、月明光を首元に当てる

「…… 参った、降参だよ」

歓声が上がった

こうして、1人目の鬼を倒した

あと2人

第五十四話 破壊の力

「いやー、強いねえ また手合わせ願いたいね」

俺は、正直結構です

「約束通り能力を教えるよ」

あ、忘れてたわ

「密と疎を操る程度の能力」だよ、まあ聞いたところでなんにもないだろ？

次も頑張りなよ」

「よし、次は、アタシだ鬼の四天王「力」星熊勇儀だ

よろしく」

声のする方を見ると、さっきの萃香とは違い一本角の鬼が目の前に立っていた

「まあ、死なないように頑張りな」

死なないようにってなに!? どんだけ強いのか!?

「よーし、やるぞ!!」

襟引つ張らないで!! 大丈夫だから逃げないから引つ張らないで

「いくぞー」

2回戦目なのに、疲れがヤバイ

萃香みたいな分かりにくい能力だとやだなー

お互いに構える

先に動いたのは勇儀の方だった

ドツゴツと大きな音を立てて飛び出してくる

踏み込みの力で地面にクレーターが出来る、そして一瞬にして目の前まで来た

「なっ!？」

とつさに、腕をクロスして攻撃を防ぐが

「ヴァア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア!!」

メシメシメシと腕が音を立て吹き飛ばされる

「ガア、ア、ア」

「どうした? もうダウンか」

なんなんだあの力

「もう一発行くよ」

「くっそ、アビリティコピー能力模倣模倣対象ド「円」!!

遮断ディフェンスブレイク「防衛の装甲」!!

ギイン

「!!」

何ちゆう、馬鹿力だ!!

「急に硬くなったね、いいねえガンガン行くよ」

「くっそ、断符「遮弾」!!」

「ふん!!」

「なっ!!」

見えない弾幕を放つが全て弾かれてしまう

勇儀となるべく距離を取る

勇儀は、その場で構えだし、そしてつぶやいた

「四天王奥義「三步必殺」」

ヤバイ、あれはヤバイと本能がそう伝える

メシと音を立てて地面にクレーターを作る

「一步」

ヤバイ、逃げなければ

「二歩！」

数十メートルあつた距離が一気に縮まってくる

「三步!!」

あつという間に目の前まで来ていた、そして拳が腹に突き刺さり、腹に大穴が開く
口の中に鉄の味が広がり、それを吐き出す

地面に、真つ赤な血が広がる

「がつ!!あああああ!!」

くっそ、力が入らない……………

「天童!!」

「拓也さん!!」

天魔や文の声が聞こえる

くっそ、情けねえぞ俺!!

根性だせ!!

「もう終わりか？」

「ま、まだだ!!まだ終わってない!!」

腹を押えながら、ゆっくりと立ち上がる
「へえ、やるじゃん」

これは使いたくなかったか…:

パラメータ
基礎能力アップ(破壊)

体全体から、赤黒いオーラが滲み出る

「この一撃で決める!!」

「来な!!」

「うおおおおおおお!!」

拳がぶつかり合う

メシメシメシと、腕か音を立てる

「グツヌヌヌ!!」

痛みを必死に堪えて突き出す

「はあああああ!!」

勇儀の突きを押し返し吹き飛ばす

勇儀は、バウンドしながら吹き飛ばされる

そして、倒れたまま言った

「ハハハハハハハ、ダメだ体が動かない

あんたの勝ちだよ」

二人目を倒した

俺は、残りの一人を見たが、目の前がブレ意識が飛んだ

第五十五話

暴走再び、そして決着

「う、うゝん」

「あ!!目が覚めた!!」

「大丈夫ですか?」

俺は、確か勇儀に勝ってその後……………はっ!!

「俺、どのぐらい気失っていた?」

「ほんの数分ですよ」

「そっか……よかった……………よし」

立とうとするが体が思うように動かず、痛みが走る

見ると、腹の穴は氣を失っている時に無意識に直したのか塞がっていたが、体の至る所が骨折している

肋骨が2、3本 左腕 右足もか……………

フラフラと立ち上がり、最後の鬼に向かおうとする

「もう、止めてください!!貴方は充分戦いました!!」

文が目の前に立つ……でも

「いやだ」

「なぜ!？」

「俺が引いたら、お前らが鬼に怯えて暮らす事になるんだろ？それは俺的にも面白くない、だからこれは俺のわがままだ」

「でも……」

なにか言いたげな文の横を通り過ぎる

こころでも言っただけ、引いてくれるだろう

「……待たせたな」

「本当だよ、こつちはお前と戦えるのを楽しみにしてたんだ、そう簡単に終わってくれなよ?」

「残念ながら終わらせるつもりだ、俺の体が持ちそうにないからな」

「鬼神焰だ、楽しましてくれよ」

「チィ!!」

「どうした? そんなもんか?」

「うるせえ!!」

月明光を振り下ろすがかわされる

「オラっ!!」

「グツ、クツソオ!!」

拳を刀で受け止める

足が折れているせいで踏ん張りが効かない

鬼神が、突っ込んでくる

それに向かって、突きを放つが横にそらされ手首を掴まれる、その瞬間

「ぐあがががががが!!」

脳が体が全身が揺さぶられる感覚が襲う

「ガハア」

血を吐き出す

意識が飛びそうになるのを必死にこらえる

「そんなもんか?じゃあ、次はあいつらに付き合ってもらおうかな」

ギロつと、天魔や文達の方を見る

あいつらじゃ絶対に勝てない

ふと、脳裏に血まみれになった天狗たちが浮かぶ

嫌だ

もう誰かを失うのは

——力が欲しいか?——

聞いたことある声が聞こえ、意識が飛んだ

「オイオイオイ、マジかよ」

天童拓也の方を見ながらそう言う

さつきまで瀕死だった筈だが、今日の前に立っている

さつきと違うな、この力……………妖力だ

だが、コイツはさつきまで神力を使っていたはず、妖力が使える筈がない

「ガウ!!」

「!!」

黒い刃がとんでくるのを横に回避するが天童拓也？の拳を喰らってしまう
「チィ!!」

振動を操り、ダメージを逃がし最小限にとどめる

『振動を操る程度の能力』それが私の能力だ

「振動」「内部破損」!!」

相手の内部の水分を振動させ内部から破壊する

「グガギィ!?!」

よし、効いている

「ガッア!!」

「なにいい!!」

黒に腕が地面から伸び体中を縛りつけて来た

「くっこそ、離れろ!!」

「ガッア!!」

「しまった!!」

黒に腕に気を取られて拳をモロに喰らう

「ガッ、ハアハア」

なんなんだあの力は……………

「何なんですかあれは……………」

目の前の光景に言葉を失っていた

拓也さんがなぜ妖力を？

「……………文」

天魔様を気付いたようでこちらを向いてくる

ほかの天狗たちは、気づいていないようで、いいぞーなどと歓声をあげている

「おい、その妖怪何か知っているか？」

拓也さんと一緒にいたスキマの妖怪に天魔様が質問する

「いいえ、私もあんな師匠見たことありません」

「そうか……………」

話していると突如、横に何かが飛んできた

「いったいなんなん… 焔!？」

「いてててて、一体なんなんだあいつは」

飛ばされてきたのは拓也さんと戦っていた鬼神焔だった

前を見ると、黒い刃が目の前までに迫っていた

「みなさん避けてください!!」

「!!」

各々で黒い刃を避ける

「アイツ、敵も味方もお構いなしかよ!!」

「しっかりして下さい、拓也さん!!」

「…」

声かけにも全く反応しない

「皆さん!!大丈夫ですか？」

光さんも刀から、人型になり近付いて来る

「はい、しかし拓也さんが……………」

「あんなマスター私も見るのは、初めてです」

付き合いの長い光さんでも知らない力…………… 一体あれは何なのか

「おい!!文!!」

「え?きやあ!」

考え事をしているうちに、黒い刃近くまで来ており弾き飛ばされる

「ぐう………… は!!しまった!!」

黒い刃が私をめがけて飛んでくる

「「文(さん)!!」」

黒い刃までの距離が3cm、2cmと近づいてくる

しかし、触れるか触れないかのところで刃は、停止する

「ガア!?!グウ!?!」

急に苦しむようにもがき始めた

「ガア!?!………… テメエは………… グウ!?!………… 引つ込んでろ!!」

その瞬間全体に広がっていた黒い刃が跡形もなく消えた

「ハアハアハアハア、悪かったなみんな」

いつもの拓也さんが戻ってきた

「悪い、またしたな焔…………… 決着を付けようぜ」

「それは、ありがたいな、私も、もうぼろぼろだ」

二人は構えた、能力を使わないただの殴り合いだった
数十分もしないうちに二人同時に地面に倒れた

戦いは、幕を閉じた

第五十六話 妖刀村正

鬼との戦いから一週間後……………

怪我也だいたい治っていた

「はあ？俺が妖力を使っていたあ!？」

「はいマスター、間違いないと思います」

「どういう事？百歩いや、千歩譲って霊力ならまだしも妖力!?妖力ってアレだよな妖怪の力の源だよな

それが俺の中に？」

しかし、あの感覚どこかで……………

「うゝん」

「いや、意識を失う瞬間なんか聞いたことあるような声が聞こえたんだけど……………」

「どのような？」

「『力が欲しいか?』って言うものだった、それ以外はなんとも……………」

「一体あれは、何なのか……………」

「おお、天童 起きたか!!」

「あ、天魔……げっ!!」

「そんな顔しなくてもいいだろ?」

俺は顔をしかめた

天魔と一緒に焰もついて来たからである

「そうだ、天童 お前神になる前、種族はなんだった?」

「そりゃあ、人間だろ?」

「本当か?」

「嘘をつくも何も、俺は俺を人間と思って過ごしてきたけど……なんで?」

「いや、貴様が半人半妖の可能性を考えてな」

成程、半人半妖か……あれ? そう言えばあの神に

『種族とか決めらるけどどうする?』

『テキトウにそつちで決めといて』

「……あ」

「ん? どうした?」

「天魔そうかもしれない……」

「アムンツム」

「アムンツム」

「「「「.....」」」」」

うおおおおお!!

あの駄神なんていう種族設定してくれたんだ!!

なんか気まずい雰囲気になっちゃうし

天魔達は、なんか方法考えてくるて出て行っちゃったし

どうしよう、どうしよう

ドン!!

「!!」

突如、ドアがひらかれる

「一体なんだ？天魔」

「… ったぞ」

「え？」

「見つけたぞ、方法」

只今、天魔に連れられて妖怪の山の頂上から少しくだった場所にある、倉に来ていた
こんな所あつたんだ……………

「天魔、何だここは？」

「ここには、ある物が置いてあるんだよ」

「ある物？」

「妖刀村正」

「村正!」

だいたいの方が聞いたことがある刀の名だ

「でも、なんで村正を？」

「村正には妖力を引き出す力がある、それでそれを抑えることができれば……………」

「使いこなす事も出来るかもって事か」

確かに、挑戦しがいがある

だが

「抑えている間絶対暴走するぞ？」

「我々で食い止めておくから大丈夫だ、それに」

「「わたし達もいるしな」」

焰、勇儀、萃香が前に出る

「ありがとう……… こんなのあるならすぐ言ってくれば良かったのに」
「忘れてた」

おい!! かなり有名な代物だぞ、忘れるなよ!!

「じゃあ、皆頼んだぞ」

「……………おう(はい)!!……………」

俺は、村正を抜刀した

その瞬間、意識は暗闇の中へ……………

第五十七話 心の中

「……は、どこだ？」

真つ暗な空間に俺は、いた

多分俺の精神の中の場所なんだろうけど

本当、何も無いな………あれ？

向こうの方に誰がいる？

確かに人らしき影が見える

近付いてみると女の子だった

真つ黒な腰の辺りまである髪、頭からはえる二つの耳、腰から生えている尻尾、血のように真つ赤な瞳の少女だった

「大丈夫？」

「……」

声をかけるが反応がない

「おーい、大丈夫ツツ!？」

もう一度声をかけ、少女の肩に手をのせた瞬間、無数の黒い刃が襲ってくる

すぐさま、後ろに飛び退き回避をする

「これは、光たちが言つてた黒い刃……お前が、妖怪か」

少女は、何も言わずにゆらりと立ち上がりこちらを向き、そしてまた黒い刃が襲いかかつてくる

月明光を抜こうと腰に手を当てて、刀がないことに気づく

「あ、やべ!!」

刃は、待つてくれずそのまま飛んでくる

「くっせ!!」

転がるようにして、回避をする

ここは、俺の中だ考えろ、想像しろ

すると、月明光が生成される

「よし」

刀を抜き、飛びかかる

「悪いが、倒させてもらうぜ!!」

刀を振り下ろすが、少女は手に黒い刃を纏わせ禍々しい腕へと変え防ぐ

「なっ!!」

少女は、その華奢な体つきからは想像もできないような力で押し返してくる

「くっそ!!なんちゆう馬鹿力だ」

少女は、ゆらりと動いたと思つた瞬間、とてつもないスピードで、近づいてくる

「!!」

ギリギリのところ、刀を盾にし拳を防ぐ

数十メートル吹き飛ばされる

息付く間もなく黒い刃が襲ってくる

「くっそ!!」

数発受けきれず、体に掠る

——寂しいよ——

「!!」

どこからか声が聞こえた気がした

どこから？

黒い刃を受け流しながら考える

また、黒い刃が体に掠る

怖いよ

一人は嫌だよ

「!!」

また聞こえたあの声、黒い刃が体に掠るたびに、助けを求める声が聞こえる

これは………あの子の声？

攻撃を受けるたび受けるたび、負の感情が体の中に流れ込んでくる

辛い

悲しい

どうして？

騙したの？

この子は、本当に悪い子なんだろうか？

そんな疑問が頭に浮かぶ

誰かと一緒にいたかった

誰かに裏切られた

そんな悲しみから逃げるために、暴れているのか

彼女の過去を知らない俺には何もわからない

ふと、少女のほうを見ると、黒い刃が腕に纏い突っ込んできていた

そして、その腕は俺を貫いた

その瞬間、頭の中に映像が流れ込んできた……………

第五十八話

昔の話

むか〜し、むか〜しある所に一人の女の子がいました

女の子は妖怪でした

女の子はとても寂しがりで、なのでよく人里へ降りていつていました

しかし、女の子に近寄ってくれる人は誰もいませんでした

当然です、女の子は妖怪、人里の人々が恐れるのも無理はありませんでした

人里では、女の子に近づかないように掟が定められました

ある時、一人の男の子が掟を破って女の子と仲良くしてくれました

女の子は、掟があることなんて知りませんでした

寂しかった女の子は、とても嬉しかったです

初めてできた、友達だから

男の子は色んなことを話してくれた

他の友達のことや、美味しい食べ物のこと、寺小屋で習った勉強や歌のこと、女の子

はとても嬉しかった、そして女の子はその男の子に恋をした

ある日のこと、いつもどおり約束の場所で女の子は、男の子を待っていた

しかし、いつまで経っても男の子は現れなかった

女の子は、男の子を心配して人里へこっそり降りた

茂みの中から人里の様子を伺うと、人が集まっていた

その中心には、男の子がいた

女の子は、男の子の姿を見て安心した

しかし、それは一瞬で絶望へと変わった

男の子が殺されたからである

男の子は掟を破った事で殺されてしまったのです

女の子は、怒りました

その人里の人々を次から次へと殺していきました

愛す人を殺されて怒ってくる人もいました

怒りたいのは、女の子の方でした

愛す人を殺されて悲しむ人もいました

悲しいのは、女の子も一緒でした

その人里には、生きている人は居なくなりました

里の真ん中で、女の子は男の子を抱きしめて泣きました

そのあと女の子は、男の子のお墓お作りしました

二人でよく遊んだ、小高い丘に作りました

何年か経ちました

女の子は、人ではなく妖怪に寄り添おうと考えました

しかし、ほかの妖怪は会った瞬間女の子を喰らおうと襲ってくる物ばかりでした

ある時、妖怪に襲われ怪我をおって動けないでいた時がありました

その時、人間の女の子が助けとくれました

妖怪の女の子は、嬉しかったと同時に怖かったまた自分のせいで誰かが死んでしまうのは

人間の女の子は、妖怪よ女の子に寄り添ってくれた

妖怪の女の子は、人間の女の子を突き放そうとした

妖怪の女の子は、突き放す理由を伝えた、すると人間の女の子は、ずっとそばにいますと言ってくれた

妖怪の女の子は、嬉しかった

ただ、それだけだった

ある日のこと、人間の女の子に連れられて妖怪の女の子は、景色がいいと言う崖に連

れられていた

妖怪の女の子が崖の下を見ていると、誰かに突き落とされた

人間の女の子だった

その後ろには、大人の人間がたくさんいた

妖怪の女の子は、ハメられたのだった

妖怪の女の子には、人間の女の子の顔がひどく恐ろしく歪んだ笑顔に見えた
どうして？妖怪の女の子はただそう思い続けた

そして妖怪の女の子は死んでしまった

第五十九話

御影闇

今のは………

突如、頭の中に流れてきた、映像に俺は戸惑っていた
今の女の子はこの子？

目の前の妖怪の女の子に目を向ける

その顔は、とても寂しそうで、とても苦しそうだつた

この子は、本当に悪い子なんだろうか？

助けを求めているのでわないだろうか？

俺は、どうするべきか？

俺は、どうしたいのか？

そして俺は、刀を捨てその女の子を抱きしめた

「グオ!？」

その女の子も驚いたような声を出す

「大丈夫、大丈夫だから」

寂しかったんだな、苦しかったんだな、怖かったんだな

大丈夫だから、俺がそばにいるから、俺はいなくなったりしないから、そんな悲しそうな顔するなよ……」

語りかけるように、一言一言噛み締めるように言った

「ガア………」

女の子が泣いていた

「タスケテ？」

「ああ、俺がお前を救ってやる、お前を絶望のドン底から引き上げてやるよ」

「アリガトウ」

瞬間、黒い空間に光が差し白い空間へと姿を変えた

「ねえ、起きてー」

ん？ 誰か呼んでる？

「あ!! やつと、起きた」

あれ？ この子はさっきの子？

でも、小さくなってる？

「君は、さっきの子だよね？」

「そうだよ、私は御影闇みかげやみだよ!! 拓也おにいーちゃん♪」

「おにいちゃん……………」

さっきからは想像ができないような笑顔だった

縮んだ身長、ブカブカの黒い着物をきた少女、いや、幼女？

「なあ、御影「闇でいいよ」…… 御「闇」…… m「闇!!」…… 闇

「なあに？」

この子意外と傲慢

「闇は俺のどんな存在なんだ？ やつぱり半身みたいな感じか？」

「違うよ、私はおにいちゃんの一部だよ」

「半身とは何が違うんだ？」

「私は、おにいちゃんて、くくりの中の一部分だけで、そんなに存在は、大きくないのだから、おにいちゃんは普通に昔は人間だったんだよ」

「そうなんだ？」

あんまりわからん

「むーわかつてないな…… まあ、いいか

時間がないから必要なことだけ教えておくね

私の能力は『影を操る程度の能力』だよ」

「影？」

「そう、影の形状を変化させたり色々できるよ」

「へく…… ん？ 闇、体が透けてきてるぞ!？」

「そろそろ時間だね、意識が戻ろうとしてるんだよ」

「闇が消えるわけじゃないんだな…… よかった」

「私は、いつでもおにいちゃんの中にいるからね

また会おうね、バイバイおにいちゃん」

目の前が真っ暗になった

あれ？ 目が開ける

「マスター!!」

「光?」

「やっと戻ってきたか」

「天魔!!」

「そうか俺戻ってきたんだな……………」

「「「「おかえり」」」」

「ただいま」

第六十話 ゲーム

「暇だなー」

「そうですねー」

「暇すぎて、目玉焼きになりそう」

「どういう原理ですか？それ」

にしてもほんと暇だな……………

よし、みんな誘って遊ぶか!!

「「「ゲーム?」」」」

とりま、焰、勇儀、萃香、文、天魔、棍を誘って来たぜ!!

「喧嘩か?」

「喧嘩じゃないです……」

「なんだ……なら、私らはパスで」

鬼3人組は、帰ろうとする

「しょうがないな…… 神の酒もあつたのに……」

「よっしゃー!! 殺つてやろうじゃないか」

「酒!! 酒!! 酒!! 酒!! 酒!!」

よし、これで鬼たちはOKだな

「ふん、ものに釣られるなんて子供だな」

私は、大人だから別にいいけど」

「負けるのが怖いんだろ? 天魔」

「そ、そ、そ、そ、そんなことあるわけ無いだろ!？」

「あ、お菓子もあるぞ」

「もう何も怖くない」

「天魔様!？」

「それ、フラグです!？」

よし、これで天狗組たちもOKだな

「王様ゲーム」

「最初は、王様ゲームだ!!」

「王様ゲームとは（以下略）だ」

「なるほど（以下略）か」

「じゃあ、始めるか…… みんな選んだ？せーの」

「「「「王様だくれだ」」」」」

俺は、一番か

「お、私か」

まずは、焰か…… どんな、命令するんだ

「よし、5番 私と喧嘩しろ」

おい、喧嘩ってなんだ!?

誰だ、相手は

「……」ガタガタガタガタガタ

あ、杖だ

めっちゃ、震えてる

「お、お前か？いくぞ」

「いくやくだく!!」

くババ抜きく

「こつちか……」

「……」プルプル（泣き目）

「……」こつちか」

「……」パー（笑顔）

分かり易い……

「……」天魔」

「な、な、な、な、な、な、な、な、なんだあ!？」

「もうちよつと、落ち着こ

顔でバレバレ」

「え!?!本当に」

「おう、頑張れ

じゃあ、こつち」

「いやああああ!!」

「人生ゲーム」

「いち、にい、さん、し、ご、ろく

えつと、落とし穴にハマってる一回休み……」

「食中毒に当たって、一回休み」

「一回休み」

「一回休み」

「一回休み」

「一回休み」「一回休み」「一回休み」

一回休み多いな

「俺か、えつと……トラックに引かれて一回転生……ん？」

一回転生？一回休みじゃなくて？

その後

「仲間を失い、一回覚醒？」

「爆発に巻き込まれて、一回死亡？」

「死んだよ!？」と言うか……………これ?なんか、俺の人生模してない?

「拓也く酒はもうないのか?」

「酒!!酒!!酒!!酒!!酒!!酒!!」

「天魔様!!柁!!……………息をしていない!？」

「マスター!?!どうしましょう?」

「ほっとけ」

こうして、日が暮れるまで騒ぎました

あれ?ゆかりんいなかったな……………

第六章 西行妖編

第六十一話 紫の頼み

「暇だなー」

「暇ですねー」

「空間裂けて美少女が現れないかなー」

「呼ばれて飛び出て

美少女、紫ちゃんです!!」

「.....」

「あれ？反応薄くない？」

「光、今日の晩飯何？」

「鳥の唐揚げにでもしましょうか」

「ちよ、無視しないで!!無かった事にしないでえ!!」

「おお、ゆかりん久しぶり」

「むゝ」

「拗ねるなよ、後そうやっても可愛くないぞ」

「失礼ね!？」

久しぶりにゆかりんをいじるわく楽しいな

「で、どうしたんだ？」

急に帰ってきて」

「師匠に、私の親友と会って欲しくて」

「何っ？紫に親友だと!？」

「何か失礼な反応ですね」

だって、ゆかりんだぞ 友達もろくにできなかつたゆかりんだぞ

「まあ、別にいいけど……なん「じゃあ、出発」」

理由を聞こうとした瞬間、足もとにスキマが展開されて、落下する

「うお!?!」

放り出されたのは、長〜い階段のまえだった

ゆかりんの姿はない

この階段上がってこいつてことか?

階段の周りには見事な桜が植えられている

綺麗だな〜

つて、さっさと行くか

「うおおおおおおお!!」

しばらく階段を全力で上がっていくと人影が見えた

ゆかりんかな?

「お〜い、ゆかりん… つつ!?!」

声をかけた瞬間、頬を何かが掠めた

「ほお、今のを躲すとは……」

向こうに見えた人影の主は、一瞬にしてこちらまで来ていた

人影の正体はゆかり人ではなく、緑色の着物をまとった二本の刀を持つ老人だった

「これより先、通すことが出来ません

お引き取り下さい」

「いやいや、こつちは用があるんだ

通してもらうぜ」

「ならば、力づくで止めるまで!!」

老人が長さの違う二つの日本刀を抜き斬りかかってくる

それを月明光で受け止めるが、老人の力が予想以上に強く吹き飛ばされ桜の幹に背中をぶつける

それに追い討ちをかけるように、一気に距離を縮めてき連撃を繰り出してくる

刀一本では対応しきれず少しずつ攻撃が掠る

「くっそ、手数が足りないな……なら……」

地面に向かって斬撃を放ち、一旦距離を取る

「増やすまでだ」

自分の影に手をつ突っ込み影の中から村正を引き抜く

焰達で試したあの技使うか

「くらえ!!新技

影光「陰陽斬」!!」

月明光が光り輝き、逆に村正は黒く濁った

光と影、対になる二つを掛け合わせた斬撃が老人を襲う

「うむ」

しかし、老人は体を少しそらすだけで躲す

「なっ!?マジかよ」

「次は、こちらから行きます

人鬼「未来永劫斬」

巨体な斬撃が発生し、地面をえぐりながら飛んでくる

アレは、食らったらマズいな……

「^{パラメータ}基礎能力アップ(速)^{スピード}Level5」

速度を上げ躲し、老人の後ろを取る

もらった!!"と思いい刀を振り下ろすが

「甘い!!」

器用に、刀の側面で流されそのままカウンターの蹴りをもらう

やっべえ、この爺さん半端なく強いな

「だけど、負けねえけどな」

村正を地面に刺しそのまま影を操り老人が中心になるように囲む

「影符「影囲い」」

影が刃のようになり、前後左右から囲むように老人を襲う

老人は、これも読んでいたかのように上へ飛び回避するが

「待ってました!!」

「なっ!?!」

俺は、ジャンプした先に先回りした

空中ならよけられまい

「光速」「いっしこうだん矢光断」

居合い切りのように刀を鞘から引き抜き、出せる最大速度で斬りつける

「ぬうう!!」

今度は、さっきのように受け流すことができず老人は、吹き飛ばされる

そして俺は、老人の首に刀を当てた

その時

「そこまでよ」

と、聞いたことがある声が聞こえた
見ると、そこには紫と黒髪の女性がいた

第六十二話 幽々子と西行妖

「そこまでよ」

「おい、ゆかりん」

よくノコノコ俺の前へ出てこれたなあ？」

「えっ?! その、ごめんなさい」

まあ、そこまで怒ってないけど……………

ん? 隣にいるのは誰だ?

「紹介するわ、私の親友の西行寺幽々子よ」

「よろしく」

なんかふわふわした感じの人だな

「妖忌もお疲れく下がっていいわよ」

「はっ、幽々子様」

この爺さん妖忌って名前なんだ

「魂魄妖忌と申します」

「おう!! 俺は、天童拓也だ」

にしてもホントに強いなアンタ」

「お褒めにいただき光栄です」

「妖忌って妖怪なのか？」

「妖忌はねえ半人半霊なのよ」

えっ!?!半人半霊なの？

てつきり、妖怪が混ざってると思ってたんだけど

「なあ、妖忌って用心棒か何か？」

「いいえ妖忌は、うちの庭師なのよ」

庭師!?!

庭師ってあんなに強いものだけ？

完全に剣の腕前は俺の数倍ぐらいだぞ!?!

「立ち話もなんですし私の家へいらして頂戴」

「じゃあ、お邪魔します」

ほえ〜デカイ屋敷だな〜

「お茶をお持ちしました」

「お、ありがとうございます」

妖忌がお茶を持ってきてくれた

うむ、旨いな

「茶菓子もどうぞ」

用意がいいな

「ん？」

白玉楼の外の方に、とてつもなくデカイ桜の木がある
何年ものだ？ 斬ってみれば年輪でわかるかな？

「斬つちやダメですよ」

心を読まないでください

「凄い木でしょう私が生まれた時からあるの〜」

「へー……… あれ?」

話を聞きながら茶菓子を食べようとしたが、いつの間にか消えていた
あれ? 結構あつたよな?

「ゆかりん、茶菓子は?」

「幽々子が全部食べちゃたわ」

うそお?! 結構な量あつたよ?! それをペロツと

ゆかりんは、当たり前でしょみたいなふうに言わないで

「妖忌く茶菓子追加してえ」

「はい、只今」

しかもまだ食べるのかよ!?

幽々子は、茶菓子を取りに奥へ行ってしまった

「で紫、俺を呼んだ理由は?」

「さすが師匠、理解が進んでいて助かるわ

幽々子のことで頼みたいの

幽々子は、能力を持っていて能力名は、『死を誘う程度の能力』だったの

「だった?」

「ええ、最近変化して『死を操る程度の能力』になったの」

死をねえ、また物騒な能力だな

「急に変化した理由はあるのか？」

「師匠も、見たでしょあの外にある大きな桜を」

「ああ、でもあの桜がどうしたんだ？」

「あの桜は西行妖と言う名前で妖怪の一緒よ」

「え？あれ妖怪なの？」

全然気づかんかった……………

「幽々子は、力を恐れて一度死のうとしたわ

まあ、私が止めたけど」

「マジかよ」

「ただ気がかりなのは、西行妖が幽々子を取り込んでパワーアップしおうとしてるのよ」

「それを守るのを手伝って欲しいってわけか……………よし、いいぞ」

「本当ですか」

「ああ、可愛い弟子のためだしな」

「か、可愛いって……………ボソッ

「ん？なんか言ったか？」

「いいえ、なんでも」

「そっか？なんか、顔赤いぞ

無理だけは、するなよ」

「は、はい」

「お待たせ〜」

話を終えたところでちょうど幽々子が帰ってきた

さくて、これから忙しくなるぞ

第六十三話 恐れていた事態

「妖忌」

「はい天童殿、なんででしょうか？」

「剣術を教えてください!!」

「はい？」

妖忌に剣術を習うことにした

元々、剣の事なんて分かってなかったし、ただでさえ難しいのに二刀流になったらさらに難しくなった

今のうちに習って置こうと思って、この際苦手をどんどん潰していこうと思う

少年稽古中……

「ふう〜疲れた〜」

ありがとう妖忌

「いえいえ」

妖忌との剣の稽古を終えた

やっぱり強いな、能力ないと一撃も当てられないな

まあ、剣じゃないから死ぬことはないけど……………

なんか悔しいな……………

「またお願いするよ」

「いつでもどうぞ」

「ゆかりん」

「わっ!?! 師匠どうしたんですか?」

「結界術を教えて」

「え？」

今まで攻撃ばつかで、封印とか防御とかあんまり考えてこなかったけどこの際だから覚えちゃおう

少年修行中……

「だあく!!」

難しいっ!? ナニコレマジで難しいんだけど!?

ゆかり人なんて平然と何枚も結界出せるの? 俺、一枚キープするのがやつとなんだけど……

結界術ってこんなに難しいものなんだ

なんか頭がパンクしそうだな、剣の稽古の倍ぐらい疲れる

「ほう、なら剣の稽古を倍にしますか」

「妖忌さん、勘弁して下さい」

いつの間にか妖忌が近くまで来ていた、てかみんな心読み過ぎ

「読みやすいというか、顔に出てるわよ」

行ってるそばから………

「みんなくお茶にしましょう」

「はーい」「はっ」

幽々子の一声で、ティータイムになった

「はあああああ」

「ぬう」

あれからかれこれ二週間がたった

「やるようになりましたな」

「妖忌のおかげだよ」

剣の腕は、ちやくちやくと上がっていつて今では妖忌と互角ぐらいの腕になった

しかし

「ぐぬぬぬぬぬぬ」

「上手くならないわね」

結果は、一、二枚しか貼れないし、封印は自分を犠牲にしかねないものしか習得できない
はつきり言つて才能がないかもしれない……………

残念だ

「大丈夫よく人には向き不向きがあるものゝ修行はやめてお茶にしましよ」

「ありがとゝ幽々子」

楽しい日々だった

これが続くことに何の疑いもなかった
しかし、それは一瞬で崩れ去った

ある日の朝目が覚めた

枕元にある時計を見ると七時半を指していた

おかしい……………

妖忌が朝食の準備ができたと呼びに来るはず時間をこえている

妖忌が寝坊したか？

ありえないとは言いい切れないが、あの妖忌のことだから確率は低いだろう

俺は、布団から這い出て襖を開け外に出る

冷たい風が流れ込む

白玉楼は、嫌な静けさに包まれていた

何か嫌な予感がする……………

俺は、走って紫の部屋へ行った

「紫」

紫の姿は、そこにはなかった

「妖忌!!」「幽々子!!」

妖忌も、幽々子も姿が見あたらない
まさか……………

俺は、出せるスピードを出して向かった
西行妖の方へ

西行妖の近くまで来ると見知った二人がいた

紫と妖忌だ

二人とも傷を負っているが命に別状は無いようだ

しかし、幽々子の姿が見あたらない

「拓也?」

「紫?! しっかりしろ幽々子は?」

「西行妖の方へ……………」

「くっそお!!」

恐れていた最悪の事態が起こった

二人を抱え回復をしながら西行妖まで飛んだ

西行妖の根元には幽々子がいた

しかし、その胸元には穴が空いており、そこから血が流れ出ていた

「幽々子おおおおお!!」

西行寺幽々子は、死んだのだ

第六十四話 最凶の桜

「なあ、幽々子起きてくれよ!!」

冗談だよな?なあ、なあ!、なあ!!」

いくら揺さぶっても幽々子は反応しない

西行妖は、嘲笑うかのように揺れている

その枝がゆつくりと幽々子の方へ伸びてくるが俺は、その枝を乱暴に引きちぎった

「デメエに、幽々子を吸収させてたまるかあ!!」

神力を全開放して西行妖に向かう

妖力を纏った枝が俺をめがけて飛んでくるが無視して無理に突き進もうとするが、弾

かれてしまう

何度も何度も向かうが結果は、同じだった

回復も後回しで突っ込み続けた

「止めて師匠!!あなたまで死んじゃう」

「止めんなあ!!俺は、アイツをぶっ殺さねえといけねえんだあ!!」

「いい加減にされたまえ!!天童殿!!」

いつも穏やかな、妖忌が声を荒らげた

「ただ闇雲に突っ込んででも勝てませんぞ

今は、アレを止めるのが優先です、違いますか」

「くっ…… わりい、頭に血が上ってたわ」

「分かってもらえればいいのです、三人であれを止めましょう」

「おう!!」「はい!!」

「うおおおおおおお!!」

「はあああああああ!!」

俺と妖忌で本体を攻撃、紫がサポートで戦う

躲しても躲しても、妖力を纏った枝が追尾してくる

「鬱陶しい!! 影光「陰陽斬」!!」

月明光に光、村正に影を纏わせ放ち、枝を斬る

「よっしゃ!!」

しかし、斬った先から新たに枝が生えてきて、攻撃を再開してくる

オイオイ、再生ってありかよ!?

斬っては再生、斬っては再生、これじゃイタチごっこだ

いずれこっちの体力が切れるな

全体に目を通す

紫の方はまだ大丈夫そうだが、妖忌が危なそうだな

「光!!」

「はい!!」

月明光から、光に変化させる

「妖忌のフォローに回ってくれ」

「マスターは、大丈夫なのですか?」

「俺は大丈夫だ、早く行ってやれ」

「はい!!」

よし、これで妖忌方はひとまず安心だな
次は……………

「紫!!」

「何? 師匠」

「あいつを倒しきるのは多分無理だ」

「えっ? じゃあ、どうやって」

「お前、あれを封印できるか?」

「封印!?!」

「ああ、倒せなくても押さええつけられないかって思ってたな」

「出来なくは無いけど、封印するのには時間が……………」

「それは、こっちで稼ぐ」

後は、頼んだ!!」

「分かったわ」

紫が準備が終わるまで手出しはさせねえ

「妖忌!! 光!! 紫が封印術式を完成させるまで踏ん張ってくれ!!」

「了解」

「いくぞみんな!! 影符「御影の刃」」

「光符 「光明斬」

「人鬼 「未来永劫斬」

黒い影の刃が、光りの無数の斬撃が、緑の巨大な斬撃が

西行妖を目掛けて放たれた

「みんな!!お待たせ!!」

紫の方も準備が終わったようだ

「八雲式封印術!!」

西行妖の周りに結界が出てその力を押さえ込んでいく

「はあああああ!!」

「「「いっけええええ!!」」」

そして、その場一体が光に包まれた……………

第六十五話

勝利のための犠牲

「やった……のか？」

「あいつの妖力の封印は、成功したはずよ」

西行妖は、ピクリとも動かない

「ふう」

身体中の力が一気に抜ける

とてつもなく強い相手だった

紫、妖忌、光誰でも欠けていたら封印する事が出来なかっただろう

すべてが終わった

誰もがそう思ってた

しかし

「天童殿危ない!!」

「え?」

妖忌に押し飛ばされる

俺が立っていた場所には巨大な枝が通過して行き、妖忌が代わりに吹き飛ばされた

「なっ!?!妖忌!!」

「ぐっ、平気です」

俺は、その攻撃の主を見る

「くっそ、どうなってやがる封印出来たんじゃないのかよ!?!」

西行妖が動き出したのである

「紫!!」

「まさか……妖力が大きすぎて封印しきれなかったの?」

封印の許容範囲を超えたってことか……どんなパワーだよ……

「紫はもう一回封印の準備、妖忌と光は俺と一緒に本体を攻撃だ」

「「はい」」

「くっそ!!さつきより枝の数が多い」

一つ一つに妖力がそこまで回ってないため強度が低い为数がとにかく多い
しかも、少しでも油断をするとさつきみたいな、大きな枝が飛んでくる
気を全く抜けない

「ぬう!!」

さつきの一撃のせいかわ忌の動きが遅い

妖忌のわきを通って紫の方に枝が伸びてゆく

狙いは、紫か

紫は、封印術式のほうで手がいつぱいだ枝を防げない

「くっそお、無駄に頭いいなこの桜の木は!!」

紫の方に来た枝をすべて切り落とす

「ありがとう」

「おう、それより早く封印術式を、とびつきり強力なやつをな」

この瞬間、西行妖から目を離れたのが悪かった

横殴りの攻撃をモロにくらい宙に浮く

「ガアハ!?!」

そして、今までで一番巨大な枝が向かってくる

くっそ、体が動かない

今度こそ、ダメかもしれないな……………

「マスタアアアアアアアアアアア!!」

光が目の前に飛び込んできて枝を刀で受け止める

メシメシと音を立てて刀にヒビが入った

そして、刀が砕け散るとともに光は、そのまま弾かれ目の届かないところまで飛ばされた

「ヒカリイイイイイイ!!」

「天童殿!!よそ見してる場合じゃありませんぞ」

西行妖は、こっちのことなんてお構いなしで攻撃を仕掛けてくる

「があ」

「妖忌!!」

遂に、妖忌まで吹き飛ばされてしまった
残るのは俺と紫だけ……………

勝てるのか? コイツに……………

いや違う

「勝てる勝てないかじゃない

俺は、コイツに勝たないといけないんだあ!!」

村正をもう一度握り締め、呼吸を整える

「うおおおおおおお!!」

単騎で西行妖に突っ込む

俺を落とそうと枝が飛んでくる

「鈴!! 俺に力を貸してくれえ!!」

鈴符「千本針」!!」

腕輪が今まで以上に輝きだし、俺の後ろには千本の長さ五メートルを越える巨体な針
が現れ

枝を次々破壊していく

その間に俺は、西行妖の幹にしがみついた

たった一つだけ覚えた封印術

「自中封印」

自中封印、名前通り、自分の中に対象を封印する術である

この封印は対象の力が膨大すぎると中から崩壊し絶命してしまうと言うデメリットがある

「ぐっ、があああああああ!!」

「師匠!!」

「紫、コイツの力を俺の中に留めることで最大限まで落としてある

今のうちに俺ごと封印しろ」

「え？師匠ごと？」

「ああ、そうだ早くしてくれ!!」

「無理よ、そんな師匠事なんて……」

「紫!!」

「分かってる、分かってるけど」

「紫はやk……があああああああ!!」

「師匠!!」

「急げえ!!」

「でも……………」

「でもじゃねえ!!」

今しかチャンスはねえんだよ、お前しかやれる奴はいないんだ!!

俺の最後のわがままで、紫頼む」

「分かったわ、師匠…………… 八雲式封印術」

光りが俺と西行妖を包む

「ありがとう紫…………… またな」

「ええ、また会いましょう 師匠」

そして俺の意識は暗闇の中に落ちていった……………

第七章 開放編

第六十六話 天童妹が幻想入り

どうも、私の名前は化野言音です……っていったい私誰に向かつて自己紹介してるんだらう？

拓也が消えてから、一ヶ月がたったがまだ気持ちの整理がつかない
ホントあれは何だったんだらう？

拓也が私をかばってトラックに引かれたあと、拓也の体は光とともに消失した
普通人間は死んでも消えたりはしない

拓也は、今は一応行方不明と言う扱いだ

「あ、言音さん」

「あ、陽菜ちゃん」

この子は、陽菜ちゃん、本名は天童陽菜てんどうひなで拓也の妹

「はあくお兄ちゃん、ほんとにどこ言ってるんだらう」

「本当だね」

言えない、私をかばってトラックに引かれたあと光と共に消えたなんて言えない

あと、言っても信じてもらえないだろうしな

「では、陽菜はこの辺で」

「うん、バイバイ」

そして、そのまま私たちは別れた

たつくもくお兄ちゃん一体どこほつつき歩いてるのかな

言葉さんなんか、暗い感じだったな……お兄ちゃんのこと本当は何か知っていたりして……

まあ、そんなことないかな？

明日それとなく聞いてみよ

私がいろいろ考えながら歩いてみると

「あれ？」

見慣れない階段を見つけた

こんなとこにこんな階段あつたけ？

家の近くの山に見たことがない階段があつた

小さい頃からこの辺に住んでるため間違えることは、早々ないのだが……………

何かある気がする

そう思い、自然と足を階段の方へ進めていた

そして、一段また一段と階段を上つていった

この上には何があるんだろ？ただ、そう思い階段を上がり続けた

そして、最後の一段の上つて鳥居の下に出た

「……神社？」

なんで、こんな山奥に神社あるのか？

うくん、やっぱり覚えがないな

名前を聞けば思い出すかもしれない、と思い神社の名前を探した

「ええつと……………あつた、博麗神社？」

博麗神社って言うんだココ

でも、思い出せないな……………

まあ、いいか

せつかくだからお参りして行こうかな

私は財布の中から五円玉を取り出し賽銭箱に放り込んだ

二礼二拍手一礼つと……………

「神様お願いします

お兄ちゃんが早く帰って来ますように」

って、神頼みでどうにかなる物でもないか……………

「こんにちは」

「わっ!？」

「あら、脅かしちゃった? ごめんなさいね」

いつの間にか、私の後ろに女の人が立っていた

かなりの美人さん……………

「あなた、天童陽菜よね?」

「なっ、なんで陽菜の名前を?」

「ふふ、昔聞いたのよ

あなたのお兄さんに」

「お兄ちゃんのことをなにか知っていますか!？」

「ええ、会いたい?」

「はい」

「そう、ならここを通って」

すると、女の人の横の空間に亀裂が入り裂けた

え? 何これ?

中に沢山の目玉が見える

気色悪い……でも、この向こうにお兄ちゃんがいるなら……

私は恐る恐るその裂け目の中を通った

通った先はさっきの博麗神社だった

しかし、さっきまでの神社と違い綺麗で手が行き通ってた

「ここは、いったい……」

後ろにはさっきの女の人笑顔で立っていた

「ようこそ幻想郷へ」

天童陽菜あなたを受け入れるわ」

第六十七話 開放の鍵

「幻想郷？」

そんな、地名の場所あつたかな？

「ここは、日本なんですか？」

「一応日本よ、結界で外からは干渉出来ないけど」

結界…… アニメや漫画の中では見たことあるけど、実際にあるんだ

「幻想郷って、いったい何なんですか？」

「ここは、忘れられたものが来る楽園よ」

忘れられたものか………

「ん？あれ、紫じゃない

何しに来たの？」

神社の中から、頭に大きな赤いリボンをつけた巫女服？の巫女さんが出てきた

「あら、丁度いい所に来たわね 霊夢」

巫女さんの名前は霊夢と言うそう

「どうせまた面倒なことを…… あれ？誰、その子？」

「て、天童陽菜といます」

「ふくん、私は霊夢、博麗霊夢よ、この博麗神社の巫女をやってるわ
やっぱり、巫女さんだった

「で、紫？なんでこの子を連れてきたの？」

「そうでした、早くお兄ちゃんに会わせて下さい」

「わかったわ、霊夢手伝ってくれる？」

「私の質問にまだ答えてないんだけど」

「そうだったわね、この神社の神様を封印から解くのよ」

「ふくん、神をね…………… えっ!?!神？」

「さて、陽菜さん」

「はい」

「あなたにも手伝って貰いますからね」

「え？」

手伝うって陽菜は何をすればいいんですか？」

「ああ、まず能力を確認しないとね」

「能力？」

「そう、能力

私だと『境界を操る程度の能力』だし、そのの靈夢だと『空を飛ぶ程度の能力』を持つてるの

正確な能力名は分からないけど、能力を持っているはずよ」
「陽菜にそんな力が……」

「じゃ、今日はもう遅いから、後は靈夢よろしく」

「はあ？ちよつと、待ちなさい……って、逃げたか……」

紫さんは、隙間？を開いてその中に消えていってしまった

「はあ、しょうがないわね

えつと、陽菜って言っただけ？」

「は、はい」

靈夢さんは面倒くさそうに頭を掻きながら話す

「取りあえず、うちに上がって」

神社の中に案内された

神社の中は、殺風景でほんとに必要なものしかないって感じだった

「紫のことだからどうせ明日来るでしょうから、今日は泊まっていきなさい」

「いいんですか」

「いいもなにも、野宿なんてしたら妖怪に食われるわよ」

「妖怪!?!」

妖怪なんているんだ

「紫も妖怪よ」

「紫さんも!?!」

驚きの連続である

「すみません」

「別に謝らなくてもいいわよ、人を妖怪から守るのも博麗の巫女の役目だから」

霊夢さんはぶつきらぼうに言った、根は優しそうだ

夕御飯をぐっ馳走になってから、霊夢さんに呼ばれて、居間に来ていた

「明日に備えて、能力の確認だけしておきましょう」

「はあ……」

やっぱり、まだ能力って言っても実感がない

「目をつぶって、心を落ち着かせて」

霊夢さんの言う通りにする

「箱をイメージして、形は何でもいいわ」

そんなテキトウなど、思いながらも宝箱をイメージする

「その箱をゆっくりと開けて」

宝箱は開き中から、文字が出てきた

『開閉を操る程度の能力』？」

「おめでとう、それがあなたの能力よ」

これが、陽菜の能力……

開閉を操る程度の能力、いったいどんな能力なんだろう

第六十八話 陽菜の特訓

「う〜ん」

朝の日差しにより目が覚める

そう言えば、昨日霊夢さんの家に泊まらしてもらったんだった

霊夢さんはもう起きてるのかな？

布団から這い出て外に出る

霊夢さんは外で掃き掃除をしていた

「あ、起きた？ちよつと待ってて、いま朝食の準備するから」

「陽菜も手伝います」

「いいわよ、すぐ出来るから

居間で待ってて」

居間で待っているとすぐに霊夢さんが朝食を持ってきてくれた

「朝食食べ終わったら能力の修行するわよ」

「修行ですか？でもなんで？」

「能力が分かったからって使いこなせるわけじゃないからね」

「なるほどお……」

よし!!頑張るぞい!!

朝食後

「さーて、そんじゃはじめるわよ」

「は、はい よろしくお願いします」

「それじゃ、まず能力を使ってこの鍵を開けて」

「はい」

前に置かれた箱の鍵穴を見る

開け〜開け〜と念じてみる

が、ピクリとも動かない

「ダメね」

「う〜そんなにキツパリ言わなくても……………」

「さーて、どうしたもn「霊夢〜」……………うるさいのが来たわね」

霊夢さんはそう言つて空を見る

空？

つて、えっえ〜!!

空にザ・魔法使いという格好をした金髪の女の子がいた

と、飛んでる…………

「暇だから遊びに来たぜ!!」

「来たんならちゃんと言銭箱にお金入れていきなさいよね」

巫女さんがそんなこと言つていいのかな？

「ん？ 見ない顔だな、外来人か？」

「紫が連れてきたのよ」

「ああ、なるほど」

私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ」

「天童陽菜と言います よろしくお願いします」

魔法使いつて普通なのかな？

男ぼつい喋り方をする、魔理沙さんを見ながらそんなことを思った

「魔理沙さん、どうやって空を飛んだんですか？」

「いや、普通にだぜ？」

幻想郷では空を飛べる奴は多いんだぜ」

「幻想郷では常識が通用しないものね」

「じゃ、じゃあ、陽菜も飛べるようになりますか？」

「なれる（ぜ）わよ」

「おしえて下さい!!」

空を飛べるなんて夢みたい

「そうね、能力の特訓と一緒に霊力を操る特訓もした方が能力を操るのも早くなるし、そうしましょ」

「やったー」

「よかったな、陽菜」

「はい」

「さっさと済ましちゃうわよ」

「は、はい!!」

「えっと霊夢さん、これは？」

「瞑想」

そんな端的な、と思っているとまだ続きがあつた

「あんたは、元から霊力が高いけどそれを全然引き出せてないの、霊力を高めるのも引き出すのも瞑想が一番だし、私がサボれる」

へへ瞑想ってそんな効果があるんだ……あれ？今とんでもないこと最後に言わなかつた？

瞑想をしていると、身体の中から暖かい感じがしてきた
「いい感じね……よし、外に出るわよ」

「まず、私がやるからそれを真似してみてください」

そう言っつて、霊夢さんは青白い球体を手のひらに出した
「これが霊力よ、やってみなさい」

「は、はい!!」

手のひらに力を込める、すると青白い球体が出る
霊夢さんより小さいけど

「そう、いい感じ」

体の中から力を出す感じ」

「はい!!」

体の中に靈力が流れているのをイメージをし、力をもう一度加える
「わあ!?!」

ボウト、音を立てて一回りぐらい大きくなる

「その調子よ」

さて、次行くわよ」

「はい」

待っててね、お兄ちゃん!!

第六十九話

賢者からの忠告

あれから数週間

「お、おお、おおおお!!空を飛んでる!!」

空を飛べるまでに霊力の操作ができるようになっていた

「いい感じよ、次は箱開けね」

「はい」

錠前の鍵穴を見て鍵をイメージしイメージした鍵をそのまま差し込み回す

ガチャと音を立てて鍵が開く

「やったあ!!」

今では能力をだいぶ使えるようになった

まだ、鍵穴があつたりロックしている物が見えないと使えないけど、着々と成長している

「そろそろアレをやらしてもいいかもね」

「アレって?」

「おお!!アレか!!」

「だから、アレって何ですか!？」

「弾幕(うた)っ!」

「?」

良く分からないまま始まってしまった………

「陽菜ー!!準備はいいかー!!」

正面にいる魔理沙さんは、やる気満々だ

霊夢さんは縁側でお茶をすすってる

えっと、弾幕ごっこは要は玉当てゲームってことでもいいのかな？

「それじゃ、行くぜ!!」

魔理沙さんが魔力で出来た弾を撃ってくる

「わっわっわっわっ」

飛びながらそれをかわす

「お!!じゃんじゃんいくぜ」

「こつちだつて!!」

霊弾の作り方は幸い空を飛ぶ練習の時にやった

弾を作り方放つ

「どんどん行くぜ」

魔理沙さんの弾幕がだんだんと濃くなってくる

どうしよう、逃げ道が……………

「右35°よ」

「え?」

縁側でお茶をすすつてた霊夢さんが言ってきた方向を見ると人が通れるぐらいの隙

間があった

霊夢さん凄

「ああ、霊夢!!ずるいぜ」

「初心者相手に何ムキになってんの?」

「あくも〜いいんだぜ!!」

魔符「スターダストレヴェアリエ」

星のような弾幕が、陽菜を襲う

「きゃあああああ!!」

弾幕に当たり落ちてしまう

「大丈夫?」

「どちらかというと大丈夫じゃないです」

「まあ、慣れる分にはよかったわ

今日の修行はこれでオシマイ」

今日も疲れました……………

「霊夢、陽菜お疲れ」

「わっ!?!」

「………… やつと来たわね、紫」

紫さんがスキマを使って出てきた

ホントにビックリするな……………

「今日は少し報告をしておこうと思って」

「報告って何なんだぜ?」

「あら?、魔理沙もいたの丁度いいわ

で、報告って言うのは最近妖怪たちに良くない動きが見えるから気をつけてということよ」

「よくない動き？」

「幻想郷のシステムに反対してる妖怪の一部が何かコソコソしてるようなんだけど」「それを止めるのがあんたの役目でしょ？」

それとも、何か知ってて企んでる？」

霊夢さんが紫さんを睨む

「ふふ、どうでしょうね

それじゃ」

そう言っつて紫さんはスキマの奥へ姿を消した

第七十話 異変の始まり

「疲れたあ」

陽菜は、今日も修行に勤しんでいます

それにしても昨日の紫さんの言葉は何だったんだろ？

霊夢さんに聞いても「あんたが気にすることじゃないわ」って言われちゃったし……………

そんなことを考えていると、途轍もない音と地響きが起こった

ビククリしてその方向を見る

音の原因は隕石だった……隕石!?

隕石は、一つの山に落ち山を消しきった

突然のこと過ぎて、ポカーンとするしかなかった

「なんでだぜ!!?ここは結界の中だから隕石なんて降ってくるわけにはずだぜ!」

「魔理沙、落ち着きなさい」

「これが落ち着いていられるわけないぜ!!」

魔理沙さんもだいぶ慌てるようだ

「紫が言っていた事はこれだったのね

これは、異変よ」

「異変……」

紫さんが言っていた事はこれだったんだ

隕石を降らせるなんてなんて危険な能力なんだろう

今も隕石は降り続けている

「どうするんですか!?!あれ」

「紫が何とかするでしょ」

ええ、もう少し真面目に考えてくださいよ

「さてと、面倒だけど行くしかないわね」

「腕がなるぜ!!」

「ちよと、お二人とも何処へ行くんですか!?!危険ですよ!!」

「そんなこと分かってるわよ、ちよとと異変の首謀者をボコしてくるだけ」

「ボコすって……」

「それに、異変解決は博麗の巫女の仕事でもあるからね」

「私はただの興味本位だぜ」

「なら陽菜も「ダメ」何ですか!?!」

「アンタがいても邪魔になるだけだわ

魔理沙行くわよ」

霊夢さんはそう言って飛び立ってしまった

陽菜だって、努力でしきたのに

空だって飛べるし、弾幕も貼れるのに

「ごめんな、霊夢のやつ言い方きつくて

本当は陽菜に危険な思いをさせたくないだけだと思っ

あいつ根はいい奴だからさ

じゃ、私も行ってくるぜ」

「魔理沙さんありがとうござい

お気おつけて」

「おう!!」

「しっかし霊夢、異変の首謀者は何が目的なんだろうな」

「私に聞かないでよ、知るわけ無いでしょ」

「どうせくだらない事でしょうけど……魔理沙、来るわよ」

「何が？　つてうわあ!?!」

下から、攻撃が飛んでくる

「いきなりは、卑怯だぜ」

「文句言つてないで早く反撃」

「分かってるぜ」

攻撃が飛んで来た方にゆく、そこには二十、三十ぐらいの数の妖怪たちがいた

「一気に片付けるわよ」

夢符「封魔陣」

「おう!!」

魔符「ミルキーウェイ」

二人で同時にスペルを発動し、妖怪たちを一掃する

「さーて、親玉はどこかしら？」

「そんな簡単に出てくるわけないぜ」

「… … 俺に何か用か？」

かすれた声でそいつは現れた

体全体が鱗のようなモノで包まれているが、姿はまるで人のような男だった

「アンタが異変の首謀者」

「… … そうだ」

「じゃあ、この降り注ぎ続けている隕石を辞めてもらえないかしら」

「… … 無理だ」

「それじゃ、力づくで行くわよ」

「腕がなるぜ!!」

「… … 来い」

赤と黄色、そして灰色の影が衝突した

第七十一話 灰色の男

「くっ!!」

「どうした?そんなものか?」

全身が灰色の鱗に包まれた男がゆっくり近づいてくる

「よそ見してたら危ないぜ!!」

魔理沙が横から弾幕を放つが、竜巻が吹き荒れ吹き飛ばされる

「邪魔だ」

男が手をかざすとまた竜巻が起こり魔理沙を襲う

「う、うわああああ!!」

「魔理沙!!」

「よそ見してる場合か?」

「な!?!」

さつきまで、目の前にいた男はいつの間にか後ろで構えていた

「夢符 「二重結界」 !!」

結界を展開し攻撃に備える

「天災 「崩れゆく雪蜥蜴」

突如、大量の雪が発生し雪崩のように押し寄せて来た

押し寄せる雪はまるで一匹の巨大なトカゲのような形になり、襲い来る

「くっ!!」

結界を維持しながら押し流されないように踏ん張る

「ふむ、天災 「押し寄せる水蛇」

男は雪崩にプラスし今度は津波を生み出した

その津波は数千の水で出来た蛇のようだった

「くっ、きやああああ!!」

ついに踏ん張りが効かなくなり吹き飛ばされ、魔理沙の近くに倒れる

「終わりだ天災 「暴れ回る風鱈」

風の鱈が魔理沙と私を襲い、そこで意識を失った

霊夢さん、魔理沙さん遅いな…：… 大丈夫かな…：…

霊夢さんと魔理沙さんが出て行ってから数時間経っていた

心配しながらソワソワしていると空間に切れ目が入り中からは紫さんが出てきた

「紫さん…：… ツツ!？」

紫さんは見馴れた人を抱えていた…：… 霊夢さんと魔理沙さんだ

「霊夢さん!! 魔理沙さん!!」

「陽菜、二人を博麗神社に運び込んで治療するわ

手伝ってちょうだい」

「は、はい!!」

二人を神社の中へ運び込み、傷口を消毒してから能力で閉じた

しかし、傷口は閉じたが痛みは無くなっていないはずだ

二人が負けるなんて……………

「う、うう……」

「霊夢さん!?!大丈夫ですか!?!」

「傷口に響くから大きい声出さないで

……は……神社ね」

「はい、紫さんがお二人を運んで来ました」

「紫が?」

「あら霊夢、目が覚めたのね」

「おかげさまでね」

「……ところで、何があったの?」

「異変の首謀者にやられただけよ」

「霊夢さんが!?!」

霊夢さんは普段ぼんやりしているけど凄い人だ、そんな人が負けるなんて……………

「今回の異変の首謀者を甘く見てたわ

隕石の方はどうにかしたから、今は体を回復させる方を優先しなさい」

「悪いけど、そうさせて貰うわ」

そう言って霊夢さんは布団をかぶったてしまった

早くみんなを守るぐらい力を付けなきゃ

そう心の中で決意した

その頃、階段を登る灰色の影があつたのは誰も気づかなかつた……………

第七十二話 復活

「はなせー!! はなすんだぜ!!」

「無茶ですよ魔理沙さん!! そんな傷で行くなんて!!」

「私は、アイツに一発ぶち込まないと気がすまないんだぜ!!」

霊夢さんが目を覚ましてから数分後、魔理沙さんも目を覚ました

魔理沙さんは、目を覚ましてからずっとこの調子で異変の首謀者の所へ行こうとして
いる

「傷なんてないぜ!!」

「いや、それ陽菜が閉じただけですから」

中々諦めてくれ無い魔理沙さん

霊夢さんは魔理沙さんが五月蠅くて眠れなかったのかお茶をすすっている、少しは手
伝って欲しいものだ

「……来る」

「えっ？何が……つつ!?」

霊夢さんが急に発した言葉の意味を私はすぐに理解した

とてつもなく邪悪な妖力を放ちながら全身を灰色の鱗でつつんだ男が階段を登りきり鳥居の下に来ていたのだ

「魔理沙さん、あれは？」

「異変の首謀者だぜ」

「あれが……」

一緒の空間にいただけで威圧感で押しつぶされそうだ

霊夢さんと魔理沙さんは境内へ出てゆく

「アンタ何しに来たの？」

霊夢さんの声色が変わる

「……高い場所を求めて来たが……まさか貴様らがいるとわな

……なら、この世界を見渡すのにちょうどいいな」

「アンタ何をするつもり？」

「世界を変える」

「世界を？」

「俺は、半人半妖だ、そのせいか周りから忌み嫌わせていた

父と母は俺らを守るために人間に殺された、姉は散々弄ばれてから殺された、弟はそんな環境に耐えれず自殺した、何故こうなる？俺が半人半妖だからか？こんな世界はおかしいだから力をつけたのだ

この世界の格差をない世界へと変えるため、皆が等しく平等な世界へ………

その為に、まずこの歪んだ世界を破壊する!!」

「破壊なんてさせないわ(ぜ)!!」

霊夢さんと魔理沙さんは同時に飛び出す

「邪魔をするな

天災「天降る岩龍」

男がスペルを唱えると空から岩の龍が霊夢さんと魔理沙さん目がけて落下してきた
「くっ」

二人とも怪我のせいで動きが鈍くなっているため、躲すのがギリギリだった
そこから、戦いは激化していった

陽菜が入る余地なんてなかった

霊夢さんと魔理沙さんは、どんどん追い込まれていき傷ついていった

陽菜は、怖くて恐くて見てるしかできなかった

「終わりだな」

霊夢さんと魔理沙さんを見下ろす男がそう呟き、今にも止めを刺そうとしていた

「つやめてください!!」

恐怖に震えながら男の前に立ちはだかった

自分でも何をしているかわからなかった、ただ霊夢さんと魔理沙さんを失いたくない
と言う気持ちだけが体を動かした

「アナタが言う理想の世界は素晴らしいと思います、誰もが等しく平等、でもやり方は間違っています!!その理想な世界を創るために今生きている人たちの命を奪っていい理由にはなりません!!」

「…… 黙れ」

「アナタの家族はとても優しくかったんでしょ!!その家族のアナタなら分かるはずですよ!!」

「黙れ」

「もう一度考えてなおして下さい!!」

「黙れ!!」

半人半妖の男を中心として竜巻が起こり吹き飛ばされ倉にぶつかる

紫さんがお兄ちゃんに封印されていると言っていた倉だ

お兄ちゃんなら、この状況をどうにか出来るかもしれない

お兄ちゃんお願い、霊夢さんと魔理沙さんを……幻想郷を守って

必死で願った、もう涙が今にも零れそうだった

届く筈がない拙い思いのはずだった……しかし瞬間、倉の扉が勢いよく開か

れ中から眩い光を放った

そして、中からは愛しい人が現れた

「……おにいちゃん？」

天童拓也が封印から解かれ復活したのだった

第七十三話 戦闘開始

まるで長い夢から覚めたような感じだった

はつきりせずボヤがかかっていた視界が少しずつ晴れていき意識が覚醒する

目の前には、巫女装束の女の子と魔女の格好をした女の子が倒れておりそれを見下ろすかのように灰色の鱗を纏った男が立っていた

それぞれが、驚いたように目を見開きこちらを見ていた

えつと……これ、どういう状況？

全くもって状況が理解できない俺に誰かが抱きついてきた

「誰だ？……つて陽菜!？」

「おにいーちゃんー!!」

抱きついてきたのは、涙で顔をぐしゃぐしゃにした妹の陽菜だった

えっ!?なんで俺の妹がここにいるの？普通会えないはずだよね？

さらに俺の脳は混乱してゆく、誰か助けてくれ………

「貴様も俺の邪魔をするのか？」

ふと、目の前の灰色の男が声をかけてきた

邪魔？何のことだ？

「お兄ちゃん助けて

あの人が幻想郷を滅ぼそうとしているの」

「えつと…その…」

待て待て待て、また知らない単語が出てきたぞ…： 幻想郷？それ、どこの地名？

「俺の邪魔をする者は誰であろうと消し去る!!」

天災「崩れゆく雪蜥蜴」!!」

何もわからない俺に向かって、灰色の男は雪のトカゲを創り出し攻撃をしてくる

ちよと、誰か説明を!!説明をブリーズ!!

「ちよ!!」

陽菜を引つ張り上空に逃げ雪のトカゲをかわす

雪のトカゲはそのまま直進し俺達の後ろに建っていた蔵にぶつかり蔵を破壊した
なんだか知らないが、アイツは敵だこれは決定した

攻撃してくる奴は敵だもんな

「陽菜、アイツは何が目的なんだ？」

「えっと、理想な世界を創るために今ある世界、つまり幻想郷を破壊することだった筈」
理想な世界を創るために今ある世界を破壊か随分と無茶苦茶なことやろうとしてる
なアイツは……

よく見ると隕石降ってるし、なんなんだよこの世界!!

「おい、お前そんな事しているの田舎のお母さんが知ったらお母さんが泣くぞ!!」

「母は、病気で死んだ!!」

「えっ?……じゃあ、田舎のお父さんが泣くぞ!!」

「父も殺された!!」

「えっえっ!!……じゃ、じゃあ、きょうだい姉兄が泣くぞ!!」

「姉も弟も死んだ!!」

「もういい好きにしろ!!」

「ちよと、お兄ちゃん!」

だって、アイツすつごく可哀想だもん

「あんなのがうちの神社の神様?」

「ハハハ、変な奴だぜ」

おいそこの巫女と魔女、聞こえてないと思って言ってるかもしれないがばっちし聞こえてるからね

「茶番はいい、さっさと終わらせようか」

「おうよ、かかって来いや!!」

目覚めてからいきなり戦いつて俺の人生ろくでもないな、そう俺は思った……………

第七十四話

岩雨異変、解決

「ふん!!」

「うおつとお」

何故こんな事になったのだろうか

確か西行妖を封印して目を覚ましたらこの状況、ということとは封印が解かれたということだろうか？西行妖はどこ行った？

「逃げてばかりでは終わらんぞ」

「わかってるよ」

基礎能力アップパラメータ（攻アタック）（速スピード）Level 4

灰色の男は、炎、水、雷、雪、風様々な攻撃を次々と放ってくる

その形は蛇だったり亀だったり蜥蜴だったり爬虫類の形をしていた

それをスピードを上げてかわしていく

「おーい、神様

さっさと終わらせなさいよ、神社がボロボロになるじゃない」

巫女の子が遠くから声をあげてくる

何あの子めつちやわがまま、俺の中の巫女のイメージ崩れるからやめて!!

「あーやればいいんだろ!!やれば!!」

鈴符「降り注ぐ刃」!!」

大量の刃物を設置し投下する

「ぬう!!」

灰色の男は風を上に向けて放ちナイフを弾いてくる

俺は、灰色の男の意識が上空のナイフに向いている間に背後に回り込む

「鈴符「鉄拳制裁」!!」

鉄の拳が灰色の男の頬に直撃し吹き飛ばす

灰色の男は、地面を転がり蔵の残骸のなかに突っ込んでいった

…… どうだ?やったか?

そんな期待を裏切り灰色の男はゆらりと立ち上がった

しかし、灰色の男は口から血を吐き出し、頬のあたりの鱗が剥がれ落ち赤い肉が見え

ていた

「げっほげっほ」

あれ?もしかしてこいつ防御力めつちやくちや弱い?

もう一発叩き込んでおくか

「おらっ!!」

「があ!!」

灰色の男を速度はダメージを負ったせいも格段とスピードが落ちており簡単に鉄の拳が男の腹に刺さり、口から血を吐き出す

流石に危険を感じたのか男は距離を取る

「ここまで追い込まれるとはな」

いや、アンタの防御力低すぎなだけだよ

「もう止めないか?もうあんたの体が持たないぞ」

「辞めるわけにはいかんだ、たとえこの身が朽ちようとも!!」

灰色の男の目には今まで無かった闘志のようなものが感じられた

「そうか…… なら、全力で相手させてもらおうぜ!!」

「天災「天変地異」!!」

灰色の男は宙に浮かび次々と天災を繰り出す

雪崩の蜥蜴、津波の蛇、竜巻の鰐、土砂崩れの亀、落雷のイグアナ、隕石の龍が俺をめがけて飛んでくるが

「しゃくらせえ!!」

チェンジ
デストロイ
変更（破壊）

拳一つで打ち破った

「なっ!？」

「相手が悪かったな、これで終わりだっ!!」

灰色の男にもう一撃いれるとピクリとも動かなくなり、空から降り注いでいた隕石の雨は止んだのであった

第七十五話 光の行方

「お疲れ様です、師匠」

ふと、聞き覚えのある声が聞こえその方を見ると、八雲紫が立っていた
「えっ？紫!？」

「ありがとうございます」

私の幻想郷を守ってくれて」

「本当にゆかりん？言葉遣い変わり過ぎて怖いけど」

「ゆかりん言わないでください!!」

「あ、ゆかりんだ」

よかつたー安心したわ、もし偽物だったらどうしようと思つたわ

「ちよと紫、師匠ってどういう事？」

わがまま言っていた巫女がゆかりんに突っかかっていた

「どういう事って、彼は私の師匠よ」

「何言ってるの!？」

そこの神ぼつい人は陽菜の兄でしょ!?!… いや、姉?」

「俺は、男だ!!」

「そうよ霊夢、それにこの人私より年上よ」

「なっ!?!」

巫女さんはゆかりんと俺の顔を交互み見てくる

これでも君より年上です、それに男です

「お兄ちゃん、その人生生きています?」

「大丈夫だ、手加減はした生きています…多分」

「その間はなに?」

え?生きてるよね?死んでないよね?ちよつと怖くなってきたわ、ちよつと君起き

てー

「大丈夫よ師匠、その半人半妖は生きていますわ

その身柄はこつちで預かるわね」

ゆかりんはスキマを開いて灰色の男を消した

「それにしても、あいつを一人で倒すなんてあんた何者?」

「人のことを聞くときはまず自分から習わなかったのか?」

「習ってないわ」

「おい…じゃあ今、覚えろ」

「たつく、面倒くさいわね

私は博麗霊夢、この博麗神社の巫女よ」

「私は霧雨魔理沙だぜ!!」

わつ、急に魔女の子もはいつてきたな

「俺は天童拓也だ

一応神をやってる」

「お兄ちゃん神様になってたの!?!」

うん、陽菜ちゃんお兄ちゃんも最初はびっくりしたよ

もう慣れたけど……

その後、陽菜と霊夢と魔理沙にいろいろ聞かれたり神社を修復したりしてらうちに夜になりそれぞれが布団をかぶり寝息を立てていた

俺は、なんだか寝付けなく外で月を眺めていた、寝付けないのは気がかりなことがあつたからだ

……アイツは何処にいるんだ?

「師匠」

「おう、紫か…… 本当に神出鬼没だな、お前」

「師匠も出来るでしょ？それよりも気になってるんじゃない」光さんのこと」

「ああ、アイツは何処にいるんだ？」

すると、紫はスキマを開いて中から何かを取り出した

「これは……」

「…… 月明光よ」

紫が取り出したのは刃が折れボロボロになった愛刀月明光だった

「西行妖を封印したあと見つけた時にはこの状態に……」

「くっそお!!…… 光い」

付喪神である光は依代である月明光が壊れてしまつては消えてしまう

「俺がしっかりしていれば……」

その日は、泣き続け疲れきつてしまいそのまま深い眠りについてしまった

第七十六話 続く異変

「あの神様はまだ寝てんの？」

「はい、お兄ちゃんはまだ寝てます」

「あくもく、買い物行ってきてもらおうと思ったのに」

「いや、神様をパシリみたいに使っちゃいけないと思いますよ!!」

陽菜が鋭いツツコミをいれてくる

「わかってるわよ……はあく仕方ない、私が行くか」

「ま、待ってください!!霊夢さん」

「うん？なに？」

「私もついて行っているんですか？人里ってまだ行ったことなくて……」

そう言えば、特訓ばかりでそうだったな……と思いつつ、目を輝かしている陽菜を見る

断つてもお願いしてきそうだな……

「まあ、いいわよ」

「やったー!!準備してきます」

そう言つて陽菜は神社の中へ戻つていった
はあー、めんどくさい事になりそうだな……

霊夢さんと一緒に人里に来ました!!

時代劇のセツトみたいですごくいいなと思い、少しテンションが上がってくる

隣では霊夢さんが気だるそうに大きなあくびをしている本当にすごい人なのか自分を疑いたくなってくる

「さてと、ちやつちやと終わらせるわよ」

「はい!! 霊夢さんお金は?」

「あるわよ、三百円」

「少な!!」

えっ!?! 少なすぎじゃありません? 三百円で何が買えるかな…… いや、今は時代が昔

ぼいし、三百円も高価なのかも……

そう願いながら霊夢さんの後を付いて行った

はい、三百円は、三百円でした

そうですね、こんな少ないお金で霊夢さん今までよく生きてこられたなんて考えていると、歩みを止めていた霊夢さんにぶつかってしまう

「どうしたんで：：つつ!!」

霊夢さんに何かあったのか聞こうと思った瞬間にすべてを理解した

周りに黒い煙のようなものが充満しており、人里の人々が倒れているのだ

「霊夢さん、これってまた……」

「ええ、異変よ

まったく、昨日の今日で……まだ傷も癒えてないって言うのに」

霊夢さんは、ものすごく機嫌が悪くなっている

下手に刺激しない方がいいよね

「はあく、陽菜!!」

「は、はい」

「私は、これ以上被害が広がらないようにするため結界を貼るから、アンタは倒れてる人達を家の中に放り込んで来なさい」

また、大事件にならないといいけどな……そんなことを考えながら、霊夢さんに言われたとおり道で倒れている人を家のなかに連れていった

倒れていた人を全て家の中に連れて行ってから霊夢さんの元へ戻った

「さてと、それじゃあ行きますか」

「行くつて、どこへですか?」

「うん？ 決まってんじゃない異変主犯者のところよ」

「え、でも……」その必要はありませんよ」

まだ怪我をしているため止めようと思ったとき、聞きなれない男の声が響いた
「どうも、初めまして博麗の巫女さん」

急に現れた黒いスーツに見を包んだ丸眼鏡をかけた男は不敵に笑った

第七十七話 開放者

「どうも、初めまして博麗の巫女さん。」

目の前に現れた妖怪？は、白のシャツにジャケットを羽織りつており、まるで執事のような服装だ。

その妖怪は、特徴的な丸眼鏡を指で押し上げて薄気味悪く笑う。

「誰なんですか？ 貴方は？ 執事みたいな格好していますけど……」

「羊？」

「霊夢さん少し黙ってください。」

「私ですか？ …… そうですね。あえて言うなら、開放者でしょうか？」

「開放者？」

「そう開放者です。この幻想郷という檻から妖怪たちを解放するために立ち上がったものです。この幻想郷では、八雲紫の作ったキマリのせいで妖怪たちが人間を十分に摂取

出来てません。だから私は、博麗の巫女を倒し結界を破るのです!」
「結界を……」

そんな事をしたら、私がいた方の世界に妖怪が溢れて大惨殺が起こってしまう。

「そんなk 「そんな事させるわけ無いでしょう? だいたい、私が死ぬわけないし。」

今まで黙っていた(黙らされていた) 霊夢さんが、さも当然かのように言い放った。

「開放者だとか、知らないけどね。博麗の巫女として、とっとと退治させてもらおうよ。さてと、私の休暇を奪った罪は重いわよ。」

「絶対、後半がメインですよね!」

「ふふふふふ。では、こちらから行きますよ!」

執事服の妖怪は体を煙のようにし、霊夢さんはお払い棒を構える。そして二人は衝突した。

早く…… 早く帰って、お兄ちゃんや魔理沙さんに伝えなきや!

私は、神社へ向けて飛ぶ速度を上げた。



くつ、厄介ね。目の前の妖怪を見ながらそう思う。

体を煙のようにしてくるせいで、物理攻撃が全然聞かないし、煙にして腕や足を伸ばしてくるから攻撃距離も変わってくる。

「ほらほら、どうしたんですか？博麗の巫女。私を退治するんじゃないんですか？」
「言われなくてもしてやるわよ！」

と言っても、お札や零弾は、全然当たらない。面倒くさいったらありやしないわ。

「そろそろ決めますよ！」
「なっ!？」

煙男は、煙幕を張り視界を奪ってきた。

慌てて煙幕から出るが、そこを狙って攻撃され民家に突っ込む。

「があ!？」

この前の灰色男にやられた傷が開き、巻いてある包帯に血が滲む。

痛みを押さえつけて、その場を即座に移動する。

今、煙男からは、私の姿は捉えられていないはず。なら、そこから不意を突く。民家の間を縫って移動し、煙男の背後を取る。

「もらったあ!？」

完全に不意を突いたため、煙になる暇はないはず。これで決まった。しかし、攻撃を受けた煙男は、煙になって消えた。

「なっ!？」

「これぐらい読めますよ。」

「なんで…?？」

「煙で分身を作っただけですよ。さて、本気を出していきますよ。」

煙男は、そう言うのと煙で自分の分身を数十人も作り出した。

これは……マズイわね……

絶体絶命と思ったとき、強烈な風と一筋の光が煙男の分身を一掃した。

「待たせたな、霊夢」

そこには、白黒の魔法使い、霧雨魔理沙と博麗神社の神、天童拓也がいた。

第七十八話

援助

昨日は情けないところ見せちゃったな。

俺は、雲一つ無い青空を見ながら昨日の失態を悔やんでいた。

確かに、光が消えてしまったのはショックだったが、紫の前であんな姿を見せてしま
うなんて…… 布団の中で枕に向かって叫びたいレベルである。

まあ、考えていても仕方ない、とにかく光の件は切り替えていかないと。

そう心の中で結論ずけて、もう一度青空を見ると何が見える。あれは………

「お兄ちややあああああんん!!」

飛んできたのは、我が妹の天童陽菜だった。飛行速度を上げ過ぎ止まれなくなり俺の
お腹へ突っ込んできた。

そのまま、後ろに吹き飛ぶ。

凄く、痛かったです。



「で、どうしたんだ？」

少し、落ち着いてから陽菜に要件を聞く。あの慌てよう、そうとうな事があつたはずだ。

「妖怪が現れたの！」

「？。そりゃあ、幻想郷には妖怪が沢山いるからな。」

「そうじゃなくて！異変を起こす妖怪が現れたの！今、霊夢さんが戦ってるの！！」
「なっ！また異変!?!」

昨日の今日でまた異変とは、迷惑極まりないな。

「とにかく、魔理沙さんと呼んで「私ならここにいますぜ。」わっ!?!」
「あれ？魔理沙帰ったんじゃないのか？」

いつの間にか今日の朝一に自分の家に帰ったはずの魔理沙が戻ってきていたのだ。俺も正直ビックリした。

「何かおもしろそうな匂いがしたから戻って来たんだぜ。それで、異変なのか？」

「おもしろそうな匂いって…… お前の鼻はどういう仕組みになってんだよ。ああ、異変だそうだ。」

「よっしゃ！腕がなるぜ！」

「なんでお前はそう元気なんだよ？」

こっちは、昨日の件で疲れてのに………これが若さか………

「どうしたの？お兄ちゃん。顔がどんどん老けていつてるよ。」

「いや、若さっていいなと思って。」

「何言ってるの？それよりも霊夢さんがピンチなの！早く行くよ！」

「ハイハイ。」

「今度こそ私がぶっ飛ばしてやるぜ！」

あの鬼巫女さんなら大丈夫だろう。そう思いながら、陽菜の後について行った。



陽菜について行き、たどり着いたのは人里と呼ばれる場所だった。

その中心で、赤と白の巫女装束に身を包み特徴的な大きなリボンを着けた霊夢と執事のような格好をし体を煙にしている妖怪が戦っていた。

煙の妖怪が少し押し押し気味で霊夢は苦戦しているようだ。

不意打ちを仕掛けても、なかなか攻撃が当たっていない。

しばらくすると、煙の妖怪は煙で自分の分身を作り出し霊夢を取り囲むように位置どった。

あれはやばいな……。早く助けないと。でも、煙になって物理攻撃が全然効いて無さそうだし……。あつ、そうだ。

「アビリティコピー能力模倣 コピー模倣対象 あや「文」。魔理沙！一発ぶちかますぞ！」

「おお！恋符「マスターズパーク」!!」

「風符「風神一扇」!!」

極太のレイザーと吹き荒れる暴風が煙の妖怪を次々と吹き飛ばし残り1体にした。

「待たせたな、霊夢。」

さて、ここからは俺のステージだ!!

第七十九話 煙の妖怪

さてと、アイツが異変の主犯かな？

俺は、こちらを睨んでいる執事服の妖怪を見る。丸メガネの奥には、余計なことしやがってと言いたげな瞳が映っていた。

「貴方は、何者ですか？」

「人に名前を聞くときは、自分から名乗るのが礼儀だろ？」

「これは、失礼。私はグレイ・スモークといいます。この度は、妖怪の自由を求めて異変を起こしております。では、貴方のお名前を聞いていいでしょうか？」

少し挑発をして怒らせようと思ったが、失敗のようだ。

「俺は、天童拓也だ。一応、博麗神社の神だ。」

「成程。今、この幻想郷で一番の強敵ですね。なら、あなたを倒してしまえば私の夢は達成される。」

おいおい、簡単に言ってくれるね。ここは、ビシツと言わなきやな。

「そう簡単にやら」ちよつと待て、お前を倒すのはこの魔理沙様だぜ！」

魔理沙さん、今、俺が喋ってるんだけど……

「貴女には、用はありません。皆さん出番ですよ！」

グレイがそう叫ぶと、どこからか大量の妖怪が出てきた。一体どこから出てきたのやら。大量の妖怪は、霊夢と魔理沙を囲むようにして引き離していく。

「いいの？仲間全部向こうにやっちゃって。」

「いいんですよ。さて、行きますよ！」

面倒臭いが、しょうがない。そう、覚悟を決めて迫り来るグレイを見た。



とりあえず、相手が煙の能力ってことは、分かっているから、文の能力『風を操る程度の能力』をコピーして迎え撃つ事にした。

「風符「ウイングブレード」。」

カマイタチを利用して風の刃を作る。白と薄緑色の刀を振り煙をなぎ払っていく。

「やりますね。煙符「砲煙弾雨」。」

相手もスペルを発動してくる。煙の弾丸が雨のように降り注いでくる。それに、向かって薄緑色の刀を振る。風の刀は、形を変え、まるで生きているように動き弾丸を次々と切り裂いてゆく。

そして、そのまま後ろに浮かんでいるグレイ・スモークに向かっていく。

「くっ！」

とつさに煙になり回避をして、後ろに回り込んでくるが振り向きざまに蹴りを繰り出し吹き飛ばす。グレイは、そのまま家に突っ込むがすぐさま体を煙にし、機会をうかがってくる。

「なあ、もう降参しないか？」

煙になり姿を見ることのできないグレイに向かって言葉を投げかける。反応は無い。ここで降参してくれれば、楽なんだけどな……

「ここで諦めてなるものですか！」

グレイは、完全に不意をつき、後ろに現れ煙の刃を突き刺した。勝った。そう思ったグレイだったが、その考えは一瞬で否定された。

それもそのはず、俺の体が煙になり消えたからである。

実は、グレイが家に突っ込んだときに、コピー対象を変えて煙の分身を用意しておいたのだ。

「なら、容赦しないからな。」

「なんなんですか!?! 貴方は!!」

「最初に言つたろ。博麗神社の神様だつてな。」

そして、俺は戦いを終わりに近づけてゆく。

第八十話 黒い痣

「いくぜ!!基本能力アップパラメータ(光速ライトニング)。」「

自身の出せるマックススピードで、グレイの後に一瞬で回り込み蹴りを繰り出す。スピードに全くついてこれないグレイは、そのまま吹き飛ばされ人里の外の森まで吹き飛ばされていき木々を倒していった。

「くっ! 一体なんなんですか、この力は!!」

「言っただろ? 手加減なしだって。」

「なっ!?! いつの間に!!」

「オラっ!」

光速で次々とダメージを入れていくが、途中で煙となり逃げられてしまう。

「お返しです！煙符「砲煙弾雨」!!」

煙から実体化し負けずとスペルを発動してくる。さつき発動した時よりも、1つ1つの弾が大きく数も多い。

これをよけるのは、骨が折れそうだ……よけないけどね。

「変更（反射）。」

チェンジ リフレクション

（光速）から（反射）に切り替える。すると、煙の弾丸は俺の体に当たるギリギリの所で進行方向を反転させて、グレイの方へ返ってゆく。

初めて使ったけど、いいなこれ……ちよつと強すぎな気がするけど。

自分が放った弾丸が全て返ってきたことに、グレイは一瞬戸惑いを見せたがすぐに体を煙にして回避をした。

いい加減あの煙になるの鬱陶しいな。煙の成分から破壊してやろうかな。

「変更（破壊）。」

チェンジ デストロイ

また、変更をする。今度は（反^{リフレクション}射）から（破^{デストロイ}壊）だ。ここからやることは単純なことだ。拳を握り締め煙を殴る、ただこれだけだ。すると、グレイは煙から実体に戻り吹き飛ばされて行った。

「煙自体にダメージを与えられればいいと思ってやってみたが、どうやら成功のようだな。」

「くっ、くっそおおおお!!」

グレイは、狂ったように叫び分身を作り出す。その数、百人、千人……いや、もっと多い。

気づくと上を見ても下を見ても、右を見ても左を見てもグレイ・スモークだらけである。

気持ち悪い……と言うかこの数を相手にするのはメンドクサイな。じゃあ、キャンセルさせましょう。

「アビリティキャンセル
能力解除。」

その一言の言葉と共に数千、数万にいたグレイの煙分身は一瞬で消えてしまった。
アペリテイキャンセル
能力解除名前通り能力の解除だ。これで邪魔な煙人形も消えたな。

「んじゃあ、ラストにしますか。それじゃあ……………歯あ食いしばれ!!」
「くつ、がああああ!!」

一瞬で移動しグレイの顔面に拳を叩き込む。特徴的な丸メガネは砕けちり、そのまま地面へ落下していった。

これで、おしまい。そう思った時だった。突如、グレイを殴った右手に黒い煙が立ち、その煙の中から黒い鎖が飛び出した。右手首に絡まるようにして黒い鎖が巻き付いたのち、黒い鎖型の痣を残して消えた……………何なんだこれは？

「くつくつくつ……………あつはつはつはつは!!」

「テメエ！何しやがった!!」

「呪術「黒鎖封印」。これは、貴方を苦しめるでしょ。今回は引きますが、次こそ幻想郷を開放させてもらいます。では、ご機嫌よお。」

「待てえ!!」

俺の静止を聞かずにグレイ・スモークは、煙となつて消え失せた。こうして、異変は俺の右手首に奇妙な痣を残して終了した。

第八章 現世復帰編

第八十一話 今の力

「で、何かわかった？ ゆかりん」

「ゆかりん言わないで。呪術の類だと思っけど……… どんない力かまでは………」

紫も分かんないじゃ完全に手ずまりだな。本当になんなんだろうな、コレ。俺は、右手首の痣を見る。この前の異変、黒煙異変の首謀者グレイ・スモークによってかけられた呪い。どんな呪いなのか……

「アンタの能力で解除出来ないの？」

「あつ、その手があつたか」

「気づいていなかったのぜ!？」

いやー、自分の能力の事なのにすっかり忘れてたぜ。では、さっそく

「アビリティキャンセル
能力解除」

しかし、何も起こらない。

「あれ？おかしいな…… もう一回やるか。能力解除」

「アビリティキャンセル
能力解除」

しかし何も起こらない。

「何故だああああ!!」

「霊夢さん、どうしましょう」

「私には関係ないわ」

「霊夢さん、あなた結構酷い人ですね。それにしても、能力が封印されたのかな……
試してみるか。」

「魔理沙」

「ん？なんだぜ？」

「弾幕ごっこしないか？」



「それじゃ、行くぜ」

「おう」

能力は、何が使えるか何が使えないかを見るために魔理沙を実験相手に行かした。魔理沙の方はやる気満々のようだ。ちよつと、怖い。

「それじゃ、行くぞ！基礎能力アップパラメーター（攻アタック）（守プロテクト）（速スピード）」

移動速度が上がる。どうやら基礎能力アップパラメーターは、問題ないみたいだな……よし、レベルを上げてみるか……あれっ？レベルを2、3と上げようとしたが上がらないのだ。おつかしいなー

「どうした？ぶつぶつ呟いて、よそ見してたら怪我するぜ！魔符「スターダストレヴアリ
エ」!!」

「つつ?!アビリティキャンセル能力解除……… だあ!くっそ!!」

魔理沙がスペルを発動し、無数の星が降ってくる。アビリティキャンセル能力解除で解除しようとしたが
発動せず無数の星が降り注いでくる。本当に何なんだよ!あつ、やべえな。よけきれな
いわ、コレ

「お願いだから発動してくれ!アビリティストップ能力停止」

俺の必死の思いが通じたのか、元々使えたのか分からないが、無数の星は空中で停止
した。

危なかったー、死ぬかと思ったわ……… あつ、この星甘い。金平糖みたいだな……
スペルの外まで避難し能力を解く。向こうで魔理沙が卑怯だーって叫んでるけど、気
にしない気にしない。

さてと、やった感じでは上位技が使えなくなってるな。

上げていくなら、まず基礎能力アップパラメーターのレベルアップにライトニング(光速)リフレクション(反射)デストロイ(破壊)が

使えない。あと、アビリティキャンセル能力解除も使えないな…… あつ、あつちはどうだろう。

「獣符クリイチャーハンズの腕」

足元の影が浮上がり右手に巻き付き、黒くゴツゴツし、赤い爪を持つ手に変化する。
妖力こっちは、無事みたいだな。

（久しぶり、拓也お兄ちゃん）

「おつ、もしかして聞か？」

（そうだよ。もう、酷いよ、私のこと忘れてたでしょ？）

「…… わ、忘れてないよ？」

（あくっ！今の間はなに？）

「気にするな」

（気にするよ！）

「そんな事より、力が抑えられたりして無いか？」

（そんな事って…… うん、特になんともないよ）

「そっか、わかった。闇ひと暴れするぞ」

(おー!!)

右手に力を込めて魔理沙に接近し拳を突き出す。しかし、するりとかわされ地面にぶつかる。地面に大きなクレーターを作り出す。

「なっ!?何なんだぜ、その力!?!」

(「妖力」)

「妖力!?ちよつと、紫!あの神様なんで妖力まで持ってるのよ」

「そういえば持ってたわね。昔のこと過ぎて忘れてたわ」

「ハハハハ、お兄ちゃんどんどん人間離れしてるな……」

「これは、まずいな…… いっきに決めるぜ!恋符「マスターパーク」!!」

魔理沙がスペルを発動し、七色のレーザーが飛ぶ。

「陰符「シャドーブラスト」」

こちらも負けずとスペルを発動。黒い影がレーザーのように放出される。

そして、七色の光と黒い影衝突した……………



「いててて！」

「あつ！、魔理沙さん動かないでください！」

「くつそく、行けると思ってたんだけどな……………」

「若いもんには、まだ負けん」

「アンタのお爺さんみたね」

今は、博麗神社で怪我の治療をしている。まあ、結果だけ言えば俺の勝ちだ。結構ヒヤヒヤしたけどな…………… まあ、そのおかげで能力の状況もだいぶ分かった。

取り敢えず、神力が全て抑えこまれてる。これによって神になってからできるようなった事が出来なくなっている。それに、前よりも霊力も低下しているところから『能力を操る程度の能力』の力が低下していた。特に問題なのは能力模倣アビリティコピーだ。なんで、3分しかコピーが持たないの？弱体化しすぎだろ！

「そう言えば、神力が無いならあなたは人つてこと？」

「えっ？ええ、どうなの紫」

「そうね、厳密にはちよつと違うけど、ほぼ人と言っていると思うわ」

マジか、神から人へランクダウンか……

「ねえ、師匠」

「ん？」

「元の世界に戻らない？」

「……へ？」

どうやら、まだ何かあるようだ……

第八十二話 帰宅②

「ねえ、師匠」

「ん？」

「元の世界に戻らない？」

「……へ？」

「元の世界？ どういうこと？」

「元々、師匠は幻想郷の外の住人なんでしょ？」

「まあ、そうだな」

「なら、ほぼ人間に戻った今なら戻っても問題はないかと思うんだけど」

「いや、それ以外に問題あるだろ。向こうじゃ俺は、死んだことになっているはずだし」

「え？ お兄ちゃんは、行方不明扱いだよ」

「えっ？ そうなの？」

「そうなの」

まじか…… どうなってるんだ？ まあ、いいか。みんな元気かな？ あつちは、たいして時間は、たつてないんだけど。

「じゃあ、一回帰ってみるか。能力模倣模倣対象^{アベリテイコピーコピー}「紫」」

紫の能力をコピーし、境界を開く準備をする。

「なっ、ちよつと待つぜ！」

「うん？ 何だよ魔理沙。3分しかないから急げ」

「いや、もう行つちやうのかと思って。もう少しゆっくりして行ってももいいのに」

「あんた寂しいだけでしょ」

「う、うるさいんだぜ！ 霊夢は黙ってくれ！」

「うゝん。善は急げって、ことわざがあるしな。それにもう会えない訳でもないしき、また暇なときに来るさ」

「うう、わかったぜ」

「それじゃ、世話になったな」

「皆さん、お世話になりました」

軽く挨拶をし境界を開く。空中に空いた不自然な隙間に俺たちは、歩を進めた……



「家に帰って、キターー!!」

「お兄ちゃん、うるさい。近所迷惑だよ」

うう、久しぶり帰ってきたんだから、これぐらいのテンション許して欲しいな

「そう言えば、俺が行方不明になってから、どれだけ経ったの?」

「えっと、だいたい一ヶ月と少しぐらい」

「じゃあ、俺が居なくなつたのが三月終わりだったから、今は五月ぐらいか」

あゝ、出席日数やばいかもな……先生、プリントでどうにかしてくれないかな……

「ちなみに、今はゴールデンウィーク中です。あつ、もう今日で終わりだった」「なん、だと……」

じゃあ、明日から学校行かないといけないだと。嫌だ行きたくない!!

「それよりも、お兄ちゃん。髪の毛切らないの?」

「えっ? あつ、あゝ、切らなくていいわ」

陽菜が伸びきつた俺の髪を指摘してくるが、別にうちの学校は別段そういうのに厳しい訳でもないし、長いことこんな感じだったからないと落ち着かなくなる……と思ふ。まあ、ゴムで纏めるだけ纏めとくかな

「明日も早いし、今日は早めに寝よっか」

「えっ、嫌だよ。溜まったアニメを消化しないとイケないし」

「お、に、い、ちゃ、ん？」

「怖っ！分かった、分かったからその黒いオーラをしまってください」

仕方ない。夜中にこっそり見るか……

この後、アニメを見てるのを見つかって説教を喰らいました。正座で2時間ほどね。足が痛いよ……

第八十三話 学校へ行こう

学校。それは、同学年の生徒と共に様々な知識を学び、コミュニケーションをとり友情など育むための施設の^{スペース}である。現代の社会では、学校での成績や出身校がその人の価値となる。

そんな、現代の社会に俺は言いたい……

「滅びろ!!」

「止めてよ、本当に滅ぼしかねないから」

朝。今日から、数ヶ月遅れて高校に入ることになる。その為に少し早く学校に行かなければならない。しかし

「遅刻だああああ!!」

昨日の夜更かし&説教のせいで完全に寝過ぎた！ヤバイ、ヤバイ残り5分という間合うか微妙な時間だが俺の身体能力ならなんとかなるかもしれない。

食パンを加えてダツシユする俺。きつと次の曲がり角で俺のラブコメのヒロインとぶつかるんだ！えっ？ぶつからない？知ってた（・ω・）。



「で？登校初日から遅刻した理由を聞こうか？」

只今、天童拓也は職員室にいます。そこで、遅刻した事をスーツをピシッと着て眼鏡をかけた女の先生に怒られています。怖い。

「まって下さい先生！これには山よりも高く、海より深い理由がありました」

「ほう、ではその理由を聞こうか」

「実は、食パンを食わえて、遅刻といいながら走ればヒロインぶつからないかなって思ってた、車とぶつかりまして……」

「成程、事故にあつて遅れたと」

「はい、分かっていただけたでしよ「ただし、遅刻したことに違いはないな？」ちよ！先生!!俺の関節きまつてる！きまつてますつて!!俺の関節はそちら側には行きませんから!!!」

何この人!?力入れても振りほどけないんだけど!化け物なの?化け物だろ(確信)。てか、事故にあつたことはスルーかよ!そういえば、あの車物凄く高そうだったな。凹ましちやつたけど.....

「まあまあ、水戸先生そのへんにして」

「……わかりました、神薙先生」

現れたまともや女の先生の言葉により水戸先生腕力お化けから開放される。神薙先生マジ女神(確信)。

「あなたの担任の神薙巫月かななぎみつきよ。よろしくね天童君」

「よろしくお願ひします」



「はい、みんな今日から遅れてこのクラスの仲間になる子を紹介します」

神薙先生のいきなりの言葉で教室内がざわつく。

「それじゃ入って来て」

「はっ、はいっ！初めまして、天童です。よろしくお願いします」

クラス中から歓声と拍手が飛ぶ。明るい感じだな、これならやって行けそうだ。

「はい、はーい！先生！」

「あら？どうしたの楠君」

楠と呼ばれた少し赤みがかった髪の毛のガタイのいい少年が手を上げる。

「なんで、その子は女なのに男子用の制服着てるんですか？」

クラス中から、「あつ！」や「本当だ」みたいな声が飛び交う。確かに俺は顔が中性的だし髪も長いだが、しかしな…………

「俺は、男だああああ!!!」

この声は学校中に響いたらしい。



「俺は、男だああああ!!!」

その叫び声で私は、目を覚ました。今やっていることは……………なんだっただけ？昨日も拓也のことを考えていてよく眠れなかつたせいでまだ眠い。しかしその眠気は、一気に吹き飛ぶことになる。目の前にいるのだ、天童拓也が。

えっ!? なっ、なんで!? 脳の理解が追いつかず混乱する。そして、同時に声をあげてしまった。

「拓也 ああああ!!!」

「へっ!? あっ! こ、言音 ええええ!!!」

消えたはずの幼なじみが突然現れたのだった………

第八十四話 帰り道

終わったああああああ!!

チャイムとともにS H Rが終了し先生が教室から出ていく。俺は欠伸をしながら体を伸ばす。ここ数年じつと座っている事が無かったので体が凝り固まって仕方がない。

「拓也く帰ろうぜく」

今日、仲良くなつた男子の楠陸斗くすのきりくとが、声を掛けてくる。少し赤ぼつち茶髪になんとも羨ましい身長、そして帰宅部（らしい）なのに以上に発達している筋肉。何でそんなムキムキマン何だよ！普段はガタイがいいな程度にしか思つてなかつたけど体育の着替えの時びっくりしたわ。

特に断わる理由がなかつたので承諾し一緒に玄関へ向かつた。



話しているとなんと、楠と俺の家が案外近所という事が判明しほぼ一緒の方向で帰る。それにしても……言音の視線がいたい、後ろから付けてきてるんだよな。今日、朝からずっと見られているんだよなあ、何なの？俺のこと好きなの？えっ？それは無い？知ってた。

「そーいや、拓也は化野と仲いいの？」

不意に楠が質問を投げかけてくる。朝の事があるから知り合いなのは間違いと見られているはずだからそれについて聞いているのだろうか。だが別に仲がいいかと聞かれると、それもどうだろうと思う。

「いや、別に特別良くはない。ただの幼馴染だ」

そういつた瞬間、バキバキと音が聞こえた。気のせいだよな？

化野言音さん？さつきより目が怖いのですが……あとその隠れている電信柱が少し欠けているように見えるのは私めの見間違いでしょうか？女の子にそんな力無いもんね。あつ、でも霊夢とか出来そうだな……

というか、何か言いたいことあるならこっち来いよ！無言の圧力やめて！怖いよっ！誰か助けてっ！

「あつ、お兄ちゃん」

「ん？あつ、陽菜」

マイエンジェル降臨!!陽菜に言音をどうにかしてもらおう

「陽菜、あそこに言音いるだろ」

「居るねえ、凄い形相でこっち見てるよ。お兄ちゃん、押し倒したりでもしたの？」
「してねえよ!!何言い出すんだお前は！」

「冗談だよ、お兄ちゃん。つまりお兄ちゃんは、言音さんをどうにかして欲しいんでしょ？任せておいて」

これで言音はどうにかなるな。ありがとう陽菜。家に帰ったらお前の大好物を作つてやる。確か大好物は筑前煮だったけ？なんか渋いな…

「なあ拓也、あの子って…」

「陽菜か？俺の妹だ」

「お兄さん！妹さんをください!!」

「誰がお兄さんだ!!それと妹は、やらん!!!」

こうして学校生活一日目は終了した。

第八十五話 手紙

どうも、天童拓也です。

皆さんは、どんな手紙をもらったことがありますか？

遠くの友達とのやり取りで？年賀状で？それともお礼状で？

さて、私めの下駄箱に手紙が入っていました。これは、なんと手紙でしょうか？

「それって、ラブレターじゃねえ？」

「うおっしやああああ!!!」

ラブレター、それは男子の憧れ。何コレめっちゃ嬉しい。

「転校して一週間でラブレターとか拓也も隅に置けないな。いいな、俺も彼女欲しい。という訳で妹さんを俺に下さい、お兄さん！」

「という訳でって、どういう訳だよ！何度も言うが妹はやらん!!というか、まだ諦めてなかったのかよ」

「あきらめが悪いのが俺だからな。その手紙見せてくれよ」

「うん？ああ、いいけど」

手紙は、天童拓也さんへと書かれた封筒に入っていた。

手紙の内容はこうだ

『天童拓也さんへ』

お話したいことがあります。もしよろしければ、放課後5時に屋上へ来てください。お待ちしております。』

名前が書いてないから誰から送られてきたか分からないがめっちゃくちゃ綺麗な字だな。てか、めっちゃ達筆だな。でも、何かこの字、見たことあるんだよな

にしても、どんな子だろうな……可愛い子だったら嬉しいな。

そしたら、今日から俺はリア充だ!!

彼女……彼女かあ……

「彼女かあ……いいな……」

「そうだな」

「可愛い子だったらいいな」

「そうだな」

「昨日の宿題難しかったな」

「そうだな」

「妹さんを俺にくれるんだな」

「そうだ、つて騙されるか!!」

「くっそお！惜しい!!」

「惜しくねえよ!!」

あぶねえ… 流れに流されるところだった…

「でもさあ、これって本当にラブレターなのか？」

「楠、何いってんだよ。ラブレターの定番の書き方じゃねえか」

「いや、でも… 普通、封筒を閉じるのにドクロのシール使うか？普通は、ハートとかじゃねえ？」

確かに…

いや、希望を捨てたちやダメだ!! 諦めるな! 俺!!



く放課後く

4時30分

早く来すぎた……………

落ち着け、落ち着け。男、天童拓也!! ここで逃げたら意味無いぞ!!

ああ、本当に来るのかなあ? なんか罰ゲームとかで送ったとかなしにしてくれよ。

そう葛藤していると、屋上の扉が音をたてながら開かれた。

来た!!

そう思い、扉の方を向いた。

そして、目が合った。化野言音と。

「良く来たわね、拓也」

「……」

「ちよつと待ちなさい！何フェンス越えて逃げようとしているの？危ないから登るのやめなさい!!」

「い、いや。ベベ別に、にににに逃げよう何て」

「動揺しすぎよ!!」

だって、コイツは俺が死んだの見てるじゃん！明らかに俺の存在不自然じゃん!!
説明出来ねえよ！出来ても信じてもらえねえよ！

「単刀直入に言うわ。あなた、本当に拓也なの？」

「そうだよ」

「嘘！拓也はあの日に消えた!!」

やっぱり、そうなりますよね……

「消えてねえよ。だからここに居る」

「じゃ、なんでこの一ヶ月学校に来なかったの？」

「そ、それは…」

「ほら答えられないじゃない。この一ヶ月家にも居なかつたみたいじゃない。陽菜ちゃんもすつごく心配してた。私も……。答えて、貴方は本当に拓也なの？」

真実を全て話すべきか俺は迷った。だが、陽菜を巻き込んでしまった。これ以上人に迷惑はかけれない。

「ああ、確かに俺はあの日トラックに轢かれて消えた。だか、俺は天童拓也だ。誰がなんと言おうと俺は、俺だ。」

「じゃ、消えた理由を答えてよ」

「無理だ。お前を巻き込みたくない」

「どうしてもダメなの？」

「ダメだ」

「……………」

「……………」

少しの間、沈黙が続く。

「分かったわ」

「いいのか？」

「拓也の事だから何かあるんでしょ？ならこれ以上聞かないわ」

「すまん」

「その代わり、近くの喫茶店の新作ケーキ奢りなさい」

「はあ？何でそうなるんだよ!!」

「陽菜ちゃんと楠君も誘おう。勿論拓也の奢りね」

「ちよつと！待って！」

こうして、俺の財布の野口さんが数人消えたのであった……

第八十六話 勉強そして、テスト

「勉強を教えてください」

7月中旬

少しづつ夏らしく暑くなってきた日だった。

俺は幼馴染の化野言音にそう頼む。

ハッキリ言って勉強は苦手ではない（英語以外）。それこそ、そこそこ上の方のレベルであるとは負している（英語以外）。

しかし、俺は1ヶ月ほど学校に来ていなかったことになっている為、基礎がほとんど出来ていない。基礎が出来ていなければ、勿論応用なんて出来るわけがない。

なのにテストがあと2週間後に控えているのだ。

赤点を取った生徒は夏休みに補修に来ないといけないらしい。それだけは勘弁して欲しい。夏休みに遊べないなんて死んでしまいます。

「いいけど。私、文系しかみれないよ？」

あつ、そうでした。この子、文系の科目は学年一桁に入るくせに理系はてんでダメな子だったわ……

「それでもいいので！ぜひ!!」

「じゃあ、放課後にあんたの家に集合ね。あつ、私の友達もつれて来ていい？」
「いいぞ」

よおし。頑張るぞい!!!



「ただま〜」

「おかえり〜」

家に帰ると陽菜がテレビに視線を向けたまま返事をしてきた。

「今日うちで勉強会するから」

「えっ？お兄ちゃんが勉強？……………熱でもあるの？」

「失礼だな、おい！」

確かにいつも全然して無いからしょうがないか……………

数分して言音達が家に来た。

「「お邪魔します」」

友達って、海堂の事だったのか。

海堂蘭、俺の同級生でクラスメイトの一人である。長い髪をポニーテールにしており、胸は言音よりも数段デカイ……………うむ、けしからんな!!（歓喜）

まあ、言音はほとんど無いようなもんだけど……………

「今何か変なこと考えなかった？」

「いえ、何も考えておりません!!」

一瞬、絶対零度の視線を向けられ冷やっとしたが何とかごまかせたようだ。

「いや〜ゴメンね。私まで押し掛けちゃって」

「いや、別に構わないぞ。それじゃ、勉強会を始めますか」



カリカリカリとペンが走る音が止まる。

「ダメだ！分からん!!」

「早っ！まだ、10分しか経ってないわよ!?!」

「私もダメえ〜」

「蘭まで!?!」

もう分かりません。英語なんて出来ません。

I can't English.

「だいたい、俺たちは何故英語なんてやってるんだ！日本人には日本語という素晴らしい言語があるじゃないか!!」

「そうだそうだ！」

「屁理屈いわないの!! 2人とも楠君を見習なさい！」

「えっ? うおあ!! お前いつから居た!?!」

横をみると、勝手にベッドに寝転がって勉強をしている楠がいた。

「えっ? 最初からいたけど?」

「まじか、全然気づかなかった」

コイツは忍びか何かか?

この後何やかんや騒ぎ、勉強会は終わった。



テスト点発表日

天童拓也

58位

国68 数76 英35 理95 社92

「うおっしやあああああ!!!赤点なし!!」

何とかピンチを切り抜けた。助かったあ。

「何とかなったみたいね」

「お蔭さまでね、言音は?」

化野言音

28位

国98 数58 英99 理64 社96

「お前ホントに理系を頑張れよ!」

「私が1番分かっているわよ！」

コイツ、理系出来たら本当に1位とか目指せるんじゃないやねえかな？

「おっ！二人共どうだった？」

「何とかなつたぞ」

「私もよ」

「海堂は？」

海堂蘭

101位

国100 数31 英32 理34 社33

「「国語100点!」」

「ふっふくん、どや!凄いでしよう」

「まあ、それ以外が残念すぎるが……………」

「それは言わない約束でしょ!」

わ。むくつと海棠がむくれる。にしても100点って取れるもんなんだな。初めて見た

「そう言えば、楠君ってどうだったのかしら？」

「あつ！それも気になる！私と同族だったりして」

「じゃあ、楠に聞いてみようぜ」



「テストの点数？別に見せてもいいが面白くないぞ？」

「勿体ぶらずに見せてくれよ」

「まあ、いいけど」

楠陸斗

1位

国100 数100 英100 理100 社100

「「……………」
おう」」

全員して言葉を失った。これは何かのネタかな？

「ひどい、楠はこっち側だと思ったのに！」

海堂が、叫び。

「まさか、あの楠君が……………」

言音がボソボソと独り言を呟き始めた。

そりゃ、そうなるわな。

ほんとと人生何があるかわからないな……………」

第九章 紅魔編

第八十七話 暑い日、赤い霧

夏休み。それは学生達の最高の時間である。

学生達は、友達との友情を深めたり、恋をしようとしたりとそれぞれのやり方で夏休みを楽しもうとするはずだ。

そんな中、天童拓也と言うと……………

「あつい」

「そうね」

縁側で妹と巫女さんとダラ〜っとしていた。

ミーン、ミーンとセミがやかましく鳴くこの季節。俺と陽菜は博麗神社に訪れていた。

理由はエアコンが故障した。

なんでこの時期なんだよ！冬でも困るけどさ！

とにかく、あんな暑い空間にいたら死んでしまいうさだだったので、山奥である？ここに来て。山奥って妙に涼しいからな。

ただ、暑いのは変わらない。陽菜なんてさつきから一言も喋ってない。ただ、だらうってしていて、そのうち溶けてスライムになりそう。後で固めておかないとな……………

霊夢は相変わらず涼しそうな格好をしている。あれ？冬でもあんな感じだったよな？寒くないのか？

「来るのはいいけど、ちゃんとお賽銭入れて行ってよね」

「やだよ。神様がいない神社なんてお参りするだけ無駄だろ？」

「誰のせいだと思ってるのよ！ねえ、二元神様？」

俺のせいじゃねえよ！恨むなら、あの煙の執事野郎に言えよ！！

だいたい、元々参拝客少ないだろ！立地も悪すぎるんだよ。なんでこんな所に立てたんだよ！あつ、村を守るためにしたんだっけ？

博麗神社について考えていると頭が回ってきていないのがわかった。暑さでついに脳がショートしたか？だんだん意識が遠くなっていくのを感じる。

ああ、涼しくならないかな……………

そんな事を思いながら、俺はそのまま眠りについた。



「寒っ!!」

異様な寒さで目が覚めた。あれ？今夏だよな？幻想郷って季節まででたらめなの？しかし、それは違った。空一面に紅い霧がかかっていたのだ。紅い霧が日光を完全に遮断してしまい温度が下がったのだ。

「さすが幻想郷。常識に囚われないな」

「これが普通のわけないでしょ？」

「つまり？」

”異変”よ」

岩雨異変や黒煙異変が脳裏に浮かぶ。本当にみんな異変大好きだな。

まあ、博麗の巫女の霊夢がみんなのため異変を解決してくれるだろう。

「はあく。これじゃあ洗濯が乾かないじゃないの。仕方ない異変の首謀者をしばきに行ってくるわ」

自分の為でした。知ってましたよ、霊夢がこういう奴だつて。

「それじゃあ、行ってくるから留守番よろしく」

「別に盗むようなものないだろ？」

俺のポケを無視して霊夢は紅い霧の向こうに消えていった。

さてと、俺も……………

お腹減ったし飯でも食べるか。

第八十八話

紅い館に侵入したら閉じ込められた件

「それで？お兄ちゃんは、霊夢さんが異変解決に向かったのに呑気におにぎりを食べていたの？」

天童拓也は、ただ今妹である天童陽菜に正座をさせられています。理由は異変解決に向かわなかったことである。

「呑気にとは何だ！食事は大切だぞ！腹が減っては戦は出来ぬと昔の人は…「黙らしゃい」はい」

何か、陽菜が最近たくましく見えるよ。幻想郷でのことが（悪）影響になってるのかな？

「とにかく、お兄ちゃんは一刻も早く霊夢さんのところに行くこと！」

「ういゝ」

「返事は、ハイかY e sですること！」

それもう拒否権ないじゃん。



ただ今、空を飛んでいます。

霧が出ている（ぼい）方へ飛んでいると、何やら前方から黒い球体が飛んできた。

「わはー」

俺はその黒い球体を……………

躲してスルーした。

さて、こっちで合ってるのか？



しばらく飛ぶと、でっかい紅色の屋敷が見えた。あんな場所に建物あつたけ？
そつと、屋敷の近くに降りた。周りに人はいなさそうだ。

それよりも、この屋敷から紅い霧がガンガン出てきてるんですけど！まさか、ここだったとは……………

勘で飛んできただけなんだけどな。

とりあえず、どつかに入れる場所がないか探す。

ひと昔前なら、正面から突っ込んで行つたが今は流石にそんな事はしない。俺のモツトーは「いのちだいじに」だからな。

しばらく探していると小さな小窓を見つけた。とりあえず、あそこから侵入は出来そうだ。

空を飛び小窓から屋敷の中に入る。すると、小窓が消えた。

あれ？これももしかしくなくても閉じ込められたんじゃないやねえ？うそだろ？

何度も何度も確認するが、小窓のあとは見つからない。

ほんと出来心だったんです！許してください！！

誰に誤っているかわからないと思うが、俺も分からない。とりあえず逃げ道がなくなつたことだけは分かつた。

その場所は諦め、ほかの出口を探すことにした。

この紅い屋敷は、中も”紅”の一言だった。極端に窓が少なく、屋敷の中には多くの炎で照らされていた。壁も、床のカーペットも、天井に至るまで”紅”だった。

この屋敷に住んでいるやつ絶対趣味悪い。そんな気がしたのは気のせいではないだろう。

しばらく歩いてみるとあるものを見つけた。

「なんだここの？地下への道？」

紅い屋敷にぼつんとそれはあつた。コンクリートのような、ねずみ色の壁と階段が地下へ続いていた。

闇の中に続く階段をゆっくりと下っていった。

しばらくすると、金属の扉で閉じられた部屋があつた。

ドワノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開く。

ギギギギと重々しい音をたてながら扉は開いた。

そこには、少女がいた。

紅い瞳に輝く金の髪、左右に宝石のような羽を持つ少女だった。
少女は、こちらを向き無邪気な笑顔で言った。

「アナタが新しい遊び相手？」

狂気に満ちたその笑顔で……………

第八十九話 狂気

「アナタが新しい遊び相手？」

紅い目の少女の問に対して俺は……

「いいえ、違います」

即座に否定した。

だって、オモチャにされたら、たまんないし。ここは、逃げる一択だ。

「では、俺はこれで——」

「逃がさないよ♪」

「ですよね〜」

逃げようとした俺を紅い目の少女は追いかけてきた。

ちよ!!速い!!

扉を蹴飛ばし階段を駆け上がる。

ふと、後ろをみると少女が手を突き出していた。

「きゅとして〜」

ぞくつと嫌な感じがした。生命の危険を感じ地面を全力で蹴る。

「どかーん!!」

少女が掛け声に合わせて手を握ると、さっきまで俺が立っていた場所の床が粉碎した。床だった物が周りに飛び散る。

なに!なに?なに!!なに!?

床が消し飛んだんだけど!!危なっ!!殺す気満々じゃん!!

天童拓也、死にたくなければ、とにかく逃げろ!!

後ろからは少女が笑いながら弾幕を放っていた。

「アハハハハハ!! 凄い凄い!! こんなに壊れないオモチヤなんて初めて!! これならいっぱい壊せるね♪」

「だから、俺はオモチヤじゃなくいい!!」

「アハハハハハハ!!」

「はい、無視ですか!!」

全然、話を聞いてくれない。

こうなりや反撃だ!!

「パラメーター基礎能力アップ (攻) (守) (速)」

影から村正抜き取り振るう。その攻撃はひよいと躲される。くっそ!! 速い、当たらない。

「アハハハハ!! 急に速くなった、凄い凄い♪」

相変わらず少女は笑っている。見てくれは可愛いけどそれは恐怖でしかない。

「禁忌「レーヴァテイン」」

彼女の手には黒色のぐにやりと曲がった物があり、それは次の瞬間激しく燃え火焰の剣になった。

「そ〜れ〜♪壊れちゃえ♪」

「つつ〜熱っ!!」

火焰の剣が腕を掠り傷みが走る。アレをまともに受けたら炭も残らないな……
はあはあ。ヤバい、追いつかれそうだな……ん？

視界の先にメイド服の女の人が壁にもたれ掛かっていた。このままいくと確実に巻き込まれる。こうなったら……

「チェンジ パワー スピード
変更(力)(速)」

スピードに特化させ距離を開ける。そのままメイド服の女の人に向かっていく。

メイドさんに近付いてからお姫様抱っこで拾い上げ、また走り出す。

「なっ!? 貴方は何よ!!」

「説明は後で、今はあれから逃げないと!!」

「あれって——妹様!?!」

「どうやらあの女の子と知り合いのようだ。にしてもこのメイドさんボロボロだな……どうしたんだろ?」

「とりあえず一旦逃げ切りたい。あんたここのメイドだろ? 道案内頼む!! このままじゃ二人揃ってお陀仏だ」

「……わかったわ」

「俺は天童拓也。あんたは?」

「十六夜咲夜よ」

途中で拾ったメイドさん、十六夜咲夜との逃走が始まった。

第九十話 助けを求める・・・

「はあはあ。やつと撒けた。これで安心——」

「動かないで」

「——じゃなかった」

メイドさん。名前はえつと・・・咲夜さんだったっけ？

そのメイドさんに刃物を突きつけられています。

「貴方は何でここにいるの？」

「妹に異変解決に行けと言われ嫌々来しました。拒否権はありませんでした」

「兄としてのプライドはないの？」

「そんな物、命に比べれば捨てるのは容易だ。とりあえず今は協力しましょ」

咲夜さんはナイフを溜息をつきながら話してくれた。

溜息をつかれるような事なんか言っただけ？

「まずは、あの女の子について教えてくれる？」

「あの方はフランドール・スカーレット様。この館の主であるレミリア・スカーレット様の妹よ」

「へえ。そのレミリアアって若いのか？」

「いいえ。吸血鬼ですもの、もう500歳はこえているわ」

「なんだ、（俺に比べれば）全然若いじゃん」

「へ？」

「へ？」

あれ？何か変な事言った？

「まあいいわ。他には？」

「フランドール・・・長いな。フランは、何であんなふうになっているんだ？」

「妹様はお嬢様に長年あの地下室に閉じ込められていました」

「何それ？嫌がらせ？二人は仲が悪かったの？」

「いいえ。お二人共とても仲が良かったと聞いています」

「じゃあ、何？放置プレイ？」

「真面目に聞きなさい」

ものすごい目付きで睨まれナイフも飛んできた。すみません。

「妹様の能力が危険だったからよ。」「ありとあらゆる物を破壊する程度の能力」。妹様はまだ制御が出来ずとても危険だったの。だからお嬢様は大切なものを壊してしまう前に妹様を軟禁したの——」

そこまで話したところで隣の壁が爆散した。

そこにはフランドール・スカーレットが笑顔でたっていた。

「みい〜つけた♪」

「ありや、隠れんぼはもう終わりか」

「呑気な事言っでないで！」

いや、呑気な事言っでないとこのプレッシャーに耐えれないのよ。

「アハハハ♪お姉様、大嫌いなお姉様♪壊してあげる♪何度も何度も壊してあげる♪」
「おい、メイド。本当に仲良かったのか？なんか凄く恨んでいる感じするんだけども……」

「そのはずよ！パチュリー様もそうおっしやっていたし」
「アハハハ、お姉様壊れちゃえ♪」

フランはまるで俺を姉と見立てて攻撃をしてくる。

にしても、この恨み方は半端じゃ無い。俺も陽菜とはケンカぐらいするがここまで恨んだことは無い。

フランはレミリアアって言う姉が大好きだった筈だ。大好きだけど恨んでいる。何とも矛盾した思いだ。

「咲夜は逃げて誰でも良いから止められる奴を連れてこい!!その間俺が何とかする」

「わかったわ。死んだら骨は拾ってあげる」

「死なないように頑張るよ。鈴符レイン・ナイフ「降り注ぐ刃（銀バージョン）」」

吸血鬼に有効と言われる銀でナイフを作り攻撃する。

「アハハハハハ♪」

が、全て破壊される。

「嘘だろ……」

「いい加減壊れてよ。禁忌「フォーオブアカインド」」

フランが発動すると、フランドールが4人になった。

「ちよ!! 4人って無理ゲーだろ」

「「アハハハハハ♪」」

4人つてのフランが次々と襲いかかってくる。一撃一撃が強力で、遂には吹き飛ばされ壁に叩きつけられ床に倒れる。

「リ、^{リカバリエ}回復能力アップ」

回復を試みるが体力はほぼ限界。焼け石にだった。4人のフランが一つにまとまり俺の上に降りた。

「じゃあね、お姉様♪」

そう言つて、俺の胸を貫いた。

ああ、死ぬのか俺はそんな事を朦朧と考えていた。

その時だった、顔に水が落ちた。

涙だった。フランドールが涙を流していたのだ。

「ああ・・・いやあ・・・」

消えそうな声で呟いていた。この時、俺は確信したフランドールはレミリアを好いていた。大好きだった。大好きだが恨んでいた。

だから、恨みなどのマイナスの感情を晴らす為に物を壊していた。レミリアに見立てて。

それが、またストレスになりフランドールを追い込んでいたのだと。

おい、天童拓也。目の前で女の子が泣いてるぞ。救ってやるのがお前の役目だろ。

そう、自分に言い聞かせるが俺の意識は闇に飲まれた。

第九十一話 妖化

「起きろ、おにいちゃん」

「ぐへえ!!あ、あれ? 闇」

「やつと、起きたか」

闇がいるという事はここは精神空間という事になる。

「あつ、フランは?」

「大丈夫、まだ向こうでは1秒も経っていないから」

凄いな精神空間

「それよりも、おにいちゃん。このままでいいの?」

「いい訳ねえだろ。だけど、昔みたいに俺は大した力がない。そんな俺がアイツを救えるのか……」

「おにいちゃんは今フランちゃんを助けたい？」

「そりゃあ、もちろん」

「なら、これをあげる」

闇に一枚のカードを渡される。真つ黒のカードだ。

「私が力になるよ」



目を開き俺はゆっくりと立ち上がる。前には驚いた表情のフランがいた。

「なんで、なんで立っていられるの？」

「フラン。お前はお姉ちゃんが大好きなんだな」

「そんな訳無い。お姉様は私を閉じ込めた、だから」

「じゃあ、なんで泣いているんだ」

「っっ!!」

「大好きなお姉ちゃんを壊したと思っただら？ 大好きだけど恨んでいるお姉ちゃんを」

「うる・・・さい・・・」

「なら、お姉ちゃんにいつてやれよ！ 一緒に遊びたいって、一緒に居たいって!!」

「もう、やめて!!」

フランは火焰の剣を振るうがそれは黒色の影に阻まれた。

「お前もお前のお姉ちゃんも本当に不器用だな。大好きだけど傷つけ、守りたいのに傷つける。しっかりと向き合えばこんなことにならなかったのにな」

「ああああああああ!!」

「仲直りの手伝いはしてやるが今はお前を止めさせてもらうぜ」

俺は闇からもらった漆黒のカードを懐から取り出した。

「妖化「解放妖」」
あやかし

瞬間、足下の影が俺を包み込んだ。

そして、影がはじけ飛び中からは私が現れた。

真つ赤な目に腰まで伸びた漆黒の髪。女性特有の膨らんだ胸にくびれが出来ていた。

「ん？なんじゃこりゃ?!」

『私の力を全部解放したんだよ』

「でも、女になるなんて」

『まあ、元からそんな感じの顔してるからいいじゃん』

「さらっと、傷口をえぐるな!! って、おわっ!!」

闇と会話をしていると、フランに攻撃をされる。

「闇、行くぞ!!」

『うん』

俺はフランに向かって斬り掛かる。ほぼ妖怪化したことによりスピードが上がる。

「つつ!!速い」

「影符」シャドローエツジ「影の刃」

「禁忌」レーバティン」

火焰の剣と漆黒の剣がぶつかり合う。漆黒の剣が火焰の剣を受け止めながら形を変えてフランを襲う。

「くっ!!禁忌」フォーオブアカインド」

「逃がさない。影符」影の迎い手」

フランが4人に分身するが影の手によってすべて捕まえる。

「」「何これ!」「」

「これで少し頭を冷やせ。陰符」シャドローブラスト」

紅の館は黒に包まれた。

第九十二話

お兄様!?

「う、うくん」

あれ?私は何をしてたんだっけ。私、フランドールは廊下で目を覚ました。なんか、頭の下が妙に柔らかくそ、のままもう一度寝てしまいそうだ。

「ん? やつと起きたか」

「!!」

声を掛けられ意識を覚醒し自分の状況を把握する。

膝枕だ。黒髪のお姉さんに膝枕されているのだ。

私は、慌てて起き上がり距離を取る。

「そんなに、警戒しなくていいよ」

その人は、いや人なのか分からないが、さつきまで私と戦っていた人だ。途中で変な変化をしたけど……

「その……ごめんなさい」

「へっ?」

「私のせいで怪我をさせちゃって」

いくら自分が正気を保ってなかったと言つて、許される行為ではない。

私は必死で謝った。

「……………」

女?の人?はゆっくりと私に近づいてくる。そして、私の前で止まった。

そして、手をのばしてきた。

ぶたれる。

そう、思つて歯を食いしばる。しかし、その必用は無かった。のばされた手は私の頭

の上に置かれたのだ。そのまま優しくポンポンと叩かれた。

「へ？」

「気にすんな。お前が正気になって良かったよ。悪かったな吹っ飛ばしちやって」

予想外の行動で戸惑うが許してもらえたようだ。

それにしても、不思議な人だな。自分よりも他人を優先する。殺そうとしていた私を助けるなんて。

「えっと、フランでいいんだな？」

「うん。アナタは？」

「俺は天童拓也だ」

「拓也・・・男みたいな名前」

「男だから」

「えっ!？」

「今はこんなふうになってるけど男だ」

男の人だったんだ。びっくりしちゃった。

優しいな。不思議だな。一緒にいると心がポカポカする。昔、お姉様と一緒にいる時もこんな気持ちだったな。

「じゃあ、お前のお姉様のところに行くぞ。それで、仲直りしてこい」

「うん!! 拓也お兄様」

「よし!! ——ん? えっ!?!」



結果から言って。レミリアとフランは仲直り出来た。

俺とフランがレミリアのところに行った時は霊夢がレミリアを倒していた。

レミリアと霊夢に誰? って顔されて説明したら、霊夢に爆笑された。解せぬ

そのあと、フランが自分のレミリアと一緒にいたいと言う気持ちを伝えて完了。

俺の出る幕は無かった。やっぱり仲がいいっていいね。

フランにお兄様って、呼ばれた時はびっくりしたな。信頼を込めて、て感じらしいけど。まあ、嫌な気はしないからいいか。

けっしてロリコンではないからな!!

そのあと、レミリアに「私もお兄様と呼んだ方がいいかしら」とからかわれた。あんなんでそんな初対面の人からかえるんだよ!!

とりあえず、この異変は終了だ。

そのうち紫が名前をつけるだろ。宴会もやるそうだしその時は行かないとな。

最終話 幻想郷は今日も賑やかだ

「宴会だあああああ!!」

今日は、紅魔異変の宴会に来ている。

ちなみに、陽菜は向こうに置いてこつそり来た。宴会やるにしても来るのは、ほとんど妖怪や妖精らしいから念の為にね。

正直、喧嘩等に巻き込まれたくないが美味しい料理の誘惑には勝てなかった。

「おつ、来たわね拓也。ちょっと手伝いなさい」

「何でだよ霊夢。俺は手伝いに来たのではなく美味しい飯を食べきたのだ」

「手伝わないならあんたに出すものは無いわよ」

「分かったよ、手伝えばいいんだろ」

霊夢からシートを受け取り広げる。

.....
デカイシートだな。何人くるんだ？



よし。やっとシートをひき終わったな。

「お兄様あああああ!!」

「おっ! フラン——グツへえ!」

声の方へ振り返った瞬間、勢いよく飛んでいききたフランがお腹に刺さる。

なんか、前にもあつた気が

「あつ、お兄様大丈夫?」

「おう、大丈夫大丈夫。肋骨本いたたけど大丈夫」

「大丈夫じゃないよそれ!!」

「嘘だよ」

涙目で睨んでくるフランの頭を撫でてやる。するとすぐさま笑顔になり「えへへへ」と声をもらした。

何この生き物可愛い。

「相変わらずフランに好かれているわね」

「まあね。レミリア、そっちは最近仲良くしてるか」

「おかげさまでね」

日傘をさしたレミリアが近づいてきて軽く挨拶を交わす。どうやら姉妹仲は良好のようだ。

少し話をしてから俺は、スカーレット姉妹と分かれて宴会の準備を進めた。



さて、そろそろ宴会も始まりそうだな。

にしても見事に妖怪、妖精ばっかだな。

「あら、お久しぶりね」

「へ？」

急に後ろから声をかけられて振り向くとそこには見覚えのある女性がいた。

緑の髪に赤の瞳。右手にはピンク色の日傘が握られていた。

そう、後ろにいたのは。向日葵畑にいた硬い傘のおねえさん。風見幽香だった。

「Oh」

「そんなに嫌な顔しないでよ」

「嫌な顔するなっていう方が無理だよ。人生であった嫌なことトップ30には入るからな」

「随分と低いわね」

「めんどくさいのに絡まれたな。どうしよう、また戦い挑まれたら。昔ほど強くないぞ俺。」

「ねえ、ここであつたのも何かの縁だし。もう一度戦いませよ」

「いやだよ!!もう一度戦うための縁なんていららないよ」

「ふふふふ、それは残念。また、機会があつたら戦いませよ」

いやだよ!!あんとと戦つたら命がいくらあつても足りないわ。

そう心の中でいいながら風見幽香の後ろ姿を見送った。



宴会が始まり周りが賑やかになってきた。妖精や妖怪達が歌い踊り宴会を楽しんでいる。

「楽しんでいますか？」

神社の縁側で料理を食べていると後ろに隙間が開き紫が現れた。

「ああ、楽しんでるよ」

「それは良かったです」

「なあ、紫。何で幻想郷を作ったんだ」

「そうですね。作りたかったです。人も妖怪も妖精も神も関係なくいられる場所を」

「そっか。よし！今日は飲むぞ！！付き合ってくれよゆかりん」

「ゆかりんは止めてください！わかりましたお付き合いしましょう」

幻想郷は今日も賑やかだった。

オリキヤラまとめ

天童 拓也（てんどうたくや）

能力：『能力を操る程度の能力』

性別 男 身長 165cm

種族 人？

年齢 不明

・基礎能力アップ

基礎能力値を上げる能力。

（^{パワー}力） すべての能力値を1.5アップさせる

（^{アタック}攻） 攻撃力アップさせる

（^{プロテクト}守） 防御力アップさせる

（^{スピード}速） 速度アップさせる

（^{テクニク}技） 技術の模倣する

（^{アビリティ}能） 特殊能力アップさせる

一度に使えるのは三つまで。

・^{アビリティコピー}能力模倣

いくつかの条件を満たせば相手の能力が使える。

「能力の認識・能力名の認知・使用者に3分以上触れた事がある」
一度に使えるのは一つまで。

持続時間は三分。

・能力停止
アビリティストップ

相手の能力を停止させる。

相手の能力が分かっていない場合使用不可。

自分も能力が使えなくなる。

・付与
エンチャント

能力を対象の物、人に付けることができる。

・回復能力アップ
リカバリエイ

回復能力を一時的に上げる。

体力を使うため疲れると、効力が落ちる。

《体内》

「御影 闇（みかげ やみ）」

『影を操る程度の能力』

人狼の女の子？の力が封印されている状態。

《持ち物》

「鈴の腕輪」

『金属を操る程度の能力』

音無鈴が付けていた腕輪。拓也が誕生日に贈ったもの。

「妖刀村正」

『妖力を増加させる程度の能力』

妖怪の山に祀られていた妖刀。

《ひとこと》

「だいぶパワーダウンしたな。どうかして、この封印を解かないとな。」

天童 陽菜（てんどう ひな）

能力：『開閉を操る程度の能力』

性別 女 身長 159cm

種族 人

年齢 15

鍵穴など目に見えるものの開閉が出来る。心や空間、結界などは、まだ練習中
鍵の開閉 傷の開閉 口の開閉などが出来る。

《ひとこと》

「お兄ちゃんの封印が解けるように頑張ります」

《拓也が所属していたチーム7班》

音無 凜（おとなしりん）

『金属を操る程度の能力』

剛力 要（ごうりきかなめ）

『ありとあらゆる物を貫く程度の能力』

薬師 恵（やくしめぐみ）

『傷を癒す程度の能力』

《チーム7班の教官》

草壁 緑（くさかべ みどり）

『植物を操る程度の能力』



《拓也の同期のチーム5班》

墨野 絵里（すみの えり）

『絵を具現化する程度の能力』

生糸 小鞠（きいと こまり）

『繊維を操る程度の能力』

原 子穂（はら しほ）

『原子を操る程度の能力』

夢彩 結（いぶき ゆい）

『五感を繋ぐ程度の能力』

《拓也が教官を務めたチーム》

美紙 彩（みかみ あや）

『紙を操る程度の能力』

渋谷 霧栄（しぶや きりえ）

『霧を操る程度の能力』

剛力 円（ごうりき まどか）

『ありとあらゆる物を遮る程度の能力』

音無 響（おとなし ひびき）

『音を操る程度の能力』

《妖怪》

劣鬼（れつき）

『劣化させる程度の能力』

重鬼（じゅうき）

『重力を操る程度の能力』

灰色の男（名前不明）

『天災を操る程度の能力』

グレイ・スモーク

『煙を操る程度の能力』

天魔

『空気を操る程度の能力』

《神》

月明 光（つきあかり ひかり）
『光を司る程度の能力』

《人間》

《クラスメイト》

化野言音（あだしの ことね）

楠 陸斗（くすのき りくと）

海堂 闌（かいどう らん）

《先生》

神薙 巫月（かんなぎ みつき）

水戸 瑞稀（みと みずき）